

建都1200年
に向かって

京都国際居住年推進協議会協賛

ライフ・ウォッチング
'88

京デ協

京都デザイン関連団体協議会

第八回

京都デザイン会議

会議録

目

次

開会あいさつ

柴田 献一（京都デザイン関連団体協議会議長）

祝辞
京都・町おこし

前田 敏男（京都国際居住年推進協議会会长）

「町の呼吸音を聞く」
都の暮らし・鄙の暮らし

木下 博夫（京都市助役）

「つるの栖み家」

清家 清（建築家）

九分科会こだわりトーケセツシヨン

○第一分科会 建築におけるガラス芸術 光と陰 のこなし方

トーキリーダー 三浦 啓子（グラスアーティスト）

担 当 嶋 高宏

○第二分科会 民家にこだわるとアートがハートになっちゃう
トーキリーダー 梅棹 まやお（陶芸家）

担 当 黒竹 節人

○第三分科会 食道楽は文化の美食家か、否もつと偉い

トーキリーダー 川端 道喜（ちまき司・随筆家）

担 当 伊部 京子

○第四分科会 家にも錢湯があつてよいのだ

トーキリーダー 小倉一夫（雑誌「手わざ」編集長）

担 当 谷口 主嘉

目次

参加者名簿・運営委員会名簿

過去七年の内容紹介

三分間スピーチ　トークリーダーによる総まとめ

- 第五分科会 新「素食」のおすすめ
トークリーダー 森本 武（嵯峨美術短期大学助教授）
担当 当 恩地 悅
- 第六分科会 とことん、ほんまもんつて何やろ
トークリーダー 吉田 孝次郎（無名舎主人・画家）
担当 当 中村 隆一
- 第七分科会 ふだん着のおしゃれ、知恵のおしゃれ
トーキークリーダー 野間 光輪子（主婦建築家）
担当 当 奈良 磐雄
- 第八分科会 システムキッキン文化は偽物である
トーキークリーダー 山口 昌伴（GK道具学研究所長）
担当 当 みね ゆうこ
- 第九分科会 儲かりまっせ！？ ハウスハンズギャラリー
トーキークリーダー 平田 滋（プランナー）
担当 当 道家 駿太郎

開会あいさつ

柴田 純一

京都デザイン関連団体協議会議長



みなさん、こんにちは。

折角の日曜日、しかも本日は大安、結婚式の予定もあったのではないかと思いますが、このようなくさんのみなさまにお集まり頂きまして、「第八回京都デザイン会議」を開催出来ますことを心より感謝致します。

「京都デザイン会議」は、昨年までは、デザイン関係八団体の集まり、「京都デザイン協議会」が主催して参りましたが、昨年、十二団体と充実、新たなる出発を致しまして、「京都デザイン関連団体協議会」、略しまして「京デ協」というものを発足させました。その「京デ協」主催の第二回目の「デザイン会議」がこの第八回、本日の会議でございます。テーマは「国際居住年」に因みまして、「ライフ・ウォッキング」。衣食住にうんとこだわってみよう、もつと暮らしに好奇心を、という意味合いを、この「ウォッキング」に籠めてみました。暮らし、と一口に申しましても、「我が家」だけを見していくは、ほんとうの意味で、「暮らし」は語れないと思います。居住、そこに住むということは周りの環境から個々のもの、それは例えば、飛行機の中のインテリアだったり、自動車のインテリアも含まれるでしょうし、都市の居住性、マチの居住性を考えれば、病院の居住性、老人ホームの居住性、幼稚園の居住性等々、そしてストリート、界限の居住性といふことも同時に考えてゆかねばならない大切な問題となってしまいます。

本日はご講演者として、東京から建築家の清家清先生、そして京都市からは木下助役をお招き致しております。清家先生は、今さら紹介するまでもないと思いますが、非常に「暮らし」という問題を大切に「家」を建てて来られました。先生の作品の中で、「トイレにドアのない家」(『私の家』一九五四)というのがあります。トイレというのは家中でも特に封じ込められたようなところがあります。そのトイレからドアをとった。ドアをとるとどうなるかと申しますと、のぞくことが出来る(笑)。あるいは大人と子供が一緒に入った想から生まれてくると思います。「トイレはこうあるべきだ」という概念をひっくり返している。非常に興味深く思いましたし、同時にこういう「発想」から、つまり形の変化から生活は変わるんだな、という大いなるヒントを頂きました。もう一つ、先生の作品の中で私が特に印象深く思っているのが、あの心理学者の「宮城音弥邸」です。この家では子供さんだけが「個室」を持つていて、他の部分はみんなご両親のもの。こういう家を、私は、「居住思想」を持っている家と呼びたいと思います。本日の分科会では、是非「何にこだわって生活するのか」という「こだわり」について、大いに語り合って頂きたい、大井戸端会議を催したい、と思います。今日は楽しい日曜日、になることを期待しております。

「居住思想」を持つた家

前田 敏男

祝辞

京都国際居住年推進協議会会長

第八回京都デザイン会議にあたりまして、一言
ご挨拶申し上げます。

一九八七年は、国際連合の決議により「国際居住年」と宣言され、世界各国が「住まい」とそれを取り巻く環境について、二十一世紀を展望して、改善の具体的な方法を探る年として位置づけられました。

我が国の住まいの状況について見ますと、衣・食等に関する消費生活の水準や欧米先進諸国の水準に比べると、その立ち遅れが目立ち、改善を図る必要性は極めて高いと言えます。戦後、量的に住宅建設を進めてきた結果、基本的な居住水準が改善される中で、人々の「居住」に対する意識や要求は、ハードからソフトへ、「個」の問題から「群」の問題へと広がりを見せていました。その結果、魅力ある「居住」の実現が、住宅だけの問題にとどまらず、地域の気候風土や生活に根ざした確かな経済活動や、豊かな生活文化と密接に関わる課題であることに気づき始めています。

私どもの「京都国際居住年推進協議会」も、こうした基本的認識のもとに、京都府下の各界・各層が幅広く連携し、今後の居住の在り方を明らかにし、その実現の道を拓くことを目指して発足しました。

こうした時に、「人と住まい」をテーマに京都のデザイン界の方々が一同に会して、第八回「京都デザイン会議」が開催されたことは、まさに時宜を得た取組みと存じます。大量生産型の社会から「質」を問う社会に移行しつつある今日、その根源は、人々の日常と生活の中にこそ求められるべきであります。そうした日々の生活を支えるものが住まいであり、その中で営まれる暮らししが豊かであって初めて、目指すべき「質」が明らかとなります。この時、今回ご参集されたデザイナーの方々の役割には大変大きなものがあると考えております。すなわち、造り手と住み手を結ぶ役割であります。

造り手、住み手双方が本質を求めて混迷する今日、住み手の多様な生活要求の中から、デザイナーの鋭い洞察力により生活の本質を見抜き、造り手と住み手に提案していく役割りです。このことにより、住み手は消費者としてではなく、生活者としてより豊かに暮らす術を得、造り手は、生活文化に立脚し、それ故に国際化の中で固有のアイデンティティを持ち、生活者に支持された造り手となり得ると考えています。特に京都という土壤は、そうしたものを豊富に持ち、全国、全世界に発信していく可能性を持つています。

今回の会議を契機としていただきて、豊かな生活文化的創造と地域産業の振興、更には、より良いまちづくりに向けて、今後の益々のご研鑽とご活躍を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

個から群へ、デザインの力

京の町おこし

都

町の呼吸音を聞く

木下 博夫
京都市助役

木下でございます。私は役人でございますので、こういうデザインの専門の方々の前でデザインの話をすることは出来ませんが、「町おこし」——これは本会議の実行委員会から与えられたテーマですが、このテーマに沿って、自分の立場で捉えられる、私なりの「町」についてのお話をさせて頂こうと思います。しかし私はあくまで前座でござります(笑)。清家先生が、私の後、専門的なご意見を述べられると思いますが、とりあえず、テーマ通りにまとめられるかどうかは流れに委せまして、私の見た京都、私の考える町おこしについて述べて参りたいと存じます。

私事で恐縮ですが、実は私、京都には学生時代に六年、市へ就職致しまして四年と計十年しかまだ住んでおりません。歴史のある京都に対しても充分な認識に欠けるところもあると思いますが、「中途半端」なりに一人の京に住む人間の持つ京都への疑問などを通して京都を見てみたいと思います。

私は市で「町作り」という分野の仕事を致しております。そこで感じる京都という町が、最近は少し元気がない。何とか京都の町を元気にしたい。元気というのは賑やかさ、便利さだけを言うんじゃない。京都には既に十分豊かさはある。財産はある。それが溢れている町。しかしどうも元気がない。どうしてでしょう。守るのに一所懸命で、創っていくことが遅れている、そういう気がします。そこで、何とか京都の町に元気を!——ということで、元気になる方法を考えてみました。一つには「若さ」——これは精神的に若い人たちが京都に住むということです。二つめは利便さ。交通の

便、買い物の便、住むための便の充実ということ。三つめは、これは基本事項ですが、経済・産業の発展。四つめ、これが一番大切な要素だと思うんです。ですが、「情報量」——京都発の情報が多いか少ないかということ。もちろんこの四つめだけが肥大してもいけない。一から四のバランスが整った時、初めて、都市として機能するのではないかと思ひます。

次にこのことを全国レベルで展開していくかないと實際には理想論で終わってしまいます。つまり京都を考える時には日本を、そして日本を考える時には国際的位置における日本を、考えてゆかなくてはなりません。ここで現在、国レベルでは「第四次全国総合開発計画」をベースに動いています。このポイントを私の個人的理解、個人的分析で申しますと、まず、東京をどうするかということ。「首都東京」の国際都市としての位置付け——東京を他の諸外国の都市と比べて見劣りなくすること。もう一つは、この東京を中心にして他都市を考える時、大切になってくるのが、対東京としての地域性であります。今後は日本の都市はもつと地域性を表出して整備が行なわれなければならないと思います。「遷都論」が賑わう中、「首都東京」の話を致しますのは、かつて京都は「都」でした、しかし今は違う、このことを明確に認識して「京都」を見ていかなければいけないと思ふんです。都に上る」という言葉があります。かつて「都」には「上の」に足る「情報」がありました。今はその情報は、やはり東京に過度に偏在しています。現在の京都は情報という面ではその魅力は薄れています。



きています。私は京都の持つボテンシャルを基礎にもつと地域的特質を生かせば、と考えます。すると不思議なことに、京都は逆に日本の中心となることがあります。“日本の顔”となることが出来ます。なぜか。他都市と京都の大きな違いは、そこに住んでいる人だけじゃなく、外の人もこの町に期待しているところです。日本のふるさとなんです。だからこそ国の援助も望めると思うんです。それは具体的に京都をどういうふうに考えてゆくかと申しますと、これまた四つのアイテムがあると思います。

(一)文化
(二)国際化
(三)福祉（特に高齢化）
(四)広域化

(一)文化は全体の・もの・さしになると思います。(二)は、例えば京都には留学生が多くいます。彼らの受け皿として京都という場所は機能しなければなりません。そして京都には日本初の「国際会議場」がありますが、これも器だけでなく、もっと機能させいかなくてはなりません。(三)の福祉、高齢化の問題ではシルバーの場所作りが必要です。京都全域では九人に一人が六十五才以上、都心になりますと五人に一人という割合でお年寄りの方々が増えています。この方々たちに“生きがい”といふ舞台装置を作つてゆかねばなりません。(四)の広域化というのは、京都をクローズな町から「抜けゆく町」へということです。この動きは亀岡の九号バイパスの開設、学研都市の建設にみられます。これらが完成すると京都の中心にも多大な変化が

起こつてくる、それは経済面ばかりでなく生活面にも及んでくる。

話を(一)の文化に戻しますと、国際化も、福祉も、広域化も、その根底に“文化”を持つているといふことが京都の地域的特質を出す、ひいては“日本の顔”になる重要なポイントだと思います。文化化というものは産業・経済においても必須条件です。しかしこの四つのアイテムを生かしてゆくためにはまた四つの課題があります。

(一)狭さ
(二)新旧の調和
(三)一級品の維持
(四)財源の問題

(一)は物理的な問題なので、解消するのは非常に難しい。しかし文化、言い換えれば知恵で京の人たちは、(一)を解消して来ました。坪庭、襖絵などは空間的狭さを視覚で解消した好例と言えます。よく言われることがですが、京には山がある。川がある。そして京はそれでもなお都市として存在する。こういう景観を町中に持つ都市というのは稀です。東京ではあり得ない、望めない景観です。京都はこの山や川を借景として、狭さを解消してきた。山と川の要素、緑と水というこの有難い自然是京都をこれから町にしてゆくヒントを含んでいます。(二)の新旧の調和は是非やり遂げねばならないことです。私は「町は生きもの」と思っています。それは常に新陳代謝をしている。伝統は使われて初めて生きる。そして新しい伝統が生まれる、と考えます。(三)の一級品の維持は、



(二)と大いに関連があります。つい最近、高尾の神護寺に行って来たんですが、それは素晴らしいでした。そこにある宝物は、現在ではどんなにお金をかけても作れない。これは伝統です。しかしこの伝統を我々が視るということで、伝統は消費されている訳です。京の一級品は美術品、工芸品に限りません。美味しいお豆腐というのも京の一級品です。この一級品をわざわざ買いにゆく。一級品としての実力がここにあります。一級品を残さなくてはならない。そして新たなる一級品を作つてはならない。そして新たな一級品を作つてはならない。四の財源問題は、先ほどいかなくてはならない。四の財源問題は、先ほど国援助ということを申しましたが、国の補助金は京にはどうしても必要です。古都税問題は、昨年京を搖るがせました。古都税に関しては異論もありましたが、京都には山と農地、そして学校、病院、寺社と減免されている対象が多く、そのため固定資産税収入が他都市に比べて大変少ない。個人の家屋も老朽化していますので、評価額が低い。因に京都市民のみなさんに収めて頂いている税金は全国の平均に対して約二万円余りも少ない。

京都市の台所の苦しさを何とかするためには、やはり国の補助金が必要です。京の景観を、自然を壊さず、日本人の心のふるさと京都を守るためには、どうしてもこれは外せません。同時に、民間の方々の活躍する場所を増やすことによって、官と民との間で役割分担を致しまして、京都の町を豊かにしたい。京都を美しく、かつ逞しい町に育てあげたい。そこで例えれば官と民とが一緒になつて出来ることと申しますと——本日お集まりの

みなさんのお仕事で考えれば「ガソリンスタン

ド」、銀行などのシャッター——あれ、何とかなりませんでしょうか。京都らしいガソリンスタンドがあつてもいいのではないでしょうか。旗が翻つていれば「目立つ」というものではないと思います。あの賑やかさと同居する味けなさは一体、何でしょう。あそこは全く、殺伐とした場所だと思うのですが。銀行のシャッター、どうして、あそこに、「こんなにお得」とか「マル優最後のチャンス」と書かねばならないのでしょうか。もつと素敵なシャッターがあつてもいいと思う。その方が却つて目立つのではないでしょうか。キザな言い方をすれば「良貨が悪貨を駆逐出来る町」に京都をしてゆきたいと思います。

最後に一つ、これは私の全く個人的な提案なんですが、是非みなさん、「都市の音」というものを考えて頂きたい。例えば横断歩道のあのメロディです。あれはもっと考慮出来るのではないかでしょうか。都市は光と音を持っています。ノイズもまた都市の魅力の一つです。しかし今やノイズという言葉は「雑音」だけを指しません。それは都市の呼吸音です。決して心地良さだけを言つていいではありません。「町が生きている」、「都市が生きている」——そういう証拠としての「音」を考えたい。

町は、都市はそこに住むとともに生きています。呼吸しています。

都

の

暮らし

つるの

栖み家

いかに美しく生きるか

清家
建築家

清

家と家

京、我がふるさと

清家清という名についてはよくペニネームでは

ないかと聞かれますが、本名です(笑)。家作りに

関わっている者としては、この姓は結構気に入っ

ています(笑)。「家」という字は「宍」(ウカシム

リ=屋根)が付いています。これに対し、「冢」と

いう字は「冂」(ワカシムリ)に「冢」です。冢は

祖靈に捧げられたた燔祭の犠牲です。冢は塚と書

いたほうがよくわかりますが墓地です。家も冢も

祖先を祭祀する場です。家という字は家系とか、

清水一家などのように、ファミリーとかシンジケ

ートのようなものを意味します。

それで、普通に工務店が建ててくれる家は漢字

では家という字のほうが当っています。英語なら

宅はハウスです。家はホームです。

私はこの会場の近く、岡崎・天王町で生まれま

した。冢は若王子の山の上にあります。学齢に達

する直前須磨に移りました。須磨は、京という都

の広域文化圏、いわゆる畿内の隅だったのです。

京ことばでスマというのは隅という意です。そ

うことで、須磨も京の一隅と思って頂ければ、私も京男の仲間入りをさせて頂けるかもしれません。特にこれは自慢してもいいかと思うのですが、京男の仲間入りをさせて頂けるかもしれないですが、そこへ叔母に連れられて行った事が何度かあります。もちろん「女湯」です(笑)。叔父が祇園乙部で写真屋をしていました。祇園の女湯でうぶ湯——ではないまでも、疏水の水でうぶ湯に

浸ったことは確かです。それから東京に移り、現在に至る訳ですが、京は我がふるさと、まさしく私は京男でございます(笑)。

本日のテーマ「都の暮らし——鄙の暮らし」を考えます時に私は『方丈記』を思います。私も鴨長明ではありませんが「つるの栖み家」を求める年齢になつて参りました。最後の住居の場所はやはり京都と考えておりますが、長明の栖んだ洛北・大原か、伏見・日野か——それはまだ決めておりませんが、京都にはもう一度住んでみたいと思つています。

私は自分の人生の中で、鄙と都を住み分けた訳ですが、これは自らが望んでというのではなく、たまたま須磨という京の場末に、今、東京という「新しい東の都」に住んでいる訳です。では昔からの京都という場所が、現在鄙か都かというところは難しい問題です。結論を先に申しますと、これも長明の考えと同じなのですが、その人の住み方、心の有り様で、その場所が、鄙か都か決まってくるのではないかと思います。つまりその人の価値観が、それを決めると思います。アメニティ、居住環境の良さということが、都、つまり都市の条件です。そしてこのアメニティというものはデジタルな数字数値では表現出来ません。アメニティは精神的価値です。アメニティはプライス(価格)ではなくてヴァリュウ(価値)なのです。

廁の風流

トイレにこだわる

最初に柴田さんが「私の家」のドアのないトイ

うぶ湯——ではないまでも、疏水の水でうぶ湯に



レの話を出されました。私は、考えてみますとずっと、トイレ、廁というものにこだわって来ました(笑)。人間は生きている限り、どんな美しい人もウンコをします。都市もまたウンコをします。都市が成熟すればするほどウンコの量も多くなります。ゴミです。私は“大人の都市”というものはこの排泄物をきちんと始末出来なければいけないと思うんですね。

昔はウンコはいい、ないものではありませんでした。邪魔物ではなかった。植物の肥料として、役に立つものでした。古代の人たちはそういう自然の循環、ウンコを土に戻すということを神秘的なサイクルと捉えていた。ウンコ尊敬していた(笑)。人もまたいつかは土に戻ります。私自身もそのうち粗大ゴミになる(笑)。しかしこれは当たり前だけ大切なこと。だから人は、その土に戻るまでの間、「いかに美しく生きるか」ということを考えなければならない。木下さんのお話にもありましたように老齢化ということを考える場合も、私はやはり「いかに美しく生きるか」ということが基本になくてはいけなんじやないかと思うんですね。そういう意味でも長明は美しく生きた。「つの栖み家」はそういう生き方の場所だった。実際に風流な暮らしだった。

風流ということとトイレ——これを実にうまく語ったのが、谷崎潤一郎だと思います。あの有名な『陰翳礼讃』の一部をここに引用させて頂こうと思います。

繰り返して云うが、或る程度の薄暗さと、徹

底的に清潔であることと、蚊の呻りさえ耳につくような静かさとが、必須の条件なのである。私はそう云う廁にあって、しとしとと降る雨の音を聴くのを好む。殊に関東の廁には、床に細長い掃き出し窓がついているので、軒端や木の葉からしたたり落ちる点滴が、石燈籠の根を洗い飛び石の苔を湿おしつゝ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしお耳に近く聴くことが出来る。まことに廁は虫の音によく、鳥の声によく、月夜にもまたふさわしく、四季おりおりの物のあわれを味わうのに最も適した場所であつて、恐らく古来の俳人は此處から無数の題材を得ているのであろう。されば日本の建築の中で、一番風流に出来ているのは廁であるとも云えなくはない。

私はここに“人間の文化”があると思うんですね。アメニティの尺度は実はこの文化なんですね。文明では決してありません。

軽チヤー

新シガルコト

それでは“文化”とは一体何でしよう。まず辞書で文化を確めてみましょう。大槻文彦さんの『大言海』の「ぶんくわ」の項には「西洋風ナルコト。又、新シガルコト」と出て来ます。そして例として「文化住宅・文化村・文化的設備」——ついでに文化、まんじゅうも入れておきましょうか(笑)。「大言海」のこの記述は昭和十年のものですが、当時の“文化”がうまく言い表わされています。

また昭和二十一年に作られた「日本国憲法」第二五条には、「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。國は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とあります。「健康で文化的な生活」というのは、戦後の日本にとって具体的にはどういうものだったのでしょうか。

こんな話があります。戦後、東北大学農学部に「生活科学科」というものが出来まして、私もお手伝いさせて頂いたのですが、農村のカマドの改良——今でいうシステムキッチンの普及ということで「文化カマド」なるものを作りました（笑）。この文化カマドにニックネームが付きましてね。その名も「嫁ごろしカマド」（笑）。どうしてこんな名が付いたかといふと、確かに文化カマドは便利だった。しかしそのために、嫁がカマドの具合を見たりしていた時間が省かれて、「休む」ことが出来なくなつた。カマドが勝手にご飯を炊いてくれるもんだから、嫁はその間も他の仕事をして働く（笑）。それで私、大変、この文化というのに疑問を持った。ハードの改善、これは文化じやなくて「文明」だ。文化っていうのは、生活の改良にこそあるんだ。嫁が泣かなくてもいいカマドを作るという時、「嫁姑の改善」が先決だ、という考え方を持っていなくちや、ほんとうの「文化カマド」は作れないってね。

現代は文化大流行で、カルチャー、カルチャー



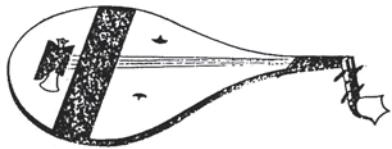
つてみんな言うけれど、これは「軽チャーチ」だね（笑）。美術館でルノワールをやれば女性客がいっぱい入る（笑）。暮には必ず「第九」を聞く——これが軽チャーチことみたいなんですね。私たちは冗談でよく言うんだけれど「第九」はペートーベンが大工さん、我々建築家のために作ったんだけって（笑）。「ハレルヤ」は気象台のために——最後はちゃんと「アーメン（雨）」で終わっている（笑）。

文化って言うのは谷崎の廁、鴨長明の「一間の庵」だと私は思っています。

鄙のアイデンティティ

「方丈の間」の美学

ここでちょっと建築家らしく話をまじめにしますとね（笑）、長明の「一間の庵」っていうのは、今、想像するよりずっと広いんですよ。廁はなかつたみたいだけど（笑）、長明の「方丈の間」は一間四方——つまり十尺四方——約三メートル×三メートル——関東の団地サイズの四畳半なんかよりずっと広い。それにしても団地サイズっていうのはひどいねえ。京都はいいですよ。京間の広さは、都の豊かさそれが文化に繋がる。東京はそういう意味では文化程度が低い。なにせ田舎間といふぐらいだから（笑）。大体、ウンコをきちんと始来出来ないしね。私が住んでいる所は東京南郊の大森ですがアメニティの劣化に悩んでいます。天気のいい日なんか、みなさんが一齊に洗濯しまでしょ、すると水洗トイレも湯沸しもうまく作動しない。都市のインフラストラクチャーとして



最も重要な上水道の水圧が低下しているんです。東京は「つゐの栖み家」にはなり得ない。こういうのも「暴言」かな(笑)。例のサントリーの佐治さんの「東北・熊襲」発言——不買運動つていうのはなんかいやらしいね。田舎の人は人がいいって言うけれど疑問だね。で、私もここで「暴言」吐くと、また問題になっちゃうから、大阪教育大学の教授だった村田迪雄氏の著書『ムラは滅ぶ』(日本経済評論社)を引用させて頂くことで、私の想いを語ることにしましょう。

農民の顔が悪くなつた。四〇~五〇才代の男の顔をみると、この顔は百姓の顔でない、かといって労働者顔でもない。七〇才以上の老人たちの顔は、さすがに生涯を労働と貧困に堪えて生きぬいてきたもののちうる誠実・素朴の顔である。しかしこの四〇~五〇才の男はプローカーの顔をしている。どこか穴場をねらつてボロイもうけをしてやろうという顔である。精神の碇泊地を失つたものの顔である。ムラの亡びが近づくにつれて、この種の顔が確実にふえるだろう。」

現に生き馬の目を抜く江戸村の村会議員さんはだいたいこの種の顔つきです。かつてムラは文化を持つていました。文化カマドはなくとも「生活の智慧」が既に文化だった。ところがムラが滅ぶ——つまり文明によつて村の解体が起こつているんだけれど、そうするとそこで暮らす人たちの「顔」まで変わつてしまふ。今の東北はこの正に

「ムラは滅ぶ」の状態にある。このことを、R・J・ルバスキーの「東奥日報」(昭和五十一年六月十五日)の一文はさらに具体的に説明しています。

(前略) その農家は、土地の売却でみな大金持ちになり、いたる所に富裕の印が見られた。(略) 道路の向こうに、新築間もない、広大かつ極めて派手な感じの家が一軒あるのに気がついて、(略) 私は数分間、驚きのまなざしをその家にそそいだ。いや肝ををつぶした、という方が正確である。生まれて初めて目にした、地球上で最も醜い建物であった。

丸窓あり、四角な窓あり、六角の窓あり、それがいずれも、お互いに不つり合いでバラバラの感じを与えた。

(略) この家の場合、これから先起ることとの証(あかし)がみられた。この家の醜さとその持ち主が、金目当てに土地を手放したという事実は無縁ではない。

土地は人の歴史の座であり、家族の座であり、帰属感を持たせてくれる場であり、恩義の場であつた。

(後略)

もう全く、その通りだと、私も思います。

ルバスキー氏の見た東北は、どう弁解したつて、文化レベルが低い。佐治さんに言われても仕方がない。ついでに言つちやうと(笑)、熊襲というの

は決して軽蔑の意をこめた差別語じやないですよ。

逆に東北の何處かの村長さんが熊襲と云われたのを軽蔑の意としたのなら、本当に怒らなければならないのは熊襲族のほうなのです。

日本の文化はだいたい二つに分かれている。平維盛が源頼朝追討に富士川で対陣して以来、その境は富士山です。電力はここで五十ヘルツと六十ヘルツに分かれる。その昔、征夷大将軍という位がありましたね。征夷大将軍というのはもともとは東夷征伐の將軍でした。史実によれば七九四年、大伴弟麻呂が征夷大将軍に任せられたのが最初ということですが、十九世紀まで続いた官制です。

賴朝以来、源氏でなくては征夷大将軍になれないことになり、秀吉は平氏だったとかで攝政関白でした。家康は源氏と称して征夷大将軍となりました。江戸、つまり東京という“都”はそういう勘違いから出来たのかも知れません(笑)。江戸は都文化のフロンティアとしての存在。そして東北は源氏のアイデンティティであった、これは確かです。今、平将門の怨霊が東京を徘徊しているのは、何か因縁めいています(笑)。東京は平家に呪われている(笑)。

ところで征夷大将軍にとつてかわった明治政府の中心は薩長でした。薩摩は隼人族の本拠ですが、熊本県球磨郡は熊族の、鹿児島県曾於郡が襲族の根拠地で、いわゆるまつろわぬものどもとして大和朝廷に対抗していた部族だったようです。東北の村長さんが熊襲と間違われて怒るいわれは全くないのでしょう。薩長は江戸、東京に来ると、かつての征夷大将軍よろしく東北を

敵視、それに目を向けました。陸軍の第二師団が東北帝国大学が第二高等学校が次ぎに仙台に出来たこととそれは無縁ではありません。会津藩白虎隊はじめ薩長に制圧された東北熊襲文化が東北を席捲したのです。東京のアイデンティティとしての現在の東北はむしろ熊襲文化と言つてもいいんじやないでしょうか。東北には熊襲の感性が移された。神話時代にはクマソ、ハヤトなど南九州の荒俗^{ハルス}の比喩、「古事記」のヤマトタケルや、「日本書記」の景行天皇の征西説話など、都と鄙がコンフリクトな状況にあつた事を示しているようです。

佐治さんの弁護はこれくらいにして、都と鄙の話に戻りましょう。都というのは都の文化がいかに生きているかということだと思います。鴨長明の方丈の間では、關伽棚に阿弥陀さんの絵像が祀られ、法華經が読まれ、棚には書物、傍には、琴や琵琶が置かれていました。そこには、文学、絵画、音楽、そして思想がありました。そこには、例え「日野山の奥」であつても、都なんです。京にはそういうそれこそ数字では測り知れない、“都らしい文化”があります。谷崎の廁の風流は、今ではもう東京で語ることは難しいと思います。千年の歴史を持つ京都がどうして、たった四百年の江戸の、あるいは二百年のニューヨークの真似をしたがるのでしょう。

いかに美しく生きるか——私がそう考えた時「つるの栖み家」は京都だと思った——これが今日の結論です。



第一分科会

建築におけるガラス芸術—光と影のこなし方

トータル・リーダー…三浦 啓子（グラスアーティスト）
担当
..嶋 高宏（KDA）

宮井 欣二（KDA）	萩尾 茂久（日図）	熊谷 實（NDK）	塩山 秀子（KDK）	山田 芙美子（主婦）	高見沢 徹（西洋環境開発）	内貴 秀和（西洋環境開発）	今川 慶子（KDA）	森下あおい（KDK）	大木ミヤ子（KDA）	上田 年子（KDK）
------------	-----------	-----------	------------	------------	---------------	---------------	------------	------------	------------	------------

出席者（発言順）

橋本奈良二（KIS）	衛藤 照夫（建築）	国吉 公一（建築）	伊勢谷圭作（伊勢谷特殊硝子）	津守順 守（日図）	谷口 智子（ICC）	浅田 篤志（KCC）	近藤 正雄（庭園）
------------	-----------	-----------	----------------	-----------	------------	------------	-----------

光の造形

光の質を問う



羽生産業文化会館（建造物写真はいずれも三浦氏作品）

嶋 本日の第一分科会ですけれども、建築の中のガラス芸術、特に“光と影”的こなし方、ということで話し合ってみたいと思います。今日は、現在ステンドグラスの制作を中心広く活動しておられますグラスアーティスト、三浦啓子さんをトーキクリーダーとしてお迎えしております。まず三浦さんのお話を伺った後、様々な角度から皆様の御意見を頂きまして、討議を進めて参りたいと思います。三浦さんの方でスライドとビデオを準備されておりますので、まずそれを見せて頂いて、討議に入りたいと思います。それではお願ひ致します。

三浦 御紹介頂きました三浦でございます。

私、光の質と申しますか、アイデンティティのある光空間を求めて来まして、もう二十年になろうとしております。けれども最近の建築物を見ましても、一体、光を、光そのものとして、單なる明るさじゃなく、光を質として捉えている空間がどれほどあるでしょう。一方、日本には、湿気を含んだ柔らかい空間で高質の光を捉え、それを日常の暮らしに生かすという、素晴らしい伝統がありました。

る明るさとしておとしめられてしまいました。私達もただ平面的に明るいことに慣らされ、光が本来持っているはずの“質”を生かすことを忘れてかけていくように思います。この光の質を現代建築の中に復活させたい、光感覚を建築の中に生かした空間を生み出したいと希望しているわけでございます。

それでは、少しスライドを御覧頂きたいと存じます……。

※落ち着いた美しいメロディの伴奏付きで、三浦さんの精力的な作家活動の軌跡を示す作品群のスライド映写。解説はもちろん三浦さん自身。ダイナミックな光空間が次々と展開され、出席者の中から思わずタメ息も聞こえて……。スライド数は百点に近いが、紙上ではほんの数点しか掲載出来ず、色彩および質としての光の再現ができないのが大変残念……。

さらに、テレビカメラが映し出した三浦さんのアトリエ及び制作風景のビデオが流され、一同興味津々……。三十分が瞬く間に過ぎて――

さきほどの講演にもありましたように、廁に差し込む光の柔らかさを楽しむ感性が日本にはあつたわけです。それが現在すっかり麻痺してしまつた原因の一つが、建築用の板ガラスなんですね。これが大量生産され、使われ出した時、光は単な

三浦 ありがとうございました。私、ステンドグラスに入る前は油絵をやつっていました、ところがどうもうまくいかない。ふと参りました教会で、祈りの中の神といいますか、意外な、不思議な体験をして後、アメリカへ渡りました。そこでシャガールのステンドグラスに出会いまして、光の美しさ、偉大さに眼を開かれた、というところから始っております。

嶋：いまのスライドで、大体のところは、皆さんお分かりになつたんじやないかと思います。今日は建築家の方も何人かお見えですし、またファッション関係の方にはファッショント空間として捉えたいという人もいらっしゃるので、いろいろ御

意見が出るんじやないかと思いますが。

橋本 鑄金やつてます、橋本です。ビルの内装外装に関係してまして、いまスライドでも出ました

アクティ大阪なんかも一階の「世界は大阪から」というのはうちでやりました。

二、三お聞きしたいんですけど、三浦さんのところのロクレール、このロクレールというものは。

三浦 これ、私の造語なんです。ロック（岩）と

フランス語のクレール（輝く）をくっつけて、レンズグラスの塊りが生み出す無垢の光をイメージしたんです。

橋本 なるほど。それから、普通ステンドグラス

は鉛で接合しますわな。先生のはエポキシ樹脂だけ

で留めておられる、中にコアが入らんと、これ

もちませんわね。

三浦 はい入ってます。これもいま研究中なんです。

橋本 しかし何ですか、ダイナミックちゅうか、ほとんどこれは、レリーフ、彫刻ですね。

三浦 優しい光を出そうと思うと、余計ダイナミックにしないといけないんです。

嶋 建築家の方、何人かおいでですけれども、いかがですか、何か。

ガラスの塊

光の力・優しさ

衛藤 あの、建築設計やつております衛藤と申します。ステンドグラスいうのは、これ平面ですよ。この平面、私、お世話になつた建築の先生の言葉で「室内を染める」というのがあつたんです

が、例えばゴシック建築では大面積のステンドグラス作つて、室内を染めあげるというか、影響力の大きい空間にしている。

三浦さんの御説明で、現代の感覚、スピードや明るさの事が出てましたけど、その辺のことを私も考えてまして。例えば商店建築という明確な目的性を持った建築を考えても、ステンドグラスなんかを効果的に使えないかなと思うんです。それも中世の教会の薄暗い光じゃなく、もつと明るくてスピーディで、大勢の人が楽しめる形で使えるかなということなんですね。

三浦 ほんとに、私もそう思います。作品の目的も群衆の中とどうか、大勢の人の心に訴えかけるものでありたい、ごく少数の人だけが、閉鎖的な場で享受するものであつてはいけないと思うんですね。

それに、光というものの、光自身が発光し、床に落ちて、そこからまた湧き上るような、そんな光の美しさというものは、本来透明であつて、決してギラギラしないものなんです。しかも力強い。そういう美しい光がほしいと思うほど、影というのも大切になつてくるんですね。

嶋 強い光は強い影を伴う…。

三浦 そうです。影といえばパロック建築なんかも好きですが、あの場合、彫刻の一つひとつがディテールとして強く出て来ている。私は、豊かで大らかな光空間、日本人が本来持つてゐる素晴らしい光感覚、例えば障子を透かして来る光とかを生かした空間そのものの美しさを、現代建築に生かせたらと思うんです。

橋本 そういった試みはいろいろと。

ガラスの塊そのものですからね、迫力あります。さきほどの言葉でね、一つお聞きしたいのは、

三浦 ええ、例えば、まだ模型なんですが、ヨーロッパの礼拝堂をイメージして作ったもので、周囲の壁にスリット状にレンズグラスをはめ

込んで、この壁がそのまま空間をとりまく発光体となるような、そんな理想の光空間というるものも

考えております。これに全面的に光があたった場合、柱とか他のエレメントまで輝きの中で輪郭を失ってしまうし、光の角度によって、一日に一度虹が出来るんです。

橋本 作風の変化みたいなものはあるんですか。

これだけやつておられるうちに。

三浦 今まで、ブルーに挑戦したこと也有つた

んですが、今年は透明な光に挑んでみようと。内部のディテールをうまく表現するには、透明な光が欲しいと思つたんです。

これは、日本的なもので言いますと、軒下や縁側、そこにころがるような日だまり、そういったなつかしい風景と共通するものだと思つています。嶋もつといろいろな意見が出るんじやないかと思つてますが、やはりね、これだけダイナミックな作品を見ると、とりあえずは、いいですね、くらいしか（笑）出ませんね。

橋本 いいですね、いうより、これは凄いですわ。京都でもね、昔は、明治の頃ですがね、あつたんですね、本当の意味でのガラス工芸がね。ガラスのカンザシ作つたりと、いろいろ頑張つてたんですね。今、私共も、その復活めざして研究会をやっています。ステンドやつている人もいますが、非常に薄いガラス使つてやつてる。先生のはほんとの

国吉 あの、先程から出ております障子を通した光、これと、ガラスの透過光とはずいぶん違うも

うさきほどの言葉でね、一つお聞きしたいのは、障子を透かした光ということが出ますね。良質のガラスはサンディング（砂を吹きつけて表面を荒らす処理）しても非常にいい色が出るんです、丁度障子を透かしたみたいにね。先生はガラスの素材はどこで。

三浦 私共は、作品というものはいろんなスタッフや人達のチームワークで出来上ると思つています。素材なんかも他の方に助けてもらって作つて頂いてます。

橋本 しかし先生の作品は、なんというか、ファンタジックですね。

三浦 ありがとうございます。光のクオリティといいますか、それが欲しくて、でもなかなかいいものが作り出せないんですよ。

嶋 先程のお話で、ドイツでガラス素材の質について、ずいぶん試みられたということが出ておりましたけど、日本ではその品質を求めることが出来ない。

三浦 ドイツ、フランス、アメリカでずいぶん勉強したり、試したりはしたんです。でも、結局ね、いくら青い鳥を外国に求めてもダメですね。日本で、特に京都の町、この町には素晴らしいものがたくさんあると思うんです。もう一度、元へ戻つてこの国で頑張りたいです。あのエボキシ樹脂にしましても日本のものの方が、ずっと質がよろしいんですよ。

国吉 あの、先程から出ております障子を通した光、これと、ガラスの透過光とはずいぶん違うも





国立児童センター

のだと思うんです。それでガラスの透過光の方が光の良さを純粋に出せるとおっしゃっていますが、日本の的な光感覚というのはやはり障子の方だと思います。うんでも、ガラスの方は感覚としてはどう考えればいいんでしょうか。

三浦 従来の日本建築、昔の家の和風の良さというのはほんとに素晴らしいと思います。ただ、現代の生活感覚、特にスピード感覚から考えます

と、昔のものをそのまま持つて来ても、なかなか本来の良さを再現するのが難しいと思うんです。私は、かえって、日本の伝統的な光感覚の素晴らしさを現代に甦えらせるために、つまり、光を光そのものの質として使えるためには、知的空間を生み出すものとして、ガラス素材の可能性を考えたいと思うんです。

国吉 私は建築設計を仕事としておりまして、設計にかかる場合、内部空間に光がどう入ってくるかということはかなり考えるんです。その際、立

体物としての建築、その中で光と、そして陰翳の作り出す美しさが勝負みたいなところがあるんですね。光それ自身にしても、透明光がいいのか、乳白色がいいのか。透明光なら、外の自然な色を引き込むことができるわけですし、ステンドグラスは着色光を使うことになる。その組み合わせの妙、可能性みたいなものは大変に大きい。

*三浦さんよりガラス素材が見本として手渡され、出席者は思い思いに触ったり、透かして見たりと。

橋本 これはドイツ製ですか。

三浦 材料はドイツ製なんですが、これを伊勢谷さん（伊勢谷特殊硝子製作所・本社大阪）の方で

加工して頂いてるんです。

伊勢谷 もともとこのガラスは光学機器に使うものなんですよ。透明感があつてしかも丈夫なものです。普通のソーダガラスとも、いわゆる鉛ガラスといわれるものとも違う。会社名としてはデサーケやスピングルといいますね。日本では保谷ガラスさんのB・K7とかね。材料として高価なものですね。

それから色ガラスは、これは日本では需要が少くて、メーカーが育たない。フランスやドイツからの輸入ものが主となるでしょうね。

橋本 伊勢谷さんなんかは、いわばヨーロッパでいうところのテクニカルデザイナーといえそうですね。それでもこのガラスは相当高いもので。伊勢谷 値段的にはカメラのレンズガラスを買うと思つてもらつたら。

ガラスを割る

ショーンの始まり

橋本 それにしても、制作風景のビデオ見せてもらて感心するんですが、うまいこと割らはりますな。ヘタにやつたら全部ダメになる。

三浦 ほんとに、スポーツと同じといいますか、精神集中して、防備もやらないとケガします。

嶋 障子の透過光の良さというのも、現代のスピード感覚の中では、そのままの形ではついてかないんじゃないのか、というお話をしたが、伝統の中で個性的な光の追求といいますか、創作をなしている津守さんなんか如何ですか。

津守 僕は最初この世界に入った時、紅型をやつ



てたんです。紅型というのはもちろん沖縄の伝統的な染ですが、沖縄の強い光と影、その中でこそ映える色なんですね。例えば、ぼかしをきつい紺でいりますね、それでかえって淡いブルーが浮いてくる。あの強い光線の風土の中ではね。

ところが京都の染といえば友禅ですが、こちらは沖縄ほど光線が強くない、霞もかかってますし。この風土の中では紅型の本来の色は出ないんじやないかと思います。環境が変わると適応する色そのものが違ってくるんですね。

嶋津守さんはショーをやるとき、音楽の宇崎竜童氏と組んだりされるわけで、いろんな角度から総合的な考え方をされると思いますが。

津守シヨーの場合なんか、それこそ光と音が混じりますし、着物にスライドをあてたりして、相当イメージが変化しますね。

嶋でもどうなんでしょうか、今、人間にとつて、光というのはほんとにすごい魅力のあるものなんでしょうかね。

三浦光と空間との関係というのは、ノスタルジーもありますし、あるいは知的なというか、対象でもあると思うんです。光は、やはり感じるものなんですね。

トを試したりと、いろいろやつてはいるんですけど。小さなものはばかりですので。今、こんなダイナミックなものを見せて頂いてびっくりしています。三浦先生の作品に刺激されて、大きな作品にも挑戦してみたいなど、思いました。

嶋小さくてもやっぱり、光の美しさというものは共通してますでしょ。

谷口そうですね、小さなものは小さなものなりに、はっとするほど美しい時はありますね。何げない空間でも光の美しさを感じるというか、そんな時はあります。

嶋こちらの浅田先生は、ガラス作家であり、大学でも教えてらっしゃる。

浅田以前から三浦先生の作品は見せて頂いてますが、今、お話を伺つてますと、光を非常に感覚的なものとして把えていらっしゃる。それにガラスにお入りになつたのは何か宗教的動機みたいなものがお有りになつたとか。

三浦はい、私自身の受けた神の啓示というものは、優しく包んでくれる光ではなくて、自分を根底から洗い流してくれるような激しいものでしたけど。薄いガラスじゃなく、厚いものを使いたいのは、そういうシャープな光がほしかったんです。衛藤作品上のことですが、太陽は時々刻々動きますね。その動きに対応する工夫みたいなものは、おいでですよ。

谷口宮津から参りました。私はステンドグラスから始って、オブジェを作ったり、サンドプラスすね。

神の啓示

太陽と話し合う

橋本丹後の宮津でガラス工芸やっておられる人

もおいでですよ。

谷口宮津から参りました。私はステンドグラスから始って、オブジェを作ったり、サンドプラスすね。



江戸川総合文化会館



デザインの闘い

仕草と動作と

近藤 私は建築ではなくて、庭作りの方をやっております。光と影というテーマですが、私たちの仕事は最初から空間を相手にしてる。紅葉なんか見るときでも、上から太陽光線があたつると大変綺麗です。そういう美しさを確保するにはもともと空間発想が必要なんです。

三浦 なるほど。

近藤 私たち庭作りのものからみますと、今まではどうも建築家主導といいますか、建築物以外のもの、庭も含めてが、つけ足しきみたいになつてた。建物が出来た後で、余った部分を庭にしてくれ、いわれてもね、もう樹木の選定も出来ませんわ。

これではいけません。もっと総合的にね、建築物と外部空間を考えもらわんと。本当は自然の中、庭の中に建築があるという風にね、今は順序が逆と違うか、思います。

三浦 私はね、やはり建築家はね、実際申しまして、コンダクターであるべきだと思うんです。そこでいろんな人たちがかみ合っていくというか。

嶋 今、造園を中心に行なう存在してもいいんじゃないか、いう意見がありました。コーディネーターみたいな人が入ればいいんでしょうね。歐米ではどうなんでしょうね。

橋本 こちらの宮井さんは、ヨーロッパに二十年もいらして、いろんな事を御存知です。

宮井 いや、私は、その辺の事は全然。ただこの会議に参加させて頂いたのは、私、ガラスが好き

で、主にアールヌーボーの作品を集めてるんですけど。今までお聞きしてきた、おっしゃってましたけど、やはり三浦先生の作品に感じるのは宗教的な影響の大きさですね。

三浦 現代人が求めている豊かな空間というのは、私自身は宗教的な啓示が大きかったんですけど、もう宗教も乗り越えたところにあるんじゃないかなとうんです。

萩尾 私はテキスタイルをやっています。透明樹脂でデザインを依頼されることもあって、今日のお話大変参考になるんですが。イメージとして、先生の作品で町のアーケードの天蓋を二~三百メートル続けたら素晴らしいなと。

三浦 それ、やりましょうよ、是非。

熊谷 ステンレスグラスアートの素晴らしさにあらためて感心したんですが、ひとつおたずねしたいのはアートとしての完成度と、施工先企業との建築上の妥協みたいなものも実際上はどうなんでしょうかね。

三浦 大切なところで、実際、好きにやつてきたら赤字になつてしましました。

橋本 確かにね、我々いつも施工する場合ね、三つの闘いがあるんですね。一つはデザインの闘い。二つはコスト、そして三つ目は納期。この三つですな。

嶋 なるほど。それでは今まで発言なさつていな方、何か一言お願いします。

塩山 私、洋装店をやっております。洋服のものちよとした人の仕草や動作で、はつとするとほど美しい時がある。先生の光と影の使い方の妙

を見せて頂いて、こんな効果が洋服に出せたらな
と思います。

山田 三浦先生のステンドグラス教室に入れて頂
いています。モチーフなんかも自由にさせてもら
って、小品ですけど作らせて頂きました。これ、
朝起きてから夕方まで、光によって刻々表情が変
わるんです。自作の事で恐縮ですが、なんともい
えない感動があるんですね。

嶋 山田さんが一番幸福なんじやないですか、納
期も何も（笑）考えなくていいから。

高見沢 私、デベロッピングの仕事してまして、
建築家の方に何やかや申し上げる仕事なんですが。
今、スライドを見て頂いて感じましたのは、窓
とかを作る場合も、単なる開口部、明り採りとし
か今まで意識されていなかつた。この窓一つにし
ましても、もっと高質の緊張感のあるものが作れ
るんじゃないかと思いました。

内貴 私も同業でございまして、今まで建築技
術的にしか明りを考えていかつたのが、別の視
点で光として見る発想を頂きました。

今川 小さい頃からおはじきやビー玉なんかに胸
がときめくところがありまして。今、お話を伺っ
ていて、やはり人間には古代からの記憶として、
光というものへの畏れとか祈りみたいなものがあ
るんじゃないかと思いました。

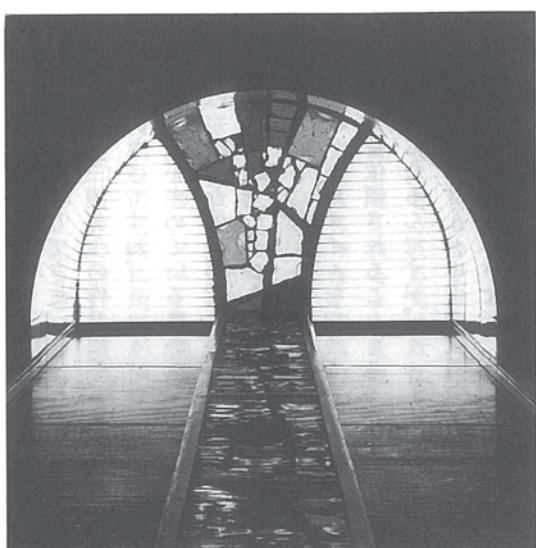
森下 洋服デザインの勉強をしています。先生の
作品を見て、直接私のやっていることとは関係し
なくとも、人間の着想とか感性の無限性みたいな
ものを感じてとてもよかったですと思ひます。ただ、
残念なのは、まだ日常生活にはガラスというの

少し遠い存在で、もつと自然に融け込めるようにな
ったらしいなと思います。

大木 荒々しいものが自然の恵みによつて優しく、
優しいものがまたシャープな光に変わる。先生の
作品を見て、その変幻の妙に驚いています。例え
短時間でもあの光空間に居られれば素晴らしいな
と思うんです。

上田 私は洋装の小さな研究所をやつております。
お話をありました、日本古来の美しい光、お茶の
世界にも典型的に表われるような光と影の美しさ
と、西洋の色ガラスを通じて浮かぶ造化の妙が、
うまく現代人の生活の中で融合できる可能性を感
じて、とても参考になりました。

嶋 そろそろ時間が参りましたので、お話の続き
は後のパーティでまた。皆様どうもありがとうございました。



佐野市文化会館

民家に「だわるとアートがハートになつちまつ

トーラ・リーダー 梅棹 まやお (陶芸家)
担当 黒竹 節人 (KCC)

出席者 (発言順)

伴 由美子 (京都美術研究会)
大西 正洋 (京都府商工部)

谷口 秀二 (伝青)

村田 新 (伝青)

福山 貢 (庭園)

吉村 毅 (KIS)

木下 雅啓 (広告代理店)

中村 良三 (西洋環境開発)
伊勢 信子 (KDA)



陶器と野菜

原始生活は省エネ

梅棹 「アートがハートになってしまふ」というのは、田舎で生活を始めると、アートはどうでもよくなってしまう、と言うか、生活そのものがライフスタイルになって面白くなつてくるんですね。

陶器を作ることが野菜を作ると同じレベルになつてくる。焼物の町から物理的に離れることによつて、自分の好きなものを作る、売れなければその分、野菜を作ればいい、そういう気分になつていく。田舎では生活費も安いし、完全には無理ですが、自給自足の生活もできます。アートの部分でそんなふうにふつ切れる、他の部分でこだわりが出てくる。例えば食べ物とか、原発の問題とか、これはちょっとおかしいんやないか、というかたちで、今まで見えなかつたものが見えてくる。清家先生のお話の中になつた糞尿の問題にしても、都会では水で処理をする、もの凄い無駄をしているわけです。田舎では簡単に処理できる、一旦溜めて、それを全部畠に戻す、土は良くなるし作物は育つ、完全なリサイクルがされているわけなんです。後から作り出されたもの、例えばプラスチックなんかは燃やすと有毒ガスが出るし、燃やすことさえできなかつたりする。こういうものが増えてくることによって、こんなことしてたらおかしいんと違うかな、ということが生活の中で出てくる。田舎での生活は職種も限られますので、誰でもできることではないと思いますけれども、将来サラリーマンの方も週に一度会社に出て来れば

いいとか、コンピュータを使って日本全国どこででも仕事ができ、収入も保証されるというかたちになれば、きっともつと田舎指向になつてくると思うんです。そうなると、いろんな人が、それで考えもしなかつた今の時代の不自然さを考えるようになつて、いいんじゃないでしょうか。また、田舎の生活というのは、周りとの関係で煩雑などころがあるんで、都会の問題とは異なつた問題が出てくると思います。この二つの問題がミックスされて、例えばお米の問題に対して、農業をやっている人の立場も、都会の人の視点も見えてくるようになる、そういうところがとても面白いと思うんです。

黒竹 田舎に住むと、都会に住んでたときと違つて、自然の循環作用、つまり我々が消費していくものが土に戻つて行くということが身近に感じられるわけですね。新たに開発されて工業生産されたものは、土に戻るものが少なくなつて、いるような気がするんですね。ですから、自然環境に包まれて生活すると、この循環作用の中で人間に取つて何が一番大切な事か、という点が見えてくるんですね。

伴 私はいろんな所を転々としましたが、京都に来る前は北九州の小倉に十年ほど居りました。そのときは家庭菜園などすることもでき、台所の生ごみはそこへ還元していたわけです。が、京都の醍醐のマンションに移つてきますと、生ごみを畠に還元することはできず、捨てるようになったわけですが、最初のうちは抵抗がありました。それも京都では東京などと違つて、生ごみも他のごみ



も、燃えるものも燃えないものも一緒に捨てるでしょう。こちらに来てから四年でこの便利さに慣れてしましましたが、やはり有限の資源を感謝して使っていくには、不便な思いも一人ずつ、少し水分が逃げないなどの合理性が一見あるようですが、実際はとても非合理なことじゃないかという気が最近特にするんです。あえて言えば、もう少し「原始的な」生活に戻つていけば、使うエネルギーが少なくて済むんじゃないかな。でも、そうすると経済成長の足を引っ張つて、豊かな生活をすることができないかも知れない。でも豊かさというのは、ものをいっぱい使い、ごみをいっぱい出すということじやないんじやないかと最近思っています。

黒竹 梅棹さんのところでは、野菜は裏に行けば梅棹 でも実際、田舎も消費生活の上で都会化しているんです。例えば田舎に住んでいるからといって、車なしの生活にまで戻ることはできない。だから、どこまで「原始」に戻るか、という点は非常に問題です。民家に住むにしても、どこまで古いものにするかは、その人が自分で決めるしかないと思うんです。

黒竹 田舎に住んでられて、ものを作つたり、発送したりというクリエイティブなもの作りに関して、時間帯はどういうふうに変わってきたか、もとの作りに、どういう心境の変化が起こったかなどをお聞きたいんですが。

梅棹 昔は陶器を作るのは何か特別のことだと思っていたんですが、お百姓さんがトマトを作るのと同じだな、ということを強く感じるし、陶器を作ると野菜を作るのと同じ時間の配分をして、昼間は煙で仕事し、午後から二、三時間陶器を作りというかたちで生活していくれば一番いいと思っていますが。

田舎の常識

都會人の知識

黒竹 山に移り住もうと思われた最初のきっかけは何ですか。

梅棹 僕は、大学時代に五年ほどカナダに住んで、自分の周りにスペースがたっぷりあればこんなに人間はゆったりするのか、ということをすごく感じたんですね。僕は京都市内に生まれ育ったんですけど、こちらに戻つてきて、自分の周りには仕事をする十分なスペースがない、窯をやるにしても住宅街で規制区域になるなどしてできないとかの問題もあって、どこか山に出るほうがいいんじゃないかと思ったんです。搜してみると案外農家が売りに出たり、土地が空いてたり、都會ではワンルームマンションしか買えないような値段で何千坪もある土地が買えるということもあり、また陶器を作るという意味では、田舎にこだわる必要はあっても都會にこだわる必要はないと思つたんです。後は奥さんの同意が必要ですが、うちのは東京生まれで自然音痴だったんですが、僕よりも馴染んで結構うまくやつてます。

黒竹 そういうところで暮らすと、野菜採取の仕

方とかの都会では分からぬノウハウがね。

んですね。

梅棹 最初行ったときはひどかったんですが、作っているうちにいろんなことが分かつてきただんです。最初の頃は近所の人たちから色々と教えてもらつた通りにやつてたんですが、農薬や化学肥料などを使つてるので、それが気になり始めたんです。田舎の人は、そんなこと全然気にしてはいなんですよ。

黒竹 自分たちは食べないから。

梅棹 食べる人もいるんですけど、ずっと使つてゐるからあまり気にならないみたいなんです。かえつて、今までそんなことを知らずに消費していだ僕らの方が、なめれば猫でも死んでしまうようなものを使つてゐることを知つて、これでいいのかという疑問を持つようですね。土が段々と弱つていつて、化学肥料や農薬を使わないと野菜はすぐに病気になることが分かつてくるんです。

黒竹 ということは我々が食べてゐる野菜というのは相当な…

梅棹 ものの悪い農薬がかかつてゐるんです。お米からして、政府に出すものは全部強制乾燥で、自分たちの食べるものは天日で自然乾燥してますしね。農協の言いなりになつて、その通りやつてゐる。今、新生児の奇形発生率と農薬の関係が問題になつてますよね。それまでは考えなくても済んだことが、自分たちでやつてみると初めてそれが分かつてくるんです。だから都会の人が田舎に住むということは、大変な部分もままあります。いろいろなことが見えて、すごくいいことだと思う



黒竹 田舎に移り住む場合には、村に永く住んでる方たち側の受け入れ態勢とかが問題になると思いますが…。

梅棹 僕が引っ越しして行く前に村の中で寄り合いがあつて、僕たちをどのように受け入れるかを協議したそうなんです。僕は美山町の林区という集落にいるんですが、そこには区有林があるんですね。僕らが住むことになれば、区有林の権利まで生じるのか、我々が区有林を買えば当然、使役などのそれに対する義務が出てきますが、それらをひつくるめた上で僕たちを入れるのかを協議したんです。僕たちがその集まりに最初に行つたときに、区有林の権利は放棄してくれとまず言われたんです。僕らとしてはかえつて好都合で、したこともないような作業はしたくないから、結構ですとお答えしたわけです。あと、区費とかは戴くところが多くて、いろんな役があるんですが、それができない人はお金を出さねばならないんです。

僕も消防団を三年ほどやつたんですが、訓練が厳しくて止めてしまつたんです。それと、最初の頃は、陶器屋さんなんかは周りにいないこともあってか、昼間は畑作業をやつたり、うろうろしたりするけど、きっと親に食わせてもらつてるんだろう、と思つていたみたいなんです。僕らの生活をある程度説明しないと、地元の人は、僕らの正体が分からなくつて限りなく不安になつてくるんですね。だから、常日頃から説明していく必要がありますね。一旦分かつて頂くともう問題はな

いんですけど…。

黒竹 京都からは何キロあるんですか。

梅棹 六十五キロほどで、車で一時間半くらいで

す。

黒竹 六十五キロくらいなら、高速道路がつけば

三十分くらいになりますね。だから道路の整備が

なされると、都会で仕事をしながら、いい環境のもとで生活する人が増えてくるんじゃないかと思うんですが。

伴 ただそれをやると、東京圏みたいに、今お住まいの所がベッドタウン化して、今のような生活を謳歌することができなくなる可能性が出てきますね。

梅棹ええ。僕は、道路が良くなればなるほど美山町は過疎化がすすむと思うんです。都会とのハイブが太くなればなるほど、なんでこんな所に居なければならないのかという気持ちが出てくるんです。都會から入ってくる人は増えると思いますが、問題なのは、田舎の人は土地にひどく固執する体質があるて、家なども朽ち果てるまで手放さず、誰かにそこに住んでもらおうとはしないんですね。ま、僕自身はあんまり便利になつて欲しくないと思っているんですが。

黒竹 すると、京都のいい意味での発展・開発のラインをどの辺りに絞り込んでいくかという問題が出てくるわけですね。

大西 私は、美山町の隣の瑞穂町に小学五年までいました。瑞穂町も市内から六十キロのところにあって、私の生家は一番過疎な、国道の通つてない所にあるんです。でも実際、京都の府庁に通つ

ている人もいるわけで、そこから通勤することもできるわけです。しかし、子供の通学する学校は都會の学校のほうが将来を考えるといふと思うんです。それに家内にどうかと言うと、田舎に住みたくないと申しますので。

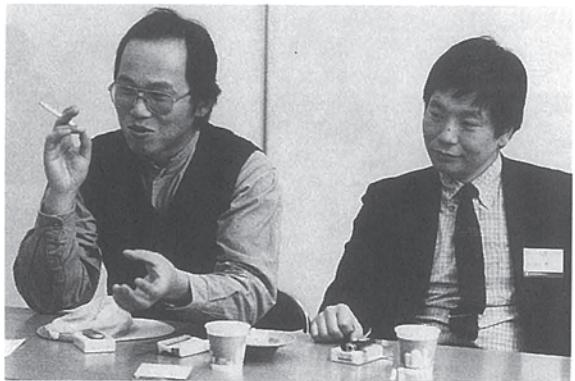
シン・ブルーライフ

生活を遊ぶ

梅棹 田舎に住んでた人と違つて、僕らのように都會生活をしていた者は、親戚だのしがらみみたいなものが一切ないわけなんです。それが、きっと僕にとっては一番いい、好きなことができるといふことがありますよね。

大西 ただ、田舎に住んでも、使役とか区有林とかのお付き合いもせず、深くとけ込むこともしないで、ただ住んでるだけでは、結局自分自身が浮いてしまう。勝手にやってるやつがおるな、とみんなから隔離された生活になり、社会生活を送つてると、いう意味はなくなるから、共通点を探つていかないと…

梅棹 地元の人との付き合いを拒否しているのではありません。でも一番難しいのは、所詮都會から來た人、と思われることなんです。在所の人で何人か、今すごく親しくお付き合いしてゐる人が夜、飲みに来られていろんな話ををしてみると、「あの人は六十年ほど前、あそこの在所から來た人や」とか、一世代、二世代前のことが出でくるんですね。そうなつたら、僕らのように五、六年にしかならない者は火星人みたいなものになつてしまふ。だから、必死になつて同化しようということよりも、



僕自身が自分の生活をして陶器作りをすることによって、周りの人が、うちの村には陶器作りをしている人がいる、というかたちで存在感を創つていかないと駄目だと思います。自分でぼちぼちと仕事をしてれば、周りの人はきっと認めてくれると思うんです。

大西 田舎はね、村中同じ名字ばかりで、殆んど親戚なんです。「代々の名前はどう言われるんですか」とよく聞きます。僕ら、もう二十年以上出てて、世代も変わつてますから、おじいさんの名前ももう分かりません。一緒にいてもそんなところです。だから、昔からの流れにぼつと入つたからといって、同じようにはならないと思うんです。また、一山を越えればすぐですよね美山町は、すぐ都會に来ることができ、陶芸もできるというメリットがありますね。そういう意味で、いい所に狙いをつけた、と思います。生き方としても、溶けこみつつ自分を理解してもらうという姿勢でいいと思います。時間配分に関しては、昼は自給自足的な仕事をし、夜は本職をするというようになれてるわけですね。

梅棹 今はちょっと変わつてしましましたけどね。子供が学校へ行つていて、あまり夜遅くまで仕事をすると朝起きられなくなるので、今は午前中は外で、午後は自分の仕事をして、大体一日三時間くらい陶器の仕事をするのがいいんじゃないかなと思ってるんですが。

大西 僕らがお付き合いしている陶磁器の何とか協同組合つてのは、組合組織で十何軒か集まつて、各々持ち集まつてやってられるということで、優

雅な生活をしてられるんですが、産業ではないんですね。

谷口 私らは町中にいるんですけど、製作面で、田舎に行つたからこういうものができた、ということはあると思われますか。

梅棹 すべての面で僕の性格などを造るのにすごく影響していると思います。少なくとも、陶器作りを眼くじらを立ててするのではなく、生活の一環として農作業などと一緒にを行うことで、いい作品が生まれてくる、ということはあると思います。谷口 私も含めて世間一般では、結果を短期的に見ようとしてますが、梅棹さんの場合は、極論すれば、生を終えるまでにまとまな作品が出来ればいい、とお考えのようですね。結局、考え方が基本的に違うんでしょうね。

梅棹 会社勤めの人と違つて、陶芸家というのは一生で生きる仕事ですので、若いときから必死になつて抹茶茶碗なんかのいい作品を作ろうとしても、それはできないだろうと思うんです。だから考え方の柔軟な間は、オブジェとか、あまりこだわりのないものをやつておきたいと思いますね。

谷口 頭の柔軟性というのは人的な交流でもたらされると思うんですが、これは過疎化した所では得難く、視野が狭くなると思うんです。自分のスタイルが完全に確立されれば、それなりのメリットはあるでしょうが。

梅棹 美山に住んでいますが、都会ではない場所であるということが面白いと思うのか、我が家には世界中からいろんな人が訪ねて来ます。京都にいたときよりもすごくインターナショナルになつ



て、居ながらにして世界中の情報が入ってくる、そんな感じなんです。

村田 僕も陶芸をやってるんですが、初めから都会でやろうという気は毛頭なく、綾部についてを頼って行つたのですが、地元では焼物を地場産業になると大騒ぎになつたんです。僕は永住するつもりはなかつたんですが、向こうは一度入つてくれれば一生いるのが至極当たり前のように思つてます。

そういつた「常識」と鬱わなければならぬ場合が随分起つてくる。僕としては承伏できないということもあって、後に亀岡に移つたんですが、ここは、さつきのお話にあつたような、都會との田舎の狭間のような所なんです。今住んでいる地域にも区有林があつて、権利ももつてゐるんですが、使役も当然あるんです。そこから歩いて二三分のところに分譲住宅があるんですが、そこは「村」とは別で、財産区とかもないし、区費も半額でよくて、「村」の人とはかけ離れた生活をしている。

ところで、道路の整備などで分譲住宅に住む人が多くなると主導権が彼らのほうに移つていく。一方地元の若い人たちは京都に働きに出でたりして、居住地より都市生活のほうが感覚的にウェイトが大きくなつて。『分譲住宅側』が完全に支配的になつた場合にどうなるかは分からぬんですが、そうなつたら、僕はまたどこかに逃げようと思つてゐるんですけどね。ところで、梅棹さんのことは前から知つていたんですが、一日三時間くらい仕事をするという生活には共感しながらも抵抗があつて、伺うことはなかつた。この間初めて訪ねたときにいろんな話を聞いて、自分も基本的には

梅棹さんと同じ側に立つてゐるということに気がつきはじめて、生活のテンポも少しゆつたりめにしたいと思っているんですが。

梅棹 一日に三時間の仕事をする、と言うと後的时间は遊んでるようになりますが、いろんな仕事をしているんです。陶器作りも本当は仕事ではなく遊びだし、野菜作りも同じ遊びのレベルでやつていただきたい、と言うか…。

谷口 私ら商売人になると一日三時間というペースで商品が作られるるとすると、単純計算では残りの五時間分までが価格に付加されていくわけで、そのような品物が田舎での生活に好影響を及ぼされたそれだけの価値のあるのか、という疑問が湧くんですが。

梅棹 今はものの氾濫の時代なので、ものそのものとしては売れない。だから「もの」の付加価値、つまりここでこういうものをつくり出していくという情報を売る。大量生産による価格の低廉化じゃ駄目で、作り手と使い手との間で一つの「つながり」があれば、それはすごく大きな付加価値になると思ひます。商店とかが間にに入るからじゃなく、個展とか自分の家に来てくれる人に買つてもらつて、そういう「つながり」を維持したいとは思つてゐるんですが。

村田 一日三時間くらい働いて後の時間は他のことをするといふのはいいなと思いますが、逆にそれをやつてるが故のデメリットがやはり、あるわけですよね。時間が代価に環元されるという発想は基本的に都會生活のものだと思うんですね。それが単純に結び付かない生活というものがある。

例えば、草取りなんかは直接金銭にはならないけれど、これをしないと作物は出来ないわけですね。

梅棹 そういった作業は収入的にはゼロなんですが、生活の一部として楽しむと言うか、遊びとして考えるしかないんですね。

黒竹 田舎に住むには、職業の如何を問わず、本

職の他に、生活をするための作業を楽しむという姿勢が必要なようですね。

梅棹 私は今、各個人が何に価値を求めるか、という問題が出てきていると思うんです。段々合理的に、人工的になってきていますが、人間は生物ですから、自然の中でききたい、自然のものに触りたいという気持ちが常にありますね。モダンな生活をしている人でも田舎的なものに憧れるところがある、ま、どちらに重点を置くかは個人の問題ですけどね。

福山 昔読んだある本の中に、人間が極限に置かれた場合、何が一番大事かということが書かれていたんですが、そこに、夕焼けとかに感動を憶える人は生きしていく歓びのために生き残るとあつたんですね。物質文明がここまで発展しますと、家ではなく敷地に重点を置いた「たたずまい」に心を動かされるようになってくるような気がします。都会で過疎地に移り住もうという人が増えてるのは、そういうところから来てるんじゃないでしょうか。

吉村 私はコピーを書く仕事をしているんですが、最近の広告というのは本当のことを言い、本当に人にそうちと納得させるものでないといけないと思っています。そういう意味で、梅棹さんの仰る「ア

ートがハートに」っていうのと、基本的には同じものだと思うんです。ただ、それをするために雑誌とかのメディアを介在させるかどうか、という点は異なるんですが、田舎で見られるような人から人へという直接のコミュニケーションが基本だと思うんです。「アートがハートに」という意味はその辺にあると思うんですが。

木下 私は月曜から金曜まではマンションに暮らして、土日は田舎のほうで暮らせたら、と思いますが、自分の生活を守るために、ある程度の妥協が必要だな、って思っています。

中村 現代は、合理主義や機能主義から欠点と見ていたものが悪い面ばかりじゃないと振り返つてみる余裕が出てきた。さっきの時間イコール価格という考え方と、一生のうち一ついいのを作れば良いというのは二つの全く違う価値観で、どちらがいい悪いというものではないんです。先ほど

の付加価値、陶器をもつことより、もつて人と話をしたり、その価値観を共有することが、これらは見直される風潮が出てきてると思います。また、田舎に住むということを綺麗事に考えていましたが、お話を伺つて現実の厳しさが分かりました。一方、生活のリズムが自分のものとは全く違うという点には非常に憧れを持っておりますが、価値観が加速度的に変化している時代の中で、そういうものを見直すことのできる本来のシンプルな生活への憧れは確かにあって、それを実践されてるんだな、と教えられました。

黒竹 本日は皆様ありがとうございました。



食道楽は文化の美食家か、否もつと偉い

トーキーダー・川端 道喜（ちまき司）
担当：伊部 京子（ICC）

出席者（発言順）

旗持 宏	(KCC)
高野 澄子	(ICC)
池川 穎亮	(KCC)
赤田 幸実	(西洋環境開発)
永谷 正二	(外交社)
日高恵美子	(a.m.グループ)
長岡佐紀子	(a.m.グループ)

宮中餅文化

消えた砂金餅



伊部 本日は私自身、この分科会をとても楽しみにしております。川端先生のお話をまずたっぷりとお聞かせ頂きまして、後、みなさんとご一緒にお話し合いをしてゆきたいと存じます。その前にはまずは自己紹介を――。

旗持 KCCの旗持と申します。食べることを生き甲斐と致しております(笑)。

高野 和歌山から参りました。高野でございます。

池川 染織デザインをしています。池川です。どうぞよろしくお願ひします。

赤田 住宅地の開発の仕事をしています。赤田でございます。

永谷 淡交社という出版社の製作部で、デザインの仕事に携っています。永谷です。

日高 「a.m.グループ」という、町を美しくしようとという集まりに参加しております日高です。

長岡 私も「a.m.グループ」の一員で、長岡と申します。

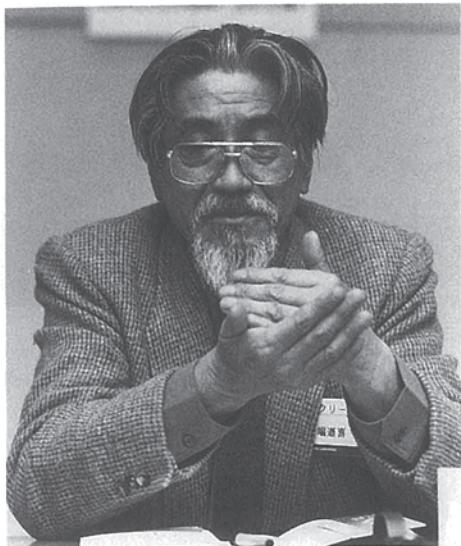
伊部 ありがとうございました。では早速ですが、先生、宜しくお願ひ致します。

川端 みなさま、初めまして、川端でございます。

本日のテーマは『食』でございますが、やはり、私が生業と致しております『菓子』の話を少しさせて頂こうかと思います。お菓子のお話をされる方はその起源を色々に申しますが、私は宮廷文化からそれはまず来ていると思います。もちろん、

その背後には、唐、韓の文化があつたと思います。が、今、その起源を遡るうと致します時、宮中の『節物』をみてゆくのが一番よろしいかと思いま。私どものところで明治の頃まで伝えておりました『御定式御用品雑型』という絵巻物がございました。そこにはお神酒とともに飾ります供物の図とその説明が月を追って描かれているのですが、すべて餅でございます。そしてこれは供物であると同時に酒のあてだつたんです。「あたたけの餅」というのがあります。こう橢円形の平べつたい餅で二段重ねに致しまして、三宝に載せます。酒は当時は濁酒。「おやすみ」と呼ばれる、錫で作った徳利にこの濁酒を入れまして、「あたたけの餅」を肴に盃を傾ける訳です。

宮中から食文化はやつて来ましたが、それは他の有職故実のように様式を守つて伝えられた、といふものではないんですね。随分と変化してしまいます。食というのは嗜好のものなので天皇さんの好みで、大いに変わる訳です。粽が好きな天皇さんやと、年中粽という具合に(笑)。ですから、かつてあっても、もう今はないというのもたくさんあります。その中で、私がこれは惜しいなあ、と思つてゐるものに砂金餅といふものがあります。砂金餅といふのは、砂金袋、巾着のような形をしています。一升枡を鋳型にして、形を整え、中に米粒を入れて作ります。お鏡(餅)の上に飾つたり、結婚とか祝い事の時に用いたようです。これは余談ですが、私どもの親戚に三井組、島田組と



貞享文化

東福門院の華

定家の『明月記』に、「伊勢物語遊び」というも

並び称された小野組という両替商がおりまして、新政府の時に没落します。ついでに申しますと、紅座の下村、宇治の茶師上林も道喜とは親戚になります。政略結婚なんですよ(笑)。小野は没落しますが、娘の結婚式には砂金餅を作らせてています。「これだけは」という想いがあつたんだと思いますよ。この餅は現在では全く日にすることが出来ません。

花びら餅というのがあります。これも宮中行事から消えようとしていたのですが、裏千家の十一世、玄々齋がそれを惜しんで、「茶道」に取り入れ、現在に伝わっています。茶道と書きます。私もでは「菱葩」と申しています。ピンクに透けたみえる中の餅が菱形をしているからです。今は牛蒡を二本、櫛のように刺しているあの部分、元々は押鮎だったんです。やはり酒のあてだったんです。江戸時代の書物『四季草』に、餅は酒の肴にはならない、そして初獻に加えようとするなら「魚物」を一色添える——ということが記されています。甘いものが、餅、あるいは菓子という常識は現在のもの。島津貴子さんがおつしやつておられましたが、御所言葉で「おあつ・あつ」と言われたこの葩餅、貴子さんの時代でも一月一日に食したということです。一月の宮中に欠かせぬものがこの葩餅だったということです。現在の雑煮に当たるものですね。

のが出て来ます。宴会の趣向ですね。そこに、お櫃の上に「飾り粽」を載せた、という記述があります。粽の初出はおそらく「本歌」の『伊勢物語』だらうと思うのですがこの「飾り粽」が一体どんなものだったかはよく解っていません。ただこれも発生は中国で、その唐風の文化を受け継いだ平安貴族が宮中のものとして定着させていったものと思われます。普通一般には「飾り粽」とは「種々の色糸で巻いた、あるいは五色の糸で縛った粽」といわれます。

先程、食文化というものは大いに変化するものであると申しましたが、京の宮中の文化が最も変化を遂げたのは、江戸時代、貞享の頃です。その後の元禄、そして大分時代が下りまして、例の文化・文政時代、この二つの時代が江戸文化の興隆期だと言われますが、実はその元は貞享にあります。元禄はむしろもう下降してゆく時代です。この貞享という時代に文化の華を咲かせたのが、東福門院です。この人は十四才で後水尾天皇に嫁ぎます。京都では後水尾は「ごみのおさん」と呼ばれましたが、彼自身大変な数寄者で、風流人でした。中宮の東福門院、和子と書いて「まさこ」と読みますが、この人も大変な数寄者で、家康の孫娘ですから、すごい財力を持っていた。それで金にあかせて、京の文化をどんどん江戸へ流出させた。新しいもの好き、珍しいもの好き、派出者なんですね。欲しいものがあるととにかくもう買上げる。この大金で京都は随分潤った。その位、お金を使つたんです。彼女のそうした動きが貞享の文化を作つたんですが、「おひなさま」を三月の



行事として定着させたのもこの東福門院だと言わ
れています。それまでは雛の行事はなかった。三
月は鬪鶏です。雛は家康も貰っています。女の子
のものだけではなかったのでしょうかね。雛は「ヒ
トガタ」が起源ですから、祓いの意味で三月、つ
まり現在の四月半ば、桜の季節には厄病が流行り
ますから、それを祓うために「ヒトガタ」がその
人の身替りとなつて水に流されたのでしょう。そ
して室町になつて立ち雛が、それが江戸、東福門
院の時代に現在の雛飾りとなつて定着したのです。
この東福門院が亡くなりまして、彼女は大変長生
きで、七十四才まで生きたのですが、その七回忌
に、六日間かけて、粽一萬何千本が配られた、と
いう記録が残っています。粽で幕府の権威を示し
たんですね。東福門院が亡くなるのが延宝六年(一
六七八)。延宝というのは貞享の一つ前の年号です
が、七回忌は頂度貞享元年に当たります。彼女の
培つたものが、彼女が死んで後大輪の華を咲かせ
たのです。そして貞享には、近松、西鶴、芭蕉と
いった人たちが輩出しています。

こうやつて流出した宮中、京のものが、江戸で
変化を遂げてまた京へ、宮中へ戻つてくるという
ことがあります。そのいい例が「亥の子餅」です。
宮中には古くより「玄猪の儀式」というものがあ
ります。平安時代よりこの儀式はあって、猪の形
をした餅を食べて無病息災を祈つた、というよう
なことも言われますが、私どもに残つてゐる文献
でみますと、この亥の子餅といふのは、ちょうど

碁石位の大きさの丸餅で、色は三色、赤、白、黒
です。これに添え花として忍ぶ草を付け、初の亥
の日にはさらに菊、二の亥の日にはカエデ、三の
亥の日にはイチョウを添えて公家百官に下げ渡し
た、とあります。どうもこれは食べるものじゃな
かつたようです。檀紙に包みまして、旅のお守り
として携帯したものと思われます。特に船旅に良
いとされていました。また火のお守りでもあ
りました。

この亥の子餅、玄猪の餅が、江戸に移入されま
すと、庶民の間で大流行します、安産のお守り、
という形で受け入れられるのですが、この時に、
碁石のよくな、径六分(約一・八cm)の小さな丸
餅が、大きくなる。人に配るもののがこんなに小さ
くては承知しないつていう江戸つ子氣質でしょう
か。ついに今の亥の子餅の大きさになる。色も、
安産は「わら」の子だくさんによやかたものですから、
猪色と申しますか、小豆で染めた茶色一色になる。
これが再び京の農家、八幡、白川、愛宕あたりに
伝わり、ついに御所に入る。で、これもほんとう
はなくなつていたかも知れないものなんですけど、
茶道に取り入れられて生き延びる。裏千家、十一
月一日の「炉開き」、風炉から炉に変える日のお菓
子が、この亥の子餅です。

随筆家の大村しげさんは、亥の月、亥の日に亥
の子餅を食べながら、電気ゴタツのスイッチを入れ
れる、と書いていらっしゃいますが、旅や火のお
守りだった亥の子餅が、どこかでその古い記憶を
残して、民衆の中に生き残つてゐるという気がし
ます。

赤飯と白蒸

ハレとケの逆転



伊部 大変興味深い視点を提供して頂きまして、ありがとうございます。

私がどうぞいます。これで私などは大いに知つたか振りが出来るのではないかと秘かに思っています(笑)。

旗持 御所文化みたいなものが、これほど私たちの生活に残っているというのは意外でした。また茶道に取り入れられていった、という残り方も興味深く思いました。

ところで粽と言いますと、どうしてもある祇園祭の粽のことを思うのですが、あの粽と茶道の粽との起源なんかはどうなっているのでしょうか。

川端 祇園祭の粽の方は、色々調べているんですが、今一つよく解らないんですよ。文献としては明治に入るとよく出て来るんですが。

旗持 そんなに新しいものですか。

川端 文献では江戸期の古いものには全く出て来ません。ただ江戸の末頃の文献に、鉢町に一軒だけ「津田」という粽屋があった、と記されていましたので、あるいはこの家で祇園祭の粽が売られていたのかも知れないという推測は出来ます。それと「厄除け」という観点からみますと、祇園祭と粽は大変相性がいい(笑)。祇園祭は御靈会ですからね。

旗持 茶道の粽は中味がありますが(笑)、昔から葛だつたんですか。

川端 そうですね。私どもであれば商品化したものです。お茶事の席では、団子粽は食べにくいくらい。

伊部 中国の笹ですか。

川端 あれは参りました。パランみたいに大きくて(笑)。それに注文しますとね、「船いっぱいでいいのか」って(笑)。

永谷 香りはどうでした。

ですよ。口をあまり動かさないもの、汚さないもの、そういう意味で葛粽を考案したんですが、利休も葛粽を使っています。ギヤマンの器に水を張り、葛粽を浮かべるという演出をしています。

旗持 葛粽というものは風流のもので、厄除けの意味はなかつたんですか。

川端 いやありました。葛 자체が薬用ですし、砂糖も当時は薬でした。ただし厄祓いという意味は、中の材料よりむしろ、あの形にあつたと思います。旗持 それで祇園祭の粽は、中味が空っぽでもいいわけなのですね(笑)。

永谷 笹に意味があるんでしょうか。

川端 現在はほとんど笹ですが、チガヤ、マコモも使っています。団子粽の有名なものに、愛宕の粽、島羽の辺の淀の粽がありましたが、山が近い所では笹、川辺ではマコモを使ったという位の違いかも知れません。みなイネ科の植物です。

永谷 川端先生のところは笹ですね。やはり笹にこだわりますか。どこどここの笹がいいとか。

川端 こだわるというか、北山の笹を使っていましたが、ご承知のように笹、竹というのは花が咲くと全滅しますでしょう。そういう危機が二、三度あります。その時に、笹のことを色々調べてみました。中国の笹を輸入してみたり、東北・信州から取り寄せてみたり。

伊部 中国の笹ですか。

川端 あれは参りました。パランみたいに大きくて(笑)。それに注文しますとね、「船いっぱいでいいのか」って(笑)。

川端 番茶のようにおいでした(笑)。東北のも

たいにね。

のも香りがないですね。信州のものは、細かい毛

が生えていて、葛がくつ付いてしまいますので、

これは団子粽用のものだな、新潟の笹団子なんか

(笑)。でもそれがプロのプロたる所以でしょうね。

は、これを実際に使っているな、という感じ

でした。その土地の特産物、名産というのは、

そんなあたりで生まれているのでしょうか。

香りは微妙なものでして、余り強くもいけない

いんです。特にお茶室ですと、何気ない香りも強

烈になります。ほのかな香り——このために私ど

もは、葛を笹に包んでから長時間、炊きます。色

を落とし、糖分を抜き、香りを取ります。消去法

です。

伊部 私の一番知りたいことが出て参りました

(笑)。消去法ということこそ、伝統を語る時の大

切な視点だと思うのですね。私は紙をやつており

ますが、紙というものは正に消去法なんです。取っ

て取つて取つて、最後に残るのがあの一枚の薄い

紙なんです。ここで是非、伝統と消去法というあ

たりのお話を伺いたいものです。

川端 いや、そんな難しい話じゃないんです。宮

中の行事は伝統でしようけど、茶道もね。それを

変えてゆくのは、伝承でしよう。伝統というのは

不変なもの、伝承は変化するもの、あるいはさせ

るもの。食は伝承のもの。ただよく考えますとね、

伝承の方がもしかしたら古い古い記憶を保ち続け

ている。消去法でいったら伝統では何も残らない

かも知れませんよ。伝承でしたら、それこそほのかな香りは残る、と思います。先程の亥の子餅み

川端 特にありません。ちょっと話がそれますが、

伊部 どうも手の内を見せて頂けないよう

川端 私のことは別としまして、プロは「こんな

もん簡単や、昼寝しながら作つた」と言うもん

です。例え徹夜して作つたとしてもね(笑)。

伊部 いかにも「やりました」とは言わない。

川端 そうそう。苦労したから、これこれの手間

代下さいというのは誤つていて。

伊部 それこそ消去法の真隨ですよ。川端先生の

風流が少し解つて来ました(笑)。

日高 私、プロやなくて、家庭の主婦で、全くの

素人ですけど(笑)、お聞きしてよろし。

川端 どうぞ、どうぞ。

日高 あの、先程も少し先生が触れられました「お

ひなさん」のことなんですが、うちでは、

旧でやっていますので、四月十五日まで飾つてい

ます。それで困っているんですけど、おひなさん

のお菓子が手に入りません。

川端 おうちで作られたらいかがですか。

日高 ひなあられを?

川端 「ひちぎり」がいいでしょ。簡単です。

お餅を引き千切つて、そこに白味噌に柚子をまぜた

餡をちょっとだけ塗るんです。ひちぎりは本来

の「雛菓子」なんですよ。昔は大概、山椒味噌の

餡を使ったものです。東福門院もたくさんの人を

招く時はひちぎりを用いています。簡単ですから、

日高 まだお聞きしたいんですけど……。あの紅白饅頭の意味、教えて頂きたいんです。



赤飯というのも、お目出度いから、という意味じゃないんですよ。むしろ忌む時に、ケを祓う意味で用いたんです。お目出度い時、つまりハレの場合は白蒸です。ですから紅白饅頭というのは実際に不可思議なものです。

旗持 赤飯と白蒸を一緒に出されたようなもんですか（笑）。ハレとケがごっちゃになつてますね。

川端 今でも残つてていると思いますが、女性が初めて「月のもの」を戴いた時、赤飯炊きますね。そしてこれでやつと一人前の女性になつた「おめでとう」というふうに確かに赤飯は祝い事に用いられている。これはちょっと意味が違うんです。

宮中の女官の間では「月のもの」を「おまわり」とか「おまけ」と呼んでいましたが、このおまけの間は出仕出来ないんです。不淨ということで、おまけを戴いた女官の部屋には荒縄が張られる。そして不淨が明けますと、荒縄が外され、赤飯を食べて潔斎します。この儀式が済むと、女官は再び出仕することが出来る。

日高 現代は、逆になつてしまつたんですね。

永谷 笹にこだわっているんですけど（笑）。といふのも私、花背に住んでおりまして、北山の笹はとてもいい香りがするんですね。

川端 北山の笹は香りが信条です（笑）。しかしあれも不思議なものでして、滋賀に入るとダメなんですよ。持つて帰つても植えてダメ。今は道がアスファルトになつて北山の笹も大分変化してしまいましたが、何百枚に一枚、素晴らしい香りのある。それに両面がツルツとしているのもいい。そして葉のツブが揃つていた。

永谷 深泥池の笹はいかがです。あそこのもいひつて聞きますが。

川端 祇園祭の笹のルーツだと言われていますね。しかし文献にはやはり出て来ないんです。

旗持 京料理というのはどうでしょう。若狭の一塩ものおかげで、酢という調味料が発達したなどと言われますが……。築地の鮮魚が入つていら、どうなつていたか（笑）。

川端 入つっていたんです。これは文献にちゃんと出ています。築地じゃありませんが、明石から鯛が、その日のうちに入つていた。

伊部 知りませんでした。これもいいことを教えて頂きました（笑）。でもどうやつて……。

川端 川です。明石から攝津へ入つた鯛は淀川を遡つた。島羽まで入るとかえつて遅くなるので、伏見で降ろしまして、走るんです。鯛一匹、担いで伏見から御所まで歩担走駆という者が走りました。しかしやはり貴重なものでしたから、この鯛は宮中をぐるぐる回るんです。日頃の義理を果たすために、屋敷の中元が御所の中を走り回る。そのうち鯛は臭い出す。そうしたら仕方ないので「まだ食べられる」という時点で、鯛もやつと落ち着くことが出来た（笑）。宮中の言葉で「おひら」という魚が出て来るんですが、これはどうも鰯じやがないかという気がします。公家は鯛より鰯をよく食べてましたんじやないでしようか。

旗持 京料理が高いというのはどうでしょうね。高野 私もそう思います（笑）。やはり付加価値を味わわなければいけないんでしようねえ。器とか、

川端 十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にこんな



話があります。二軒茶屋で食事をするんですが、あんまりお値段が高いので器を持ち出した、「これはきっと器ごとの値段だらう」と考えてね（笑）。

京料理には確かにそんなところがあります。器を御覧頂いて、いくら——というところはね。

長岡 私も紅白饅頭にこだわるんですけど（笑）。

あのお供えの時の「黄白」もあんまり意味のあるものじゃないんですか。

川端 ありませんねえ。不淨の場合に黄白を使うとは限りません。

袴蒸という台形のちょうど袴の腰板のような形の餅がありまして、今は白だけになつて、師走のお茶事の菓子になつていますが、かつては白と黄でした。大掃除や煤払いという師走の行事の時に戴いたものです。ですから、どちらかというと、お目出度い色合せであつたと思いまますよ。

赤田 私は仕事が棟上げに立ち合うことが多いのですが、赤飯が出ます。あれはどうですか。

川端 昔の棟梁だつたら、怒つてしまいますが（笑）。縁起が悪いってね（笑）。これはもう大切な約束事だつたんです。棟上げをするという神聖な時に、赤飯は絶対にしてはいけないものでした。棟上げの時は白蒸を出します。

赤田 お酒は大丈夫ですか（笑）。何せ酒を飲むことを人生の楽しみの一つにしている者ですから。

川端 私もそうです（笑）。お酒は御神酒ですから一向にかまいません。

赤田 食文化の中で酒というのは、どういう位置にあつたのですか。

川端 「明白記」の頃は「ただ酔うことのみ」意味があつたようです。味が問われるのは中世です。京には「柳の酒」という名酒がありました。こういう名称が出て来るのも中世からです。池川 私は味という目に見えないものをいかに伝えてゆくかというところに関心があります。今の子供はとにかくハンバーグにカレーですから。この味という文化、とても高尚な文化だと思うのですが、これをいかに次代に伝えてゆけばいいのか。

川端 難しいですね。

伊部 学校給食に問題あり、ですよ。

川端 本物を子供の頃から味わうということが一番でしょですが、難しい。せめて本物を観ること、そういう状況を家庭で作ることでしょですね。観ると味わうは決して別ものではありません。

高野 いいものは高いと考えていいのでしょうか。こだわりますけど（笑）。京菓子はお高いです。観て美しい、とは思いますが、それもお値段のうちなんでしょうねえ（笑）。

川端 すべてがそうとは言えませんが、値段が高いから美味しいというのではなくて、美味しいものは少々値が張るということはあると思います。ただいかにも手間暇かけました、という売り方は先程も申しましたが、私は好みません。さり気なく、美味しいものを、作りたいですね。値についての判断は、それを食べて決めて頂く、ということで、やはり最終はその人の価値判断に委ねられることがあります。

伊部 本物とはさり気なく。それが洗練。それがいいお話、ありがとうございました。

家にも銭湯があつてよいのだ

トーライーダー・小倉 一夫（編集者）
担当
.. 谷口 主嘉（伝青）

出席者（発言順）

長戸 幸雄（建築）
倉本 恒一（建築）
熊谷 正信（設計）
柏木桂三郎（K I S）
海野 克己（伝青）
片桐 嘉正（日図）
野々村道信（K I S）
松岡 正（金属工芸）
鈴鹿 芳康（K D A）
小川 佳己（環境デザイン）

町のシンボル

地名を冠する銭湯



小倉 私は『江戸っ子』や『手わざ』などの雑誌の編集を通して、伝統文化を現代の中でのようなかたちで生かしていくか、ということを十年ほど考えて参りました。そこで、今日のテーマとして「家にも銭湯があつてよいのだ」とさせて頂いたのですが、銭湯と暮らしというものが都市生活の中でどういう役割を果たしてきたか、ということを皆さんと一緒に考えてみたいと思つております。

で、京都のことは東京で生まれ育ったものでありますから、京都では今や「住む」ことのアイデンティティが殆どなくなってしまっている、故郷を喪失してしまっている、という感じがあつて、その原因を考えてみましたところ、銭湯という問題が浮かび上がつてきたわけです。

古い資料などを見ますと、銭湯というのは、江戸期から戦後しばらくの間までは、地域共同体の共通認識をもつことのできる場だったわけです。それが東京ではどんどん少なくなってきて、町内に一軒ずつあつたものが一区に何軒かという感じになってきた。結局このことが、我々が都市を、殊に東京を見る場合、イメージの断絶を惹起している、と思うんです。今日はこの点に関する京都での現状をお聞かせ願いたいとも思つておるんですが、建築家の方、その辺りをお話し頂けますか。

長戸 京都も比較的テンポは遅いですが、やはり『近代化』の波は押し寄せていて、銭湯にしても徐々に数が減少しているわけです。話はちょっと

と変わらんですが、私は先日ある人から相談を受けたんです。その人は京都郊外の大きなニュータウンのすぐそばに先代々お住みになつてゐるんですが、古い因習に縛られて生活が困難になつている。ニュータウンの生活と古くからの生活との間で村八分的な扱いを受けてるので、他の土地に移りたいとおっしゃるんです。もしその町内で生活するなら、明治期よりまだ前の時代のしきたりを守れと言われたそなんなんです。

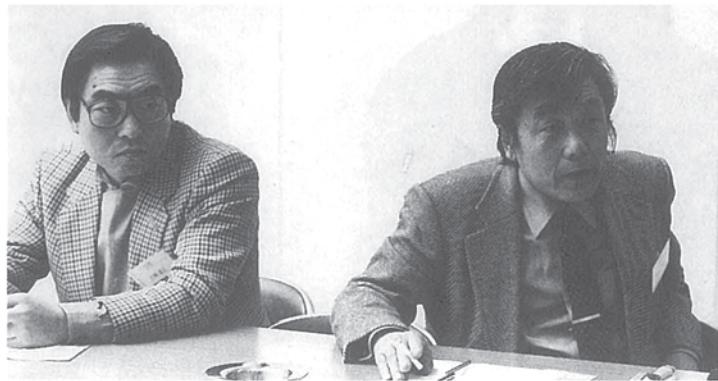
谷口 長戸さんは銭湯をデザインされたということはございませんでしょうか。

長戸 最近一つやりました。が、それは京都市が行政的に配慮して作る銭湯ですから、ある意味で特殊なケースになると思います。その土地のコミュニケーションを深めるために、行政も特別の予算を付けて行うというものですから、色々と要望が多くて、設計には随分苦労しました。普通の建物の場合には、注文主の好みという一つの点から考えればいいんですが、銭湯というのは不特定多数の人全員が満足するものでなければならぬわけで、昔の銭湯はひどく単純なものでしたが、今は銭湯の中に多數の要素や機能が入つてるので、普通の建物の設計より数倍の神経を使いましたね。

谷口 どういうご要望が多かつたんですか。

長戸 まず機能の問題ですね。泡の出るものや、温度差のある浴槽を作れとか、身障者が利用しやすいものを付けるとか、そういうものです。今までのように、入ると脱衣場があつて、浴槽があつて、という単純なものではありませんのでね。

倉本 これは京都の話ではないのですが、温泉を



利用して色々なリフレッシュできるレジャー施設を去年、建てさせてもらつことがあります。そこは過疎の村で、特産の牛を絡ませた村興しとして企図されたもので、その基本設計をさせて戴いたわけです。ところで、私は滋賀県の琵琶湖大橋の近くに住んでいます。そこでは正月に新春マラソンが行われ、地域の人全員が参加するんですが、その後で温泉に行くんです。走って、温泉に入つて、みんなで一杯飲んで、というのは非常に愉しい一時になるんですね。そういうものを都会の中に残しておきたいと思いますね。

小倉 錢湯というと、町のランドマークみたいなところがありますよね。歴史的資料を繙くと、京阪では「桜湯」なんてのが多いですが、江戸では昔から地域名がそのまま錢湯の名になつていています。錢湯は町のシンボルであつたと言われているし、また我々もそのように感じています。

都会のシンボル

錢湯を知らない子供たち

熊谷 京都にあるかどうかは分からんんですねが、名古屋には「ゆーとびあ」というのがあって、これはヘルスセンターと錢湯とを兼ね併せたようなものでして、様々な薬湯があつたりして、現代の錢湯だらうと思うんです。この「ゆーとびあ」の社員が朝、マイクロバスで地域を回つて、地域の老人たちを集め、老人たちはそこで日がな一日過ごすのですが、そこに来て初めて友達が出来るんです。自分の住んでるところのコミュニケーションじゃなくて、そこに新たな友達・知合いが出来

てきて、彼らと色々な世間話をしている。ここには宿泊施設もあって、何日も泊り込むこともあります。商売ベースで考えますとあまりいいものではないかも知れませんが、老人問題と併せて考ると、あながち商業主義だとばかり言えないと思うんですね。老人をターゲットにした商業主義的な「ゆーとびあ」が、果してこれからの町の中のランドマークになるかどうかは分かりませんが、ただ、その地域では一つのランドマーク的なものになりつつあることは確かなんですね。また、建築家の石井正三さんは講演で、浴室をのびのびと大きなものにすべきだと言っています。これは風呂の家庭の中ににおける位置づけを高めようという考え方だと思います。今まででは居間が家族のコミュニケーションの場であったがそれを浴室に転化してみれば、ということだと思います。昔は親子が背中を流し合うということがあったのですが、今は殆どなくなっているんですよね。

柏木 私が京都に来たときはまだ、錢湯がありましたが、今は錢湯のようなものといえばゴルフ場やサウナでしょうね。同じ目的を持った者同士が一緒にに入るという傾向があるわけです。家庭風呂に関して言えば、うちは建売の家なもので、一番不満に思つてるのは風呂が小さくて脱衣場がない、ということなんです。うちは私を除いて女ばかりで、しかも私は午前様で帰宅し、翌朝八時に家を出る、という生活パターンを探つてますので、私の裸を家族にさらすことは殆どないんです。昨年、家内が小学三年の末娘を風呂に入れてやつてくれと言つて、それまで女の子どもに男の体を見



せてなかつたんですね。このように家庭内にあつては風呂にはものすごく大きな役割があると思いますね。家庭風呂が大きければ家族が老人を含めて一緒に入ることもできるし、そのことで年齢の人体に及ぼす影響も眼で学ぶことができるわけです。ですから、今度家を建てるときは風呂のスペースを大きく取りたいとは、思つてゐるんです。

海野 うちには中学二年から小学一年まで三人の子供がいるんですが、私はあまり家にいないもので、子供と接触するのに風呂を最も利用してゐます。上の子はもう恥しがつて入らないですが、下の二人とは風呂でコミュニケーションを持とうとしているわけなんです。裸で話し合えるということは素晴らしいと思うんですが、上の子の話では、修学旅行でお風呂に入るときに水泳パンツをはいて入る子がいるらしいんです。非常に残念なことだと思います。下の子がよく銭湯に行こう、って言うので、半年に一度くらい近くの銭湯に行きますが、銭湯に行きたがる理由を考えてみると、銭湯には泳げるようなスペースがあること、帰り道でジュースが飲めることが気に入ってるようなんですね。ともかく、私自身は風呂をコミュニケーションの場として大事にしていきたいと思つてゐるんですけどね。

片桐 私のところも一人娘で、男は私一人なんです。家庭に風呂が出来て十年になるんですが、この十年一度も、ただ体の洗浄という義務感だけで、風呂でくつろいだという記憶がないんですね。それ以前は銭湯に通つてたんですが、風呂桶、タイル等のデザインが貧弱じゃないかと思うんです。そ

の辺の仕事もしてみたいと思つてゐるんですけどね。小倉 昔の銭湯は、建物も内部も随分凝つたデザインのものでしたね。ですが、今の家庭風呂と言つうのは機能化してしまつて、コンパクト化していると思うんですね。

野々村 私は三十一歳になるんですが、「銭湯を知らない子供たち」というのか、亀岡の、その中でも大層田舎の町におりましたので、風呂は当然自分の家にあるものだったのです。家庭風呂と言つても、田舎のこととで広いスペースが取つてあります。親父と肩を流し合う、ということはできた、ただ家族以外の人とは裸で語り合うということはありませんでしたが。初めてみんなと一緒に風呂に入ったのは修学旅行に行つたときだつたんです。もつとも、水着を着けたりはしませんでしたがね。言わば、中途半端な年代になるのですが、逆に入つたのは、親父と肩を流し合う、ということは、まだ家庭以外の人とは裸で語り合うということはありました。今は、環境にもよりますが、逆に銭湯というものを知らない世代の者として、その歴史的な役割に興味を覚えて、今日ここに参加させて戴いたわけです。今では、環境にもよりますが、少なくともシャワールーム的なスペースとしての風呂は一戸に一つはある、という感があります。京都市の住宅課でなさつてホーリー計画のように、一・二階ともに浴室があるといつた時代になろうとしている、また、食事もぱらぱら、話し合う時間もない、という状況にあって、浴室で裸になつて話し合うことの意義を真剣に考えみる必要があると思います。先ほど熊谷さんのお話にあつたような施設は実は京都にも二軒ほどあります。南の方には「健康村」というのがあつて、薬草の入つたお風呂の他に劇場、アスレティック

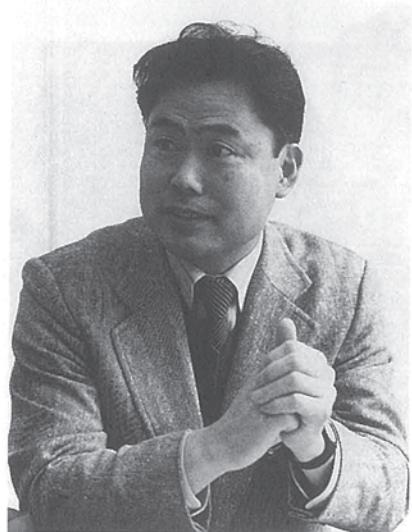
ジム、ビリヤード、ゲームセンターなどの設備があるんです。ただ、老人だけでなく、若い人も利用しているんですね。私も家族連れで行つたんですが、これが銭湯の現代の姿かな、と思つたりしたんですが…。

小川 つい最近天然ガスの切り替えで風呂が沸かせず、久しぶりに銭湯に行く機会がありました。来の方は決つているようで、その中に「世界」みたいなものがある感じで、出入りの時に気軽に挨拶をして、私なんかには容易に入つていけないような感がしました。また、おばあさんなんかにとっては、銭湯というのは他の人と話ができる、言わば「社交場」みたいになつてているということを知り、面白いなと思いました。



松岡 私の経験では家風呂には四つくらいの役割があると思います。一つ目は教育の場としてですが、私は帰宅が比較的遅いんですが、日曜日には小学三年の息子と一緒に風呂にはいるようにしているんです。小学校三年くらいの子は色々なことに興味があるんですね。柏木さんのおっしゃったようなこともあるんですが、他にも例えば放屁などという現象も起こります。なぜおならはガス状で出るのかを、物理学的に説明してやるんですね。ガスの水溶性の問題とか、比重やアルキメデスの法とかしてやれるんです。子供は本当に恐いほど質問をしてくるんです。二つ目は老人問題で、私も銭湯は小さい頃に経験しました。燃料もなかつた昭和の二十七、八年のことで、銭湯もなかなか行けず、隣近所の風呂を借りるという制度があつたのですが、各戸が順繰りに湯を炊き、もらい湯

をしてた、そのことで他人の家庭を知ることができたわけです。風呂には直接関係はないんですが、老人を他庭ではどう扱つてあるかを知り、自らの家の対処を省みることができたわけです。今は核家族化の進行でこういうことは不可能になっています。老人問題も、元気に動けるうちはいいんですけど、足腰が弱つてくると深刻になる。私は父と一緒に住んでるんですが、八十幾つになつてしまつて、湯舟に浸かるのがやつとという状況なんですね。うちの息子におじいちゃんの背中を流してやれと言つても絶対にしない、私は銭湯に行つてましたから人の背中を流すことに全く抵抗がない。そこで私が週に二回くらい一緒に入つて体を洗つてやるんです。老人ホームという手がありますが、家庭の中で老人が入りやすい風呂とはどんなふうに考えればいいか、というのも一つの課題だらうと思います。三つ目は個人のストレスの解消ですが、銭湯ではやり難い面もありますが、内風呂では、下手な歌でも歌えますね。私の家の風呂は密閉したかたちの風呂ではなくて、風呂から四季の庭の風景が綺麗に見えるようになつてて、気分がほぐれるんです。四つ目はリハビリの場ですが、私は十年ほど前に十二指腸潰瘍をやりまして、十数キロ減り、二か月ほどで元に戻つた、ということがあつたんです。私は何も食べずに十一時まで仕事をするということがあるんですが、病気をしてから食べなくちゃいけないと思って、それを実行すると今度は太り出したんですね。本にこれを避けるには正座がいい、とあつたんですが、正座がなかなかできない、ところが風呂の中では案外



『浮世風呂』

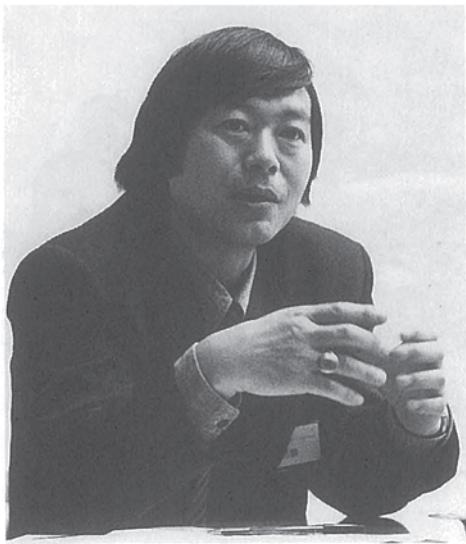
混浴と猥雑さと

簡単にできるんですね。これを実行すると腹が引っこ込み始めました。それから最後に、銭湯に関しては、京都市が醍醐にごみ処理場設置するに当たって、その住民への補償というかたちで排熱を利用した温水プールと老人用の温泉を無料の施設を設置したこと、それだけご紹介させて頂きます。

鈴鹿 私も皆さんと同じで、裸になる、さらけ出さないと入れないところは、一番気が抜けると思います。誰と一緒に入っても、やはりリラックスできる。現代人は根本的なところで、経済的には問題が出てくるだろうけど、シャワーとお風呂とは両方とも必要なんじゃないかと思うんですね。夜遅く帰宅したときには風呂をわざわざ沸かすといふのは面倒ですね。シャワーで済まして、朝、シャワーで起きるという習慣つて、アメリカ人なんかは普通ですね。でも日本人の場合は、銭湯が人ととの触れ合う中で自分を解放しながら人のコミュニケーションを持つという最も有効な場であると思います。また、現代人は独りになると、いふ場が必要で、それがシャワーであったり、トイレだつたりするんですね。排泄物と同じで、人間の精神もはけ口を必要としてて、如何にバランスをとつてもう一回復活させるか、が問題となるんですね。ところで、私は十数年前に関東から京都に移ってきたんですが、当時は新京極の桜湯によく行きました。近所の人だけでなくて、観光客や色んな人が集まる場所でした。これから都市

計画をやっていく上で、醍醐とか、そういうた周辺部ではなく、一杯飲んでから旅館に帰るまでに入れたり、昼飯を食いながら旅人同士が情報交換をする場なんかを作ればいいと思うんですね。アメリカにはあるんですよね、銭湯じゃないけどね。例えば、グレイハウンドバスで旅する場合はステーションの周りのレストランだつたりするんですね。京都の場合はバスプールというより、建築家の大膽な発想による、新しいタイプの衛生的なパブリックバスを作るとかなり面白いと思うんですね。風俗的なものではない本来のトルコ風呂というのも情報交換の要素を持っていましたと、どこかで聞いたこともあるし、これは写真展で知ったんですが、アフリカの地中海沿岸の国では砂漠の中にサウナがあつて、そこは汗を流す場であると同時に、どこどこの産地ではどんな特産品があるて、とかいう新しい情報を得る場でもあつて、現在でも活動してらっしゃいます。京都も坊主と寺だけじゃなくて、情報を線につなげていくために風呂場っていうのが的を得た場所じゃないかと思うんですが。それも個人のものじやなく、公共のもので定義できれば面白いですね。

小倉 銭湯というテーマだったんで、式亭三馬の『浮世風呂』というのをもう一度ちゃんと見たんですね。江戸時代のお風呂と人間の接し方は僕らの接し方とかなり違う、そこで切れちゃってるという感じがすごくするんですね。なぜ切れちゃったのか、僕は不思議に思つてて、江戸期から戦後のある一時期までの風呂に対する考え方が抜けちゃつたとしたら、埋め合わせるのにどうしたら



いいかな、って考えたのね。今という時代は銭湯

だけじゃなくて他にもこういうことが随分とある。テクノロジーが発達してくると、京都の職人さんたちはテクノロジーと全然切れちゃう。僕はその

中間を埋め合わせ、つなげるような作業を何かしなくちゃいけない、と思うんです。銭湯に関して

は、江戸時代は混浴ですよね。そういう猥雑さつ

てのが本音的な部分で人間関係を作ってきた、そういう文化があつたんだけど、今は建前のになつちやつて、前提条件があつて、入浴するという姿勢が広まってるんじやないかという気がするんですけれども。

熊谷 先ほどの学問の場、ストレス解消の場、老人問題の場というのだが、これからの風呂を考える上で非常に重要だと思うんですね。長野県の今まで出来たハウジングですが、そこでは高齢化社会に対応した設備が金さえ出せば取り付けられるように計画されているんですよ。寝たきり老人でも、ボタン操作でベッドに寝たまま風呂まで、トイレまで移動できる、そのためのスペースが十分取つてある、というようなものが実際に出来上がっているんです。ただ、これは一戸建ての場合はいいんですが、マンションのような協同住宅となると難しいと思います。ところで石井さんの本の中に、風呂はできるだけ広いほうがいい、とあつたんですけど、これは冬場になると寒いんですよね。欧米のようにシステムが入つていれば問題はないのですが。先ほどの鈴鹿さんのお話に関してですが、名古屋駅には銭湯があるんです。ここでは、風呂に入つて洗濯してくれるというサービス

スもやつてるんです。

鈴鹿 銭湯が名古屋駅にも京都駅にもあるとしたら、飲み屋とかレストランだけじゃなく、それを扱う旅情報マップを作れば、目先が変わつて面白いと思いますね。

寺より始まる

沐浴・温泉・観光

長戸 結局ね、清家先生がおつしやつた団地サイン等と共に風呂場を取り入れたこと自体は、日本の住宅政策のいい面でもあるわけです。しかし、このことで銭湯は顧客を奪われ、消滅していくことになつたんです。経済的な流れだったんです。ところで、家庭の風呂が家族の対話の場ならば、銭湯は地域のそれであるわけですね。だから、行政面で何らかの施策をしないと、今のままでは経済的に見て、銭湯の運営は難しいと思うんです。倉本 お風呂の流れを以前に調べたことがあるんです。家屋の中に風呂があるというのはお寺が最初だったんだそうで、沐浴というか、体を淨める宗教的な要素があつたわけです。八世紀くらいにお金も取るようになつた。そういう流れと、健康を保つための温泉等の流れもある。ところで、銭湯がなぜ面白いかというと、大衆的なものが宗教的なものと共に始まつてきた、という点で、この点をもう一度見直す必要がある。地方では村興し



とかで、観光を主眼にした温泉開発が行われていますが、公共施設としてこれを行なうこともできるんじゃないのか、と思います。

小倉 京都の風呂屋の建物は東京のものと違うような気がするんです。東京では破風屋根と言うか…。京都はそんなことない?

倉本 古くはそうです。お寺の大きい建物の中に蒸気が逃げないように下屋を作ったんですが、それが破風だったんで、これが流れを作った。

柏木 西武に行ったとき、滑稽な感じがしたのは、お風呂の中にテレビ、電話、ステレオ、サウナがあつてね、もしこれがいいとされて、情報化されしていくとすれば、悪い面が一杯出てくると思います。お互いに話すということがなくなってしまう。

小倉 先ほど松岡さんが仰ったような、銭湯で培われたことが色々あるわけですが、それをインテリアの中に生かしていく方向性はあるんですね。

柏木 その辺りはまだ「勉強中」といった感じですが、主觀から言うと、広いスペースは取りたいと思います。訪ねてきた人を接待するには、田舎でやられているようにお風呂に入って戴きたい、だからお風呂には玄関や応接間に等しいスペースがあつたほうがいい。

小倉 鈴鹿さんはアメリカに長くいらつしやつたようですが、アメリカ人の風呂に対する接し方といふのはどんなものですか。

鈴鹿 僕がみってきたのはロスとかサンフランシスコで、十年くらい前のことなんです。土曜なんかにちっちゃなバーみたいなんかがあったときに見ると、ちゃんとジエットバスみたいのが付いてる

んです。十人くらいでビールを飲みながら入るんですが、よその奥さんが裸だつたりして、逆に恥しかつた。アメリカ人っていうのは個人という感覚があるんですが、日本に来たときに銭湯に連れて行くと、裸の付き合いみたいなものを意外に喜ぶわけね。逆にそのようなものに飢えてた部分が彼らはあるんじやないか、と思いますね。仕事から解放されたときに、本音を出したいからバスタブみたいなもの利用するんだと思いますね。

小倉 映画なんかでは戸外ででっかい桶みたいのがよく出てきますが…。

鈴鹿 サンフランシスコなんかは一年中雨が全く降らないところだから…。これは間違いなく日本からの影響ですよね。

長戸 僕もそう思いますよ。もともとアメリカにはそういう風習はなかつたと思うんですね。進駐軍として日本に来た米兵は銭湯を愛用したそうですから、輸出された風習じゃないですかね。

小倉 つかるっていうようなことはなかつたんじゃないですかね。

長戸 今日のテーマは銭湯ということなんですが、今までの話は銭湯と家庭の風呂とがごっちゃになつたと思うんですね。纏めるという意味で、それを整理して置いたほうがいいんじゃないかと思うんですが。家庭の風呂ではスペースを広く取ること、銭湯では経済的な問題で減っていく傾向にありますから行政的配慮や、その魅力化が待たれるわけです。

谷口 時間が来ましたので、残念ですが、これで終らせて頂きます。皆様ありがとうございました。

新「素食」のおすすめ

トーキリーダー 森本 武（嵯峨美術短期大学助教授）
担当 恩地 悅（KDA）

出席者（発言順）

村山 義男（日図）	菅原 良介（KDA）
飼天 成雄（KDA）	谷口 康男（建築）
北村 正彦（大阪住宅建設協会）	岩崎 猛（京都市経済局）
野中 政秀（平安建都千二百年記念協会）	島田 純次（日図）

生存と生活

「もつたらない」の意味



恩地 この分科会のタイトルは「新“素食”のおすすめ」ということで、素食がテーマに挙つておられます。ただこれは、やや私の個人的感性でして、トーキクリーダーの森本さんは、むしろ「節約・儉約」という方向でお考えだと思います。本年のデザイン会議のメインテーマは“人と住まい”ですが、単に人と住まいについて考へても漠然としておりますので、もっと深く、具体的なものにこだわるということで設けた分科会でございます。

そこで、自ら貧乏暮らしの大家? を自認される

森本さんのお話を聞かせて頂いて、それを基本に、討論を展開したいと思います。森本さんは嵯峨美術短期大学の先生でして、今日のテーマと関わる節約・儉約を考え実践する「節儉俱楽部」の代表でもいらっしゃいます。今日は最後をうまくまとめるということは、あまり意識しておりませんので、元気よく楽しく論議に入つて頂きたいと思います。それでは森本さんのほうから。

森本 今日は食事のことがテーマに挙つておりますので、観念的な事より、まず私自身の食生活をお話したいと思います。私はこの二十数年間、玄米を主食にしており、またいわゆる菜食主義をとつております。それもできるかぎり生で食べますから、まずガス代があまりかかりない。電気代も要らない。食事の準備も簡単、かたづけるにも油物がないので水で流せばカタがついてしまう。

こういう集まりで自分の生活について語るとな

ると、以上の事ではほんきでしまうんです。今までの集会は、主婦の方とかが多くて、関心を持たれるのは病人がいらっしゃる場合、あるいは美容上の関心、この二点です。しかし、僕の思つてることは、人間の暮らしには、「生存」の面と「生活」の二つの面があり、僕の菜食主義は基本的に「生存」の面からきている、ということなんです。今日お集り頂いたのは男性方ばかりですが、このあたりのことが今日のテーマにつながると思います。ただこの生存と生活という分け方は僕のオリジナリティではなく、中村天風さんという、明治中期に関東方面で活躍されたヨギ(ヨガの行者)が、「生存と生活の両輪をいかにうまく噛み合わせていくか」ということを言つておられます。

恩地 森本さん自身もヨガをなさるそうですが、いまの生活に入られる根底にはどんなお考えが。

森本 僕はどんなことを考へる場合も——デザインやもの作り、あるいは今日のテーマである食文化にしても——まず「生存」ということをしっかりと念頭に置くことが必要だと思つています。例えば最近のグルメブームも、あまりに生活面の豊かさに焦点があつられ過ぎ、かえつて生存面が危機に瀕しているんじゃないかと思つています。さきほど、私は菜食主義だと申しましたが、決して完全主義的に無理にがまんしているわけではなく、もつと気楽にやつてまして、この後のパーティでも焼鳥をつまんだり、ビールの一杯(笑)も飲むかも知れません。ただ、単純に、素朴に、人間はこんなもので生きていけるんだなあと思つてしまふ。私達人間は、普通考へる以上に少ないもので

生きていける。今まで必要だと思っていたものが、実はそうでもないということが解るんですね。

恩地 森本さんは気楽にやりながらも、相当深く

貧乏道を追求されているようですが、ここでの「素食」というのは象徴的な意味でして、別に食でなくとも結構ですので、皆様の実践例みたいなものは出ませんか。

村山 最近の子供は好き嫌いが激しく、いろいろ健康面の問題が出てますね。偏食、それからインスタント食品の問題も、それにマスコミの影響も大きいんです。

菅原 もうひとつ「もつたいない」ということも検討課題に加えて欲しいですね。例えば市場で大

根買うと、葉っぱがついてない。大根葉はうまいものです、キャベツの芯だって味噌漬にしたらいける。今の主婦は、そういうことが解らない。今日、これだけ男連中が集つたのは、ひとつには、そんな風潮に対する憤り(笑)があるんじゃないかな。

恩地 本当は奥さんも連れて来たかった(笑)。

菅原 もう今の奥さん方や若い人達は、山菜摘みに行つても、それが食べられるかが解らないんですね。ドクダミが傷薬になるということも御存知ない。野菜は八百屋、葉は葉屋で買うものと思ってる。私が嵯峨に住んでますがセリを摘んでいると、「何やっているんだろ」とへんな目で見られる。

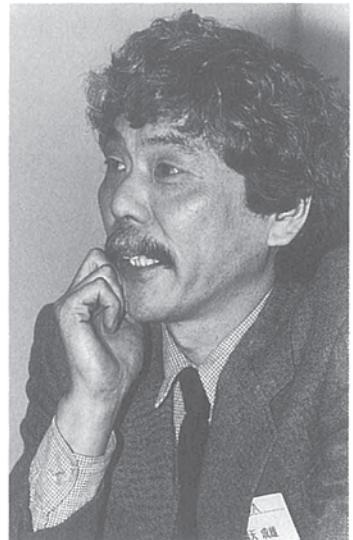
森本 奥さん方によく子供の偏食について聞くんですが、僕はむしろ食べさせ過ぎてないかが問題だと思っています。食べ残してはいけないと、口に押し込んででも食べさせる、というしつけをする。

る。これは生存指導ではなく生活指導ですね。僕は食べなければ食べないで、ある程度ほっておいていいと思う。生命自体が本当に求めるまで待つ。食べ残してはもつたいない」ということがあります。ですが、食べたから、口の中に押し込んだから安心するというのは、問題があると思いますね。

恩地 今のお話に関して、私も、偏食というか、嫌いなものは食べないというのは、そんなにいけないことじやないと思います。食べたいものを食べ、食べたくないものは食べない、それで食べるものがなくなつて死にそうななんでも食べるでしょう。私の素食は、野蛮人の発想(笑)です。

鯛天 何かきっかけがあつたんですか、今日のテーマにとても思い入れが深いようですが。

恩地 いや特にはありません、じわっとです。強いていうなら、あるタクシーの運転手さんと、タクシーとマイカーとどっちが高くなつか、という話をした時からですね。要するに、生活の余計な付属物を少しずつとつていて、生活を簡素化する、言つてみれば引き算方式ですね。例えば、広い部屋が本当に高質の生活を保つとは限らない。それから、今コマーシャルで流れて「シバ漬食べたい」じゃありませんが、結局ゴハンと吸物と丁寧に作られた漬物、これだけあれば十分という感じ。そりやフルコースのフランス料理もおいしいです、でも、あの値段と、もつと安いもの、吉野屋の牛丼とは言いませんが、値段の差だけ味の差があるのかということですね。それにいわゆる「偏食」への疑問、エスキモーは生肉を主に食べていい



るわけでしょ、よく引き合いに出る栄養学的問題、これもなんだか怪しいと思ってるんです。やっぱり野蛮人の発想ですね。

森本 それから私、料理の技術にも関心があつて、例えばできるだけ包丁は使わない。キャベツは手で千切つてサラダにする。包丁がもつたいないのではなく、千切つた方が細胞壁が壊れ難くておいしい、保ちもいい。道具は手の延長であるといいます、つまり道具の原点としての手を見直したいということです。もちろん包丁が必要な時もありますが、手でできることをわざわざ包丁でする必要があるか、ということです。

恩地 食べるということ以外では何か。

谷口 僕は住まいながら仕事をしているもんですから、仕事部屋が要る。そうすると生活の部分を、冷蔵庫とか水屋とか、全部一か所に集めて、暮らす。座つたらほとんど周囲に何でもあるわけです。

子供達も、そういう部屋に一緒に居ると話す機会が多くなります。

菅原 部屋というと今、ものが多すぎますね。私、前に住んでいた家を売つて、アパートにいます。そうすると部屋数が半分になつたんで、要らないものが目についてくる。半分以上要らないんですね。それ全部捨てました。今、ひとつずつ部屋で食事はする、子供は遊ぶ、これが団地サイズの六畳ですかね。京間で言うと……。

恩地 三畳くらい(笑)。

菅原 そう三畳ぐらい、けれど十分使えますよ。今までいろいろなものを買ってたけど、これからは不要なものを買わないようになります。そうすると

意外と広く使えるんです。いくら広い家に住んでも、ものがあふれたら狭くなる。ですから今、建築関係の人は、その辺のことも考えなきゃいけないと思いますよ。現代の住宅、展示場を見ても、間仕切りが多すぎます。昔は違つてましたよね、一部屋がドンと大きいです。特に田舎ですとね。

谷口 私も田舎なんですけど、廊下というものがながつて大きな部屋になる。これは和室の大きな利点だと思う。

菅原 だいぶ前ですが、アメリカの建築家が、日本人はゼイタクだと書いてた。畳の上で、さらにジュウタン敷いて、ベッド置いてる。

恩地 三重の床ですね。ひとつおたずねしたいんです。部屋数半分になつたアパートに越されて、不要な家具なんかはどうされました。

菅原 残してます。

恩地 実は残していると、そこなんですね。私もマンションから一戸建へ越しまして、古い家なもので四畳半の納戸なんかある。そこに一杯入れてて、日常生活に絶対必要なもの以外は全部押し込めた、使わないものは処分すると言いつつ、これができるない。ものへの愛着を捨て切れない。

菅原 私もこの四年半、動かしたことないですね。恩地 「クロワッサン」の特集記事に、台所の再点検というのがありまして、高見沢さんという家事・生活のプロが整理してみたら、三分の一に減ったというんです。まだまだ使えるとか、形は好きじゃないけど、機能は生きてるものとか残している。で、ジャガイモの皮むきなんか五本も出



てきて、実際に使っているのはそのうちの一本だけとかね。視点を変えると見えてくるわけで、僕の場合はケチ学というか、一つの象徴化の手段としてお金に換算すると解り易いことがある。

菅原 そうですね。私もやはり、こんなに稼いで、なんでこんなに使うんだよ、ということでお金に換算してやりました。

森本 そういうことはよくあります。だけどもの問題というのは結論は明らかで、全部心の問題だと思うんです。だから例えば、僕がヨガをやつたのも、ついでにやつたんじゃなくて、もうこれしかないとと思ったからなんです。恩地さんは、お金に換算すると解り易い、と言われたけど、それを時間に換算する場合もあるかも知れない。でもそれは、先ほど申しました「生存と生活」に分けたら、生活的尺度なんです。で、あるところまでは、そのモノサシで測れそうですが、ある時期が来るとそれも役に立たなくなる。結局最期には生存のレベルで考える必要が出てくる。そうなりますと、つまり心の問題と言うか、いくらお金があるかという問題でなく、満足しない心があれば満足しないということになってしまいます。

鯛天 私の場合、学生時代の二年か三年の頃ですがね『ヴァン・ゴッホの日記』というものを読んだんです。その中に「芸術は苦惱である」と書いてある。で、ゴッホは耳を切つたりして自分を傷つける。実存主義なんかも流行っていまして、そんな影響でもうほとんど食わないようにしようと。これは素食というより絶食に近い、そんなわけで、食事は摂らない、服は着ない。

恩地 着ない？ 裸で。

鯛天 いえ、流行の服は着ない。

恩地 そうでしょうねえ（笑）。

鯛天 できるだけ汚い格好をする。で、酒・タバコはできるだけ飲む。（爆笑）。これを二年続けるとダウンしました。結核になつて痛い目に会つた。やっぱり最低限のものは食わんとあかんと思つたんですが、おいしいものを少し食べる。料理でいえば日本食ですね。素材の味を生かしたもので、その固有の味を楽しむということになります。なぜこんな事をやつて来たか、今から考えるとやはりハングリー精神と言うか、自分を納得させてやつてるわけです。だから僕の心の問題が食べ方に反映してましたね。

森本 お医者とか専門家が、NHKの「今日の健康」なんかでやつてる栄養の偏りとかの問題、あれはほとんど役に立たないというのが解つてながら聞いてるんですね。その中でたまたま、役に立つと思う人がいるとかえて危険なんですね。人間は、自分の身体で実験できることがたくさんあります。ま、鯛天先生の場合は、あまりに大きな実験（笑）をされて…。

鯛天 結果として非常にしんどい思いをした。

森本 だけどね、非常に貴重な体験をされたと思います。僕がやつてるヨガというものは一切理屈ではありません。例えばニンジンにビタミンAがいくら入つているといつても、食べる人によつて吸収率が違うし、嗜み方によつても違う。よく「ゴ



ハンは一杯で十分ですか」と質問されたりしますが、答えようがありません。食べる時の条件によって大きく違うんですから。そういうことは、お医者さんとか誰かに聞くことではなくて、自分での身体に聞くことなんです。ただ人間には欲望というものがある。これは完全に大脳の支配ですが、この欲望の嵐を鎮めて、生命の一番の元からの声が聞こえるようにしないと。

鯛天 ただ、お話を聞いてますと、それは大変理想的だと思うんですが、人間というのはやっぱり煩惱でしょう(笑)。天井なら食べたいけど、玄米ゴハン出てきたら食欲わかない、その辺をコントロールするのがかなり難しいと思うんですけど。

恩地 主に玄米食で? 生野菜と木の実、果物。

森本 果物はだいたい食べますね。

恩地 それはですね、自分の生存本能を聞いて食べるのか、それともおいしから食べるのか。

森本 やっぱりまず生存本能でしょうか。今指摘されたように、これはやさしいことではないということがあります。僕自身もお糀(しゃか)さんのように生きられないことも解っています。だから、大脳に支配されている部分はとても大きく、僕はクリームのたっぷりついたケーキが好きなんですが、ケーキ屋さんの前を通りますと大脑が言うんですよ「食べよう」って(笑)。

鯛天 そういう欲望はお持ちなんですね、安心しました。

森本 インドのガンジーがね『健康論』という本を書いてますが、彼は一切医者とか学者の言う事を信じず、自分の身体を通していろいろな実験を行いました。

やっていますね。『健康論』はその実験記録なんですが、要するに人間は本来何を食べる動物として作られているかというと、果物だというんです。この果物というのは穀物や木の実を含んでいます。ですが、こういうものを食べるのに適した歯の構造や消化器ができている。ガンジーはいろんな食べ方をして実験したんですが、風土的な違いもあります。日本の風土では穀物の割合を高めたほうがいい、従って玄米食が重要な位置に来るんです。

日本の漆

最高の条件の意味

恩地 そこから考えると、今、食品を輸入しろっていう経済論ね、あれはもうやめたほうがないと。だからもう自動車は買ってくれなくていい、日本の産業はどうなるんだと言うでしょうけど、こういう高い次元からすればそんなものはどうでもよろしい。やっぱり基本的には、自分達の周辺にある農業とかをしっかりと見直す必要がある。

森本 あの米の輸入問題ね、確かに経済摩擦というところからあの問題をかたづけようとするのは大変危険なことです。まず日本の風土の中で育つ米、日本でできる玄米、これは日本人が食べるべきものです。これは生命の原理として絶対守つてほしいことです。例えば大豆、輸入大豆が増えていますが、納豆だけは国産です。輸入大豆では納豆がうまく作れないんですね。ですから国内産大豆を食べたいと思つたら納豆を食べることです。それと、私達は意外と南米産のものを食べています。トマトとかもそうです。これは今言った意味でそ

れほど重要じゃないから、サラダショットなんかで食べるサラダより、もつと根のもの、さつまいもとかを食べるほうがいいんです。

恩地 私はこの食べるということ、住宅という

のは非常に関係すると思うんです。ある時、うる

しの産地で、一年ほど指導ということで行きまし

て、本当は指導されたのはこっちのほうなんですが、その職人の偉い方が、うるしの素材そのものについて、レクチャーしてくれた。日本では最高のうるしは国産のものです。次に中国、一番落ちるのがフィリピンやマレーシアのものと言うの

で、「だいたい解りますね」と言つたら「いや全然解ってない」というのはフィリピンで最高のうるしは、フィリピン産のものだ、日本のはあちらでは一番悪い。これはどういうことかと言うと、う

るしというのは、その土地、温度・湿度・風力、その他いろんな条件が合って、一番良くなるようになってくる。今お話を伺つていて、実はこれだな

と思つたんです。住宅の素材としても、何が一番

大切かというと、国産で、かつその近隣に育つた木だということです。僕はいろいろ考えた末に、

間取りとか構成も大切ですが、ハードウエアとしてそういうものが必要であると、工法にしても在

来工法というのが一番最後の答えであると思って

ます。ま、それこそ理想論と言われそうですが、一氣には無理でもジワジワとそれをやつてかないと、だめだと思いますね。

北村 私、アメリカへ行ってたとき、夕食にマクドナルド食べたらおいしくないんですね。でもジギングしてビール飲んで食べたらおいしくなつ

た。確かに「空腹は最高のソース」なんですが、次にやっぱり刺激のあるものが欲しくなるんですね。私の場合、精神集中して、一日の行動もよく考えて、一所懸命暮らす、それで刺激のある楽し

い暮らしをしたいと思うんです。

私、大日本ドケチ教ゆうのん入つてまして、「もつたらない」いうのがお経です(笑)けど。それでいろんなケチしますけど、結局ドーンと使つたりもするんです。私、今ファミリア乗つてまして、「足替りに使うねんからなんでもええねん」言うてたら、友達が、「そやけど、足替りやつたらやっぱりエエ靴はくはうがエエで」いうんですね。どうせやつたらエエ靴はいて、きれいな服着て、きれいな彼女と食事するのが最高やなあ(笑)と。

恩地 私自身は自動車やめましたけれど、車を所有するというのはもうひとつ動機があると思います。少年の日のスーパー・マン願望と言うか、機械と会話するというのは道楽としては悪くないんです。道楽なら道楽と腹をきめてバーッと(笑)。だから、ドケチといい車というのは逆に成り立つ。

鯛天 車は洋服感覚というか、素材やデザインが替つて、また新しい気分になることもある。

恩地 そろそろ時間がなくなつてきましたので、まだ発言なさつてない方どうぞお願ひします。

岩崎 素食と言いましてもね、ずいぶん昔と違うみたいですね。私の子供の頃は、食べることが大切みたいなところがあった、学校行くと、肝油なんか食べさせられて、その頃は丸々太つて元気な子とかのキャッチフレーズがありました。今は「なんか痩せてる方がええで」ということで変つて来





た。昔は大体みんな粗食やつたですから。それがいつ頃からか、「素食」やなしに食事を抜くのがたりまえみたいになってきた。

今改めて素食がテーマになるのも、素食するか飽食するか選択できる時代になつたんですね。

森本 今私が危機感を持つていろんな事を言つてるのは、環境問題というものが当然食物にも影響を落している。 Chernobyl の影響は現実には衰えていないし、魚の汚染だって進んでる。この中で、たんにキャベツをかじればいい、ニンジンを食べればいいという情況ではなくなっているわけです。

恩地 地球規模で汚染されてきていると。一方では、地球には自浄作用があるという楽観論もあるんですが、いよいよダメと解つたら、とたんに牛丼食べたり（笑）して。森本さんの直観としてはいかがですか。

森本 はつきり言つて手遅れですよ。現代のまともな科学者であれば知つてゐるはずです。ですから、いろいろ楽しもやないかというのも解るんです。ただ人生を最終的にどう見るかというと、ヨガの行者はこの世を幻想だと見ている。 Ganji が苦労していろいろ実験したのも、地上的なレベルでの話ではないですね。もっと我々の命が永遠に輝くというような問題だから、ちょっと普通の議論には乗つてこないところがありますね。例え

野中 立場上 というか、建都千二百年までは保つてくれるよう（爆笑）。お話を食事とか住居の問

題で始つてゐるわけですが、この京都には大きな蓄積がある。いろんな意味で。 東京は京都ほどの蓄積はないんですけど、すごい消費をやつしているわけですね。都市として飽食をしている。一方京都は貯めても、消費がない、使わない。使わないと常に消耗していくんです。だから東京とは違う意味で、飽食ではなく、うまく消費しながら、同時に新たな蓄積もはかりたい。それが建都千二百年の京都の課題だと考えているんですが。

菅原 私はやはり自然に戻ろうということが大切だと思うんです。個人個人が持つてゐる自然にね。

森本 自分にとつての自然を発見するため人生があるとも思うんです。それにはある程度揺れさせてみた方が解ることもあります。私も無茶な断食をやつしたことがありますが、これはひどい目に会つた。けれどもそういう揺さぶりの体験というのはとても貴重なものでしたね。

鯛天 こういうことはなかなか結論出ないと思いますが、自分にとつて素食とは何か、ということを発見していくべきいいことでしちゃうね。

森本 私、さつき地球の将来は悲観的と言いましてたが、ある意味で、それを乗り越えて人間についての素晴らしい発見ができるかもしれない。個人的にはそう思つています。

菅原 悲観的になつたらやつてけませんからね。

島田 一番初めの森本さんの問「生存と生活」を考えることから、まずは始めたいたですね。

恩地 そろそろ時間が来ましたので。難しいテーマにもかかわらず明るい討議ができました。どうありがとうございました。

とことん、ほんまもんつて 何んやろ

トーキーライダー・吉田 孝次郎（画家）
担当
.. 中村 隆一（KDA）

森下えり子（塾講師）
北島三和子（デザインシコーディネーション）
大沢 英二（タオルデザイン）
若林 溫子（KDA）
加藤 廣隆（釘抜地蔵住職）
辻本 泰弘（府民商工部）
岡川 晃（JAGDA）
中谷 浩志（ICC）
柏 義和（建築）
城 清明（西洋環境開発）
井上 捷之（日図）

出席者（発言順）

小山 道子（KDK）
上戸 寧彦（亀井ガラス）
岩崎 瞳（西洋環境開発）

京へ下る

惨憺たる我が家



中村 吉田先生のプロフィールを簡単に紹介致します。吉田さんは京都の新町六角にお住まいです。洋画家でいらっしゃいまして、染色工芸史の研究をライフルにておられます。北觀音山の先生もされてたんですけども、京都へ戻られ、鉢町のお世話をされるお家で、お祭りの時には、家を開放されておられます。東京では武藏野美大の先生もされてたんですけども、京都へ戻られ、お家を完全復元されましてですね、町家というものを試みるんじゃなくて、創生しようということです、リファインされた。私もたびたびお伺いするんですけども、夏は非常に快適です。すごく爽やかな庭と、そしてその樹の匂い、それから町の中での限界生活というのが楽しめる生活を自ら実施されているということでございます。

吉田 今日のデザイン会議は、国際居住年が背景にあります。人間の生活というのは、住空間に非常に左右されます。そこで使う様々な工芸品、いわゆる器物ですね、そういうようなものも全部、その住空間の中における人間生活に付随して使われるわけですね。衣服もそうだと思います。で、ついで今日現在のほんまもん志向というのは、住空間から離れて、このモノだけが取り上げられる場合が多いと。それではいかんのじやないのかというのが、私が自分の家を復元するに至る一つの動機なんですね。モノだけが、人間生活から離れて、住空間から離れて、都市の町並みやなんかから離れて、モノだけが論じられるという

で、なんか物足りんものがある。もっと人間生活というのは、総合されたものだらうと。その全体のバランスの中で住空間も語られるべきだし、そこに使われる調度品も語られるべきだし、そこでの立居振る舞いに伴う様々なものも語られるべきなんです。そういうことに思い至ったのが、やはり柳宗悦で、彼は工芸の本来的な美しさは何かという命題で民芸ということを考えたなんですが、けれども、その一つの帰結が、私のその京町家の復元ということにつながってくるわけなんです。まさに私、武藏野美大で十年禄を食んでいた間に、七十年安保ということで大学が荒れまして、十二指腸潰瘍になりました。京都へ丸腰で帰つてくるんです。京都へ帰れば間口五間半で、一間半のいわゆるシャッターがはまつておつですね、あと四間はいわゆる三尺道路側に張り出して、軒のないモルタルづくりの鉄格子のはまつた、そういうアーフアサードに成り代わってしまった私の生まれた家がある。そういう惨憺たる家に帰つてきたわけなんですが、その家がどうしてそんなふうになつたのかというのも、結局僕の東京での放蕩が原因ですね。本来僕が親父を助けて仕事でもしてれば、もう少し手入れが出来たかもしません。で、この家の、自分を育ててくれたこの家の美しさをまず取り戻したいということで、まあ復元ということを思い立つんです。そのことに非常にタイミングリに条件をつくってくれたのは、もともと借りてた店子さんが非常に立派に商いをなさって、十五年に及ぶ賃貸契約を三年残しながら自分でめでたく大きなビルをお建てになつて、いわゆる賃

貸契約が自然に解消されたという、非常に恵まれた条件があった。金がのうて、金のかかる仕事をするためには、どうしたらいいかということで、

その頃には大型ゴミの定点収集というのがまだありました。今は通報によって大型ゴミを取りに来ますから、いいものを拾えなくなつたんですけどね。昭和四十八年から九年ですかね、まだ定点収

集というのがあつて、何月何日にはどこ学区に大型ゴミの収集があるからといふ情報が市民新聞やなんかに出てくるわけですね。で、最初は自転車に乗つて町を巡察する。すると、かつて自分が子供の頃見ておつた建具やタンスやそんなものがゴロゴロほかしてあるわけですわ。で、使えそなものを拾いかけて四年たつたでしょうか。その間に拾つたものだけじゃなくて、いわゆる古道具屋ていうのがあつて、そこへ、私の家は明治四十二年築というくらいですから、そんなに古い家ではないんですけど、その当時あつたいわゆる仕様書ですね、どの部屋はどういう建具が入つておつたかという仕様書と、私の記憶と、母親の記憶とでもつて、道具屋に触れ書を回しときましてね。

情報が入つたらそれをとにかく買った、安く(笑)。 説えれば三万円とか四万円とかする建具がタダ同然で入ってきた。そういう作業を四年間やりましたね。失なつた建具の約七五%をその四年間で集めたでしょうか。これだけあればなんとか出来るんだというところで大工を呼んで、やっと物を拾ったよ。失なつた建具の約七五%をその四年間で集めたよ。今度は人に物を注文するようなことになつた。で、その結果、今中村さんがおつしゃったように、どこをどう直したかわからんぐらい、

立派に家が復元、じやなくて創作できました。

これはなぜかと思うんですが、私の目もさることながら、先程これは清家さんも言ったように、

いわゆる京間という寸法ですね。これは随分なが

いことかかって、畳の長さが六尺三寸に定まつた

ということを先程おつしやつたんですけど、そういう京間という非常にフォーマルな、ゆるぎない建

物の寸法であったがゆえに、よそから戴いたものやら拾つてきたものやらが、ちゃんと寸法の中に収まつた。この不思議さがまた余計に私を喜ばし

たわけですが、そんなふうにして人様のたくさん

の力で、その工事を終えた私の喜びを、次はどう

いう形で表わそらかとした場合に、やはりこの家

を出来るだけ人様に開放することやということに気がついたんです。無名舎(吉田宅)が出来たのはだいたいこういう経緯です。

中村 今の吉田さんのお話で、まあ言わば、なぜ吉田さんが、そういう町家に住んでるか、住むに至つたかというのを非常にわかりやすくおつしやつていただきました。やっぱり今のお話の中で、

復元でなくて、創作やで、というふうにおつしやつた。これは恐ろしいお話をございまして、無名舎の、この吉田さんとこへ行つた方、この中にも

数人いらつしやると思うんですけども、古いしみ

ついた町家に入った感じが全くない。緊張感があつて美しい空間ですよね。これは今吉田さんおつ

しゃつたように、その人間の精神生活というものの証やと、こういうふうにおつしやいました。これはおそらく、単なる古さというのではない、一つのその人の目というものがあつて古い家が成立





するんじゃないかというふうに思いました。

ところで、皆さんのお話をまたこれから出していただきたいわけですけれども、一方では、やはりモダンな空間もええやないのということで、何がほんまもんやねんという、ひょっとして吉田さんのお話に拮抗するような反論も出てほしい、そういうふうにも思います。

京都が好き

ルールのある家

小山 私は、先生と同じようなコミュニケーションの場をもちたいということをかねがね思つてゐるんです。実はこのデザイン会議、一昨年、わが町をつくるという時に、「つかしん」の井上さんのお話をお聞きして、町といふものは、京都の町ももうダメだというお話が出た時に、その町に一点を投じると、それが線になつて、面になつて、その町はだんだんよくなつてくるっていう話に私は感動したんです。私は洋装店を三十年ほどてるんです。その家はもう普通の家でしたので、屋根がもう波うつてまして、もう改装に改装をしたのですけれども、もうどうにもならなくなつて、家を建て直したんです。その時に、一点を投じようと思いましてね。小さいスペースなんですけれども、皆さんはおしゃべりする場所がほしいというお話をよくお聞きします。だから、そういうサロン的な部分を一つこしらえました。少し落ち着きました。

上戸 今、レトロということで、非常に古くから

あるものをもう一度見直そうということなんですねけれども、レトロと言つて、上ついた調子のものと、本当に故きを温ねて新しきを知るという、本当のそういう精神的なものから出てきるものと、いろいろ氾濫しています。で、我々もガラスやつてまして、ガラスというのは大変古い歴史をもつてゐるもので、もともと原料は砂なんですが、非常にモダンな側面と、それから例えば京都の祇園の町家の非常に古いところにポンとガラスを置いても、僅かな光を通して非常に美しいものがキラキラとしてくるみたいな、そういう魅力があると思うんです。今、吉田先生がおっしゃつておられた、復元じゃなくて、創作だとことの中にはね、今言つている、故きを温ねて新しきを知るというか、非常に古いものが持つてゐる良さの中から、新しい世代にも通じていくような、そういうなんか美的なものを、つくられたのかなと。一度見せていただきたいと思ったわけなんです。

吉田 一回来て下さい。

中村 それじゃ、岩崎さん、言わば新しい町づくりのプロモーションをおやりなんですか?

岩崎 いや、今、吉田先生のお話を聞いてましてね、非常に独自的ないき方みたいなものを、大変逆に我々は羨ましいなと思うんです。家づくり一つにして、やはり企業の、まあ言わば販売とか予算とか、こういういろんな問題がございまして、一方では個人に戻ると、ここでおっしゃられた、復元でなく創作であるという意味のね、仕事がやりたいなというふうに思います。現実には、私、板ばさみになつてまして、非常に苦労しております。

お話を聞いておりまして、少しでもいい家づくり、街づくりをしていきたいなと思つています。

中村 女性の考える町づくりに参加されておられました森下さん、どうでござりますか。

森下 私、今でも町を見るのが好きで、やはり京都の町が好きでよく見にぶらぶらと行くんです。

ものすごく朽ち果てるようなね、人が住んでいるのか、いないのか、そんな家が並んでいるかと思うと、今流行りのプレハブですか、ああいう家がぽんぽん出来たりして、だんだん京都の町並みの美しさが崩れていくような気がして、外から見る者としてはすごく残念だなと思います。でも、

現実には、やっぱりね、新しいきれいなお家に住んだほうが住み心地もいいし、あるいはまた保存というんですか、それから費用の面とかいろんな面で、そういう新しい家のほうにいくんでしょうけども。私なんか見ると、もう少しメーカーさんがね、京都の風土に合った京都らしい良さをもつた家を考えてほしいなんなんて、主婦の単純な目で思いますね。

北島 私はこのほんまものとか、ほんものとか、にせものという言葉が大嫌いなんですね。元々は、本来ある姿つていうものを本当に一所懸命とらえようという意気込みをもつていれば、出来たものは非常にアーバンなものでも、それは素晴らしいといふうに私はとりたいんです。

それから、今、吉田先生がおっしゃった中で、一番私にとって面白いと思ったのは、京間というルールを持つていたために修復できたと。それはもう現代に通ずるシステムというもののがじやな

いかなど私は考えるんです。それから私は町の色を考えたいということで、ゴミ袋がすごく気になつたもんですから、そのゴミ袋が風土に合つてゐるかどうか、いろんな各国のゴミ袋を集めてみたんです。そうしますと、色としてはそれぞれ汚い色つてのはないと思うんですけども、なにげなく捨てるものだから、何でもいいやつて言えばそれまでですけども、ああいうものの色を決める時に、目立たなくていいもの、目立つたほうがいいものって、そういうふうな感じで色というものを見直していくたらいなって思います。

中村 ありがとうございました。大沢さん、今治の町も結構丹下さんなんかがたくさん新しいものを建てたりしてまして、でも、しかしながら伝統のある町ですけれども。京都にはいつもお出なんですか？常時、今治ですか？

大沢 常時、今治です。丹下先生の建物もあるんですけども、それが必ずしも環境にびつたりしているとは僕は思えないんです。ただ、有名な先生だからというふうな安易な行政サイドのリードでね、つくつてしまつたと。つまり京都というのは、とにかく町衆というか、住民の方々の美意識みたいなものがある。田舎だってあるはずなんですがれども、そういうものが結集できない。それから、吉田先生が町家を復元されて、これはもう復元じゃなくて、一つの思想としてね、ボリシ一としてね、はつきりして復元されたというふうにね。そういうことを、なんて言うのかな、話し合う、まあお家を開放され、そういうことを実現されている。京都はすぐにわかってくれる人が



たくさんいると思いますが、今治でどうやって、どういうコミュニティをつくっていくのかというの、そこが課題ですし、そのへんのところのヒントがあればと思います。

若林 もう十年ぐらいになりますが、自宅を改造したいと思いました。子供の頃から培ってきた古いものの良さに目が向き始めたんですね。それで着物を着ても、紬の着物を着ても、そこで立居振る舞いしてしても似合うような、でもお座敷はほしいし、それからリビングはほしいし、ダイニングもこういうふうにしたりして、今風の生活様式に合わせようとすると、非常に困難なんです。その中で考えついたのが、木とそれからレンガとで造り直すことですね。そしたら、着物を着たら、ちょうど今のレトロ感覚でいう大正時代に戻ってるような雰囲気で食事なんかしたりね。そうしますと、例えば、お皿一枚にしましても、お茶托一つにし

ても安んでもいいから木を使いたい、お椀もやつぱり、安ものでもいいから、塗の、木の上に塗つたお椀を使いたいっていうように、気持がなってくるんですね。

中村 加藤さん、お坊さんでいらっしゃいますが、やはり境内にお住まいなんですか？

加藤 ええ、まあ、寺の中に住んどるわけですが、今、町づくりという話が、街の景観とかの話が出ましたが、私の学区でね、お寺が十三か所あるんですね。京都の町から寺を抜いては考へられないんですね。例えば、今お話を聞きながら考えてたんですけれどもね。本当は昔お寺というのは、もう少し町の中に溶け込んでたんじゃない

か。今はそういうお寺が少なくなったと思うんですね。あるお寺へ行きましてね、私思つたんですけどね。今、犬矢来ちゅうんですけどね、京都のお寺にこう、前にあれがあつてね。で、人が入りにくい。門が閉めてある。ところが、そのお寺の中へ入りますとね、お地蔵さんとか観音さんとか、いろいろありますね。人がぐるっとここの回ったであろうという、人はこういうふうにお参りしもつて回ったであろうということがわかるんですね。今はそういうものがなくなつてしまつている。これも一つね、寺の在りようというのも、町というものの大きなポイントになるんじやないかなと思うんですけどもね。

中村 辻本さん、府庁でいろいろお仕事されるわけですけれども。今、お仕事の中からでも、行政ということではひつかかる話にはなるんでしょうね。

辻本 お話を聞いてまして、一つのポイントは古きよきものをもって、今の時代をどう構成していくかと、新しくこの時代に生きたものを、合ったものをつくっていくかということにあるんじやないかと思うんです。ただ、レトロブームとかが出てきてる背景は、非常にモノが溢れて、特に消費材はなんでもあるとその辺のことも問題だとは思つてます。

町内単位

ファサードは共通

中村 JAGDAの岡川さん、このメンバーの中ではビジュアルデザインということで、珍しいご

職業なんですけども、どうぞ。



岡川 今の子供がもし大きくなつた時にね、どんな感性を持てるかということを考えるとね、あまりに消費材に満たされすぎていて、そういう意味でちょっと恐いような気もするんです。だから、吉田先生が自宅を一般の方に公開されているのを子供なんかにも、時代を経た本物というものをどんどん見せてやりたいと思うんです。それと、ただ、今の子供はね、やっぱり束縛されすぎてね、交通とか、またそういう家の事情もありますけどもね。自分の小学校の学区内から出たらいかんといふような決まりがあるんですね。で、そんなんでもうないかなっていうような気はするんですね。子供の将来ということに関しましてはね。

中村 中谷さん、クラフトというお仕事の中からでも。

中谷 私も職業柄、日本の住まいに合つた工芸品というものは一体どういったものが適しているか、やっぱり職業柄、つい考えてしまうんです。日本間というのは、僕らでもよく見てみると、柱の構造なんかうまく出来ていて、非常にグラフィカルにつくられていて、実際そこに何を飾るかと思つた時に、飾る隙がないんですね。

僕は古い歴史知らないんですけども、茶人千利休は、庭と建物と中に飾るもの非常に総合的に考えていて、今でいうディレクターみたいな役割をしたと思います。たまたま、アメリカで京都の工芸品を紹介する巡回展があって、その時に向こうのディレクターが商品を見にきたわけです。うちの会社でもそこへ出品する時に、僕らアクセサ

リーミたいなものを作つて、これを紹介したいと思つたんですけど、実は向こうのディレクターといふのは、非常にもう日本の昔の、古来のそいつたものを持っていきたいと。その点はやはり僕らもショックだつたんですね。やっぱり日本に対するものの考え方を、むしろ逆に僕は教えられたなと思ってるんです。

それから、向こうの生活ではパーティ形式が非常に発達していて、人を招んで、そういう工芸品を見せるというんですね。日本の場合は、本物というと、なんか蔵に隠してしまつたりしてね、見せないようなところがやっぱりある。やっぱり一つの本物みたいなものを見せるもんとつながるんじゃないかなと思うんですけども。

柏 今、パーティの話が出たところなんですが、住宅を設計して中で、余裕といいますどもね。住宅を設計して中で、余裕といいますか、そのへんがないところで設計をやらされてしまう。設計する側の立場としても、なんか本気で取り組んでないなという、単に施主の要求を入れても自分好みで設計したいという気持ちが強くて、しかも自分の好みで設計したいという気持ちが強くて、本来その中がどういうふうに使われるかということ考えてやつているんかなという疑問を感じてるんですけどね。

城 私は建築とかまた町づくり、そういう会社に今おりますしね。ある意味では自然をどんどん壊して、なんかつくつていってるんですね。だから本来、本物をどんどん壊して、新しいなんか偽



物をね、本物ですよっていうふうに、京都を新しく桂坂のほうへ持つていこうなんて、とんでもない厚かましいことをやつてゐる会社なんですね(笑)。そう考えるとね、実は本物を、私たち自分のやつてるものを本物だと、こう押しつけるわけですよね。だから、本物って何だろうて考る時、ああ、私が本物ですよという、そういうなんか生活といいますか日々を送つてゐるだけにね、大変辛いなど、この席にいるのは。なんかそんな感じですね。それにやつぱり京都の町でね、先生がもともとから創造という言葉を使って復元していくとね。そういった中でもやつぱり、私ももう一遍見直さないかん、こういう職業の中でもなんか見直して、洋風のモジュールとかいうのが、建てる側、造る側、もう私たちの側からばっかり判断してゐる。しかし実際に町づくりをしたり、家づくりをしていつて、今度住まれていつて何十年、百年たつた時に、その時間を経過させていく過程でね、やつぱり本間づくりでよその家と入れ替えしても使えるとか、そういった本来あるべき姿をどんどん壊してしまつて、自分のたちが、情けないです。そういう意味で、もう少しほんものというものを考え直せば、最も考えないとんかつたことを忘れてたんじやないかなという感じはしますね。

吉田 一番やつぱり強調したいのはね、京間という寸法ね。これをなんとか将来に生かしていきたい。それから向こう三軒両隣は言うに及ばず、少なくとも町内単位でのコミュニティですね。そこでは、でこぼこ恥ずかしいことをしたくないという、こういうやつぱり他者への配慮。この二つが

京都の町並みをつくってきたんです。で、同じ町内を構成する構成員の中には、貧富の差は様々あります。これはもう様々ある。そんなものは横一列に並んだためしは一度もないわけですが、京間という寸法と他者への配慮。少なくとも建物のファサードは公共のものであるという意識。この三つが町並みを支えてきましたですね。その中における人間の生活とそれに奉仕する調度品というのは、当然そこに一つのつながりがあつたという、そこを強調しておきたいですね。

北島 もう本当に良いものを見る目を持つてゐる人は、例え外国人でもそこの国の人間に良いものを見つける目をちゃんと持つてられるんでね。やつぱり忠実に日本人は日本人のものを本当にね、育てなければ、それが非常にインターナショナルなものになるというふうに、私はね、思つてゐる。ですから、先程の、お子さんにもね、これは子供だから、こんなプラスチックの容器でもいいとか、こういうことじやなくてね。子供にも壊れるものは、もう本当に大切にしたほうがいいから、どんどん本物の器を使わせたいですね。

中村 なるほどね。もうほん時間がいっぱいになつてしましました。皆さん、もつと心残りがいっぱいあるんじやないかと心配しておるんですけども、お互に何か素晴らしい響きがあつたのではなかというふうに思ひます。ありがとうございます。

ふだん着のおしゃれ、知恵のおしゃれ

トーキリーダー…野間光輪子（主婦建築家）
担当 …奈良 磐雄（KDA）

出席者（発言順）

梅沢 弘子（服飾デザイン）	辻 美菜子（KDK）	山本 次枝（KDK）	内藤 郁子（京都府建築士会）	栗山 裕子（京都府建築士会）	宮井 幸子（主婦）	今西 慧（KDA）	岡本 透（友禅彫刻）	西田 永子（服飾デザイン）	福島八千代（マネキンメイクディスプレー）
---------------	------------	------------	----------------	----------------	-----------	-----------	------------	---------------	----------------------



着飾る

住みこなす

奈良 今日は、皆様方のご専門の立場から、総タイトルの国際居住年をベースとしまして、衣食住を検討しようということなんですかけれども、それだけに留まらずに、皆様の様々な生活上のこだわりについてもお話し頂けたら、と思います。

野間 〈素敵な女は着飾つたりしない、着こなす知恵と工夫にこだわって、美しく生きる新風俗論〉という課題で考えてほしいと言われまして、なんと難しい課題だとびっくりしたような次第なんですが、私なりの解釈を提示させて頂き、後で皆さんのお意見をお聞かせ願いたいと思います。

身は反対に、衣食住のうち、衣食に関しては、うんと着飾つていいし、うんと気取つていいんじゃないか、と思うんです。

ただ、住に関してはちょっと違うんじゃないかなという気がします。「住」っていうのはやはり、人が起きて、一日生活して、その空間の中でずっと居るということや、また衣食と異なり非常に高価なもので、その環境を変えるというと、なかなかできないこともあって、先ほどの課題を「住みこなす知恵と工夫にこだわって、美しく生きる」というふうに読み変えますと、それは当を得ているんじゃないかな、って思うんですけど、いかがでしょうか。

梅沢 「着飾る」っていうのは、ふだん着もよそ行きも、現在数多く出回る既成品の中から、自分

なりの個性を出すものを選んで着るということ、そして、こういう「おしゃれ」がこれからは望まれるんだと、私は思い、実際お客様にもそうお勧めしております。

辻 私もアパレルの方を永年やっておりまして、量より質、個性的に、という方向に進んできていると思います。私の場合は、「先取」を是非しなければならない立場で、天気予報のように予測が当たるか当たらないか、気候にも関係してくるし、色々な社会背景もありまして、経済状態など、全てのものを把握して、それによって作りを考えていかねばならないです。このようにトータルファッショントークを考えた場合、先ほどお話をあつた、衣食と住の間には若干間隙があるというご意見には、多少疑問を持つんですが。

山本 私は現在はオーダーの方をやっておりますが、息子がアパレルの売場の方をやってて、そつちの方も引き続きやっています。オーダーでは、お召しになる方と場所に関して徹底したこだわりをもって、洋服を作ることができるので対し、既成服の場合は作って出すその場で、あるいはどのくらいの背丈からというような感覚、着ていく場面の展開の広がりを無限に見せるというような、また変わった考えがあります。

住つていうのは、ちょうど私どもが着飾つたり、非常にクリエイティブにして美しくなるというこのバックになりますので、とても興味がござります。また、先ほどの野間さんのお話のように、洋服のようにはつと脱ぎ変えるというわけにはいかず、せいぜい家具や内装を少々いじったりする

くらいで、家を建ててしまつた段階で、「ここがこうだと…」ってことは必ずあります。そういう面で非常に難しいと思いますが。その辺に関して、人間の果てしない欲望がどういうふうに住では表現されるのかお聞きしたいと思つております。

内藤 色んな場というものがいると思うんですが、私の場合は、その場にあつたものを着るよう心がけています。

栗山 私のように建築の設計をやつておりますものにとっては、ファッションの世界というのは毎日の生活からはかけ離れているわけですが、女性である以上はおしゃれもしたい、楽しみたいということは十分ございます。ただ、ブティックの設計とかの仕事が来たときに、自分の無知に嫌気が差したりすることがあります。が、最近漠然と、ファッショショーンなどで見る色使いとか、空気の持つていき方などが、何年か後には建築の方に影響が出てくると思つています。それ故、ファッション関係の雑誌等にも眼を通しておくことは、自分の仕事に関してもしておかねばならないことだと思っております。

特に、京都という場所で仕事をしております関係で、ファッショーン性と実用面とのギャップに、例えば京都の町屋の良さと悪さ、その中に私たちが現在着ている衣服で入ったときの違和感と調和とかに、いつも悩まされているんです。個人的には、イタリアの家具とかの持つシャープさと京都の茶室の簡素な美しさとは共通性を持つように思うのですが、それを自分の中でどの辺りで結び付けていけば良いのかが分かつてないような気がし

てるんです。一時的な華やかさと日常生活の実用面、ファッショーンと日常性とは常に隣合わせになつてゐるという気がして、それを自分なりにどんなふうに消化していくべきか、その接点みたいなものがあればいいな、と思つております。

宮井 私は、生き方というのが、その人の自己表現だと思うんですね。色々の表現を衣食住で表すことは可能でしようけど、主婦にとって一番簡単に自分を表現できるものが、私にとっては衣なんですね。たくさんの商品の中から自分を表す眼を持てれば、と思います。この場合問題となるのは、流行の早さと自分の財布で、文化というものは今

の有様で、その中で自分を表すときは今の時点での自分を捉えていきたいと思います。流行も少しは加味したいと思いますが、あまりにも早いので、それに自分の内面が付いていけないという状況があります。そんな中で、どんなふうにして淘汰して自分を表していくかが、私の一つの課題なんですね。

今西 今日のテーマは女性のおしゃれだと思いますが、実は僕は男のおしゃれというのも十分あると思うんです。

最近の若い世代は、男女を問わずセンスが非常に優れておりまして、男のおしゃれを再確認して頂きたいと思います。住に関しましては、僕はスペース的には全く絶望的でして、住を捨てて、衣食だけがこれからは一人立ちするだらうという気がします。ですから、「衣食住」ではなくて、「衣食遊」つまり衣食で遊ぶというかたちになるだろうと思ひます。



オーダー

眼で確かめる

奈良 京都は住という部分では古くなつてきていたことがあることもあるし、非常に一般的な見方かも知れませんが、服飾に関してはブランドものとかに金をかけている。派手さだけではなくて素晴らしい服が出回っている、それを身に着けている状況があります。しかるに住の方がそれに付いていいつていい現状があります。その辺については、今までには衣と住がミックスしたかたちであった。

京都は着物が大変よく似合う町だと全国でも認知されてきたわけですが、現在では着物が非常に減ってきている。また、ハレの場での着物を考えますと、屋外では「いいな」と思うんですが、家の中での生活を推し量ると、あまりにもギャップがあり過ぎる。ヨーロッパの映画を見ると、二十四時間素晴らしい衣と住のマッチが見られますが、日本では内と外、衣と住のギャップはやはり極端に大きいと思うんですね。

野間 服飾の世界の人が考へることと建築のものが考へることとの間には、すごく似通つたところがあると思います。建築の方でも形態への追求が最近顕著に見受けられるんですが、これはひつきょう奇抜さの追求になり、危険性をはらんでいます。一方服飾はといえば、素人眼から見ますと、ブティックに並ぶ商品は千変万化で、色んな方向を追い過ぎている。衣にしろ住にしろ、形態ばかりを追うことは危険なことだと思います。「本物」ということに関しては、例えばフランス料理

を食べに行き、あれと同じものを家で作ろうとしても無理がある、どこか到達できないところがあると思うんです。それと同様に、ハウスメーカーがカタログなどで、「これこれこういうものがありますよ」的にいい面ばかりを見せる、消費者の方もそれについて乗せられてしまいがちです。先ほど山本さんが、オーダーは顧客の全条件を考慮することができますよ」とおっしゃいましたが、建築の方でもこれは考えていい。虚飾を追つていくと最終的にどこに落ち着くのか、服飾関係の方はどうお考えか、お聞かせ願いたいと思います。

山本 私は原点に戻ることがいつも重要だと思うんです。原点とはやはりシンプルということですが、洋服を作るときこれが非常に難しいんですね。美しいのは、スカート丈と上着の長さのバランスがぴたつと決まったときですね。建築に関しても、贅沢なものより生きるに楽なもの、シンプルで調和とバランスの取れたものがいいと思います。建築にもやはり、オーダー型と既成服型があるんじゃないですか、「建売り」とか…、作るときから違ひがあるんじゃないですか。

栗山 ハウスマーカーなんかが作つてお家だと出来上りを見て買える、自分の眼で確認してから納得できるってことがある。図面を見せていくと詳しく説明しても、眼で確かめられないという弱味がありますね。

山本 それは服飾でも同じで、価値観が眼で確かめられると早いんですよ。

栗山 今日もここに来る途中、勧業会館で某社の建材フェアがあつたんですが、一つのメーカー

言う考え方でやつていいのと違いますか。

だけの製品なのに、その量たるやるものすごいんですね。その一つ一つを取ってみればとても綺麗で、便利で、色も明るくて「文化的」な製品が山盛りあるんです。ハウスメーカーが作る家にはそのようなものが、例えばシステムキッチンやクローゼットなどがいっぱい付いています。ただ、それらを全部入れれば、快適な空間が出来上がるかといふと、そうはならないところが面白いところで…。

山本 何か、飛驒の古い家にいてね、ほっとしたり感激したりするところもありますし。
野間 ひなびた家というのとはちょっと違うんですけど、先日着物の展示会を見まして、灰桜の色、淡ねずとか、微妙な色が素晴らしいと綺麗に思えました。そこで、今建築している家にこういう色の着物を着てきて、果してその色が「見えるかしら」と思ったんです。壁、床、天井、全てが新しい素材で、真っ白というのがすごく目だつ色なんですね。色々な色を使ってますよね。アメリカの保険会社のロビーなんかでは五色の大理石を使つてますが、一体どんな服を着ればいいのかと思つてしまいます。大正時代に建つた家というのは、三畳くらいの玄関があつて、そこにお母さんが出てこられるよと、暗い中にぼつと座られて、とても綺麗だった。

畠の色、柱の色、壁の色、障子の色、襖の色、それによつて着物で出てこられた姿というのが眼に浮かぶんですね。今の建築っていうのは洋服を潰してしまつているじゃないか、という気がするんです。岡本 染物の場合は色々な条件に合わなければいけない。主はやはり人間である。私は、それを楽しめる余地があると思います。建築もそ

ふだん着

捨てる大胆

栗山 建築家が建築を作るのではなくて、住空間ということに限定すれば、そこに住む方がその空間を創つていくんですね。私たちは出しやばつては駄目なんですね。ただ、私たちが建てた家の空間は、ファッショング、例えば身体のシェイプアップやそれに付随する社会環境など、全部を含めてファッショングであるように、自分が外に出でどのように見えるかという眼で見て欲しいな、と思いますね。空間は後の使い方次第で決つてくるんで、それに合つた使い方をして欲しいですね。

西田 ふだん着のおしゃれというのは、とりわけ求めものではなくて、いいものを作つておくと、しわだらけになつたりしないんですね。住に金を掛ける一方で、衣には金を掛けないという人も多くいますが、ふだん着を晴れ着と分けて買い求めるとすれば、かえつて高くつくんですね。いいものを求めておいて、それを逆に「ふだん着」とする、という考え方があつてもいいんじゃないか、と私は思うんですけど…。

山本 ふだん着の概念の違いですよね。ふだん着といつても、ちょっと買物にいく場合のふだん着と、家庭内の室内着というのは別ですよね。

宮井 外に出て綺麗という洋服には、家事をする機能性が一般にありませんね。私は家庭で働くための「ふだん着」は、それだけをピックアップして考へるべきだと思います。いくら材質が良くて





も、あるいは流行に遅れたからといって、こちらに適用できるものじゃないと思います。

梅沢 オーダーで洋服を作る場合は必ずしもそうは言えないと思います。着易くていいものを大事に着るようにと作りますから、晴れ着としてだけじゃなく、そういう着方も十分できると思います。素材さえいいものを選べば、若干の例外はあるでしょうが、外出着としてもふだん着としても十分着て頂けると思いますが…。

野間 同じ服を着ても、すごく綺麗に見える人と不細工に見える人がいますが、どの辺りが違うんでしょうか。

山本 同じ服なんですからね、違うのはそれを着る人、ただそれだけのことです。だから、その人は別の服を選ばなければならない。

野間 それはそうですけど、例えばすごくブレーンなセーターを着ても、とてもおしゃれっぽく見える人がいるでしょう？

梅沢 身体ですね。マテリアルは一緒ですから…。

山本 着こなしというか、洋服も着慣れてくると、些細なことで違つてくるものですし…。天性生まれたスタイルもありますが、やはり自分を打ち出すものを着ることですね。

梅沢 それと、素材が違うと同じセーターでも顔が全然変わつて見えますよ。いいものを少なく買って、家の中にものをたくさん置くことをしないようにすることが大切だと思いますよ。

野間 以前施主さんで、すごく賢い奥さんがいらしゃつたんです。マンション住まいでの収納が限られているので、子供の服はセーターなら六枚、

スカートなら四枚、と決めておく。デパートなどで素敵な洋服を見つけるとまず、どれを捨てようかと考えられるんです。そこで、あの六枚の中の一枚を捨てるに値するかと考えて、値すると思つたら買う、って言うんです。買つたら、前の一枚を教会などに持つていって処分して、六枚以上は収納しない、下着だってそうなんです。ところで今、建築界では収納を増やすことが大流行で、到るところに収納スペースを作ろうとするんですが、これは可笑しい、収納が有り過ぎるとかえつてグチャグチャになる。

今西 この頃の若い人ってのは、兄貴の服を弟が着るつことはありませんので、捨てるにに対して大胆になれると思いますね。それと、京都は高齢化都市としてはナンバーワンですから、高齢化した社会をどう勇気づけてくれるか、ということがあると思うんですね。女人人は老いてもおしゃれっけがある。家を建てる場合でも女人人が決めるつことが多いんじゃないですか。

内藤 ご家庭によつて違うと思いますね。女人人が強いところもあれば…。

今西 八割がたじやないですか。今日ここに集まつてこられた方にさつき聞いたら、一番怖いのはうちの嫁さんや、って言いますからね。それには、「うるさい」ってことも含まれているんですけどね。嫁さんの言う通りしておけば家庭は平和だということがあって。男はあまり住まいの作り方にこだわっていないということもありますよ。

山本 住まいは女性が一番長くいますからね。男性は出していく機会が多いし。

ステテコ

最後の砦



栗山 だいたい男の方、着るものにしろ、住むことにしろ、そんなに関心がないようですね。

今西 いや、ありますよ。特に着ることに関してはすごくあるんじゃないですか。

山本 この頃の若い人はね。自分の好みの服に合わせて家の中もそうしておるしね。私はとてもそこまでする余裕はないけど。

今西 捨てることに大胆ですからね。年輩の方は捨てるに捨てられないってことがあるでしょ?

山本 本を見てたら、整理することっていうのは捨てるこことだと書いてありますね。

辻 部屋の中で男の人が綺麗に見えるような、おしゃれできるような服を作れば、売れると思うんですが、ね。

今西 ジーンズをはいている人が比較的多くなつたんじゃないですか。

辻 それと今、シルバー産業が盛んだと言われていますが、実際には行なわれていませんよね。そこに注目して作りをすれば、伸びるんじゃないかもと思いますね。日本はリッチになつたと言われていますけれど、住宅一つとっても、外見はいいんですけど、中に入るとまだ経済状態は良くない。みんな厳しい生活をしておりますので、高感度で高機能であるけれども、価格はやはり水準と言ふか、売れ筋っていうものがあるんですよ。品質向上をすることは必要だけれども、値段が高くていいってものじゃないと思うんです。

ところで、「ふだん着のおしゃれ」って言つても、果して皆さんふだん着を作つてられるか、という疑問を私は持つてゐるんです。また、若い人は割とくずれた洋服を着ても様になるんですが、中年以上になると「爺むさく」なると思うんですね。山本 男の人は背広を着てると「まし」なんですが、ラフなものは着慣れてないからか、似合う人がいませんね。

辻 私、いつもテレビ見てて思うんですが、森本さんと久米宏とを比較すると、森本さんはいつもネクタイをきちんと締めてカチカチの服装をしてるのに、久米さんはおしゃれなセーターを着てるんですね。あのセーターがデパートなんかへ行きますと、恐ろしく高いものだということが分かることです。あのようなものをもう少し安く作つて、男性に着せて上げたいと思ひます。

野間 今、住まいだの住み方だのがファッショニになっています。高級住宅街で広い居間のある家で、みんなでケーキを焼くといった夢みたいなものがあるんですが、その結果、今まで家にいたお母さんがローランに追われてパートに出る、夢にまで見たテーブルで何を食べるかというと、子供たち二人で砂を噛むような食事をしている、あるいは時間がないからといって、デパートで出来合いのものを買って来て、そのまま並べる、ものすごく空しい感じがするんですね。何が欲しくてそこへ行ったのか、家族崩壊につながるんじゃないかという気がするんですね。

山本 今は衣食住の中で一番、住が、土地も高いし、大きいですよね、日本は、京阪なんかに乗つ

て沿線を見ても、随分建て込んでいるなって思うことがありますものね。

内藤 日本の住宅が貧しいのは住意識が低いんですね。生活意識を変えないと、いい家を建てても一ヶ月も経てば同じ状態になってしまふんです。決して西欧化がいいと言うんじゃないんですけども、ね。

宮井 その点に関しては、一にも二にも土地政策の遅れが原因だと思います。眞面目に一生働いても家が持てないという現実を変えていかない限り、意識の変革を求めるのは酷だと思います。

今西 持てない、というところから意識を変えないといけないんじゃないでしょうか。

宮井 それに、今の洋風建材は、日本人の眼で、日本人の手で開発されたものが少ないんじゃないでしょうか。もしも、歐米からカーテンや壁紙が入って来たとしたら、そのため余計に日本の家屋は狭くなっているんじゃないかなって思うんです。

今西 昔ふうに住を考えるんじゃなくて、絶対的に非常に難しい条件の中で、新しく住みこなすための知恵ってのが、また出てくるでしょうね。僕らのとまた違った住宅事情を背負った若い人たちには、そこからまた新しい住まい方を見つけるんじゃないかな、と思つたんですよ。例えば子供を作らない、とかね。

山本 家の中にここは何でも押し込められるという部屋があるといいですね。

宮井 マンションはそれが困りますね。

奈良 時間も押し迫つてきましたので、まだおっしゃりたいことがあれば、一言。



今西 今日お話を伺つて、建築の方が生き方の問題で一番進んでらっしゃるな、と思いました。

ファッショニズムのものも、実は建築の方がリードされているような気がしました。

岡本 例えば「ステテコ」ですが、今やステテコにとり家というのは最後の砦だと思うんです。昔

は町内を歩くにもステテコで良かった。ところが今はファッショニズム業界に踊らされてか、これができにくくなっています。会社で疲れて、家でもくつろげないとしたら、これはもうたまりません。要は意識の問題で、私は家では思いきりくつろぎたいと思います。

辻 調和やハーモニーという点で、日本は「ごちや混ぜ」ですが、外国は非常に統一されている、これからは建築家もファッショニズム関係の人もみんなでトータルに考えていくべきかと思います。

野間 結局は、衣にしろ個人の感性を高めていくことが重要だと思います。ここにお集まりの方は身の周りのおしゃれを職業的に意識されていますが、それを意識していない人たちにどのように理解して頂くか、それがこれから課題だという気がしました。

奈良 どうもありがとうございました。

システム・キッチン文化は偽物である

トーキリーダー 山口昌伴（G K道具学研究所長）
担当 みね ゆうこ（JAGDA）

出席者（発言順）
高貴 正子（ICC）

橋本 繁美（JAGDA）
柴田富佐子（a.m.グループ）
広中和歌子（政治家）
河村 司郎（朝日新聞）
寺田 敏紀（京都市住宅局）
杉本 樹（建築）
久谷 政樹（KDA）
南 佐代子（主婦）
小川 幸雄（ICC）
大野 好之（JAGDA）
能登チヅコ（第一紙工）

美しいウソ

システム・キッチン文化

みね ただいまより、山口昌伴先生を本日のトクリーダーとして東京よりお迎え致しまして、始めさせていただきたいと思います。

私は、KDA・JAGDAに所属しておりますみねと申します。今日は皆さんと楽しいトーク会にしたいと思います。よろしくお願ひ致します。

山口 私、山口昌伴と言います。もともと建築の設計をしておりまして、どうも生活の中身をよく知らないで設計しているということで非常に自己批判を致しまして、生活の研究に入ろうと思った。それで、一年でしたか、GK道具学研究所というのをつくりました。それまず、台所を見直そうということで、システム・キッチンとは何だらうということですね。何かと話題になりながら、かなり伸びてきているという世界なんですね。それで、さつきの清家先生のお話ですと、いろんなレベルでの居住性があると。その中で、台所は昔は暗くて、ジメジメしてて、居住性が悪かったと。そして明るい所へ出てきて、果たして台所は、さつきの言葉を引きますと「元気」になったのか、逞しいのかというあたりが、私の疑問だと申し上げておきます。

それから、システム・キッチン、文化、ウソというのを、これをつなげて題になつてゐるんで、まあ、文化というのは、だいたいウソのかたまりであるということだろうと思うんですけどね。本物じゃないものを作つていくのが文化だというふうにみれば、なかなかシステム・キッチンが文化であり、それが虚偽性があると言つてゐるんで、認識としては正しいということですかね。

で、一つには、システムのウソというのですが、システム・キッチンという言葉は英語にはないと、systematized kitchen 例えば、ある程度表現できるんじゃないかなーとはあるんです。そうすると、なぜ、その和製外来語みたいなもので、こんなに世の中が動くんだろうかというあたりを、ひとつ思われるところをお話していただければいいと思います。それから二番目、収納のウソと書いてありますが、これは難しいですね。いろんなものを片づけなくちゃならないというあたりの行動で、システム・キッチンって、実はあれの正体は何かというと、まあ、ごくりといに言うと、ワクトップと言いますがね、トップのところに継目がないと。なんのことはない、それだけということがあります。もう一つは、縦目のない板があって、その下に引き出しがいっぱいあると。要するに、あれはタンスなんだ。タンスの上にね、へつこんでて、流しがついていると。そうすると、システム・キッチンと言しながら、収納具を売つてるというようなウソがある。それから、美・味というのは、おいしいという、一緒にするとおいしいのですが、これはもう言われ続けてる、もう世間に公開のウソというか、システム・キッチンは美しいと。だけどおいしいものが出てくる心配はないと言うか、美と味がきて、どっちを取るかと。実はキッチンを揃えるぐらいだから、おいしくしようと思うのか、それとも美しくあればい



いのか、そのへんのなんか美しいウソみたいなものがあるということがあります。

それから、最後。もっともこれは難しいんですねが、主婦、ステイタスのウソということもあるんでしょうか。私は、ちょっと座回しがあまりうまくないのですね、皆さん、ご迷惑かかるかもしれませんけども、忌憚のないところを、今までのヒントでご意見いただければと思います。

家庭用のウソ

営業用を持ち込む



高貴 まずガスレンジ。それが今、液化ガスになりますね。前のガスよりも非常に熱効率が悪い。悪いということは、非常に高い熱で処理をする料理は不完全。ですから、これはおかしいんではないかということから、私の家では営業用のガスレンジを入れました。そうすると、新しく入れ替えたからか、そのへんのところはよく分かりませんが、非常に効率がよくて、ガス代が高くつくかなと思つたら、逆なの。それから今度は冷蔵庫なんですが、家庭用の一一番大きなを入れたんですが、やはりどうも効率が悪い。ガスレンジで味をしめまして、じゃあ、冷蔵庫も営業用にしてしまおうということで、業者を呼びましたら、今いろんなタイプがあるんですね。ちょっと規制された寸法になつてしまつたんです、うちの台所にはまるものがありましたので、それを入れたら、表裏ともステンレスで非常にお掃除も楽だし、非常に効率がいい。電気代のデータはとつてないんですが、ガスレンジと同じような合理性が

あるんですね。

橋本 僕らの小さい時つていうのは、テレビが出来てきて、やはり子供心に、「ああー、アメリカはええな」という、なんか憧れはアメリカにあったような感じがするんですね。そういうようなものがどんどんどんどん入ってきて、かなり洋風化がどこの家でも進み、家の中の畳がカーペットに変わりやっていると思うんですね。そのシステム・キッチン自体が日本で馴染まないと、そういうものが計算されていない。先程、食器の話も出ましたよね。要するに使いこなせてないと言うか、ハンドリングという言葉が三年か四年ほど前に出てましたけど、それがこれからの問題だと思いますね。それが出てきて初めて、ウソが固まつて、身近な文化みたいになるん違うかなと、僕個人感じるんですけれどもね。

柴田 人間本位という根本が抜けて、コスト的とか、それからある与えられた空間の中に収めるために、できるだけの道具をそこに、いかに並べ換えるかというところが間違つてきた原因じゃないかな。そこがウソというふうに捉えたほうがいいんじゃないかなと思うんですけどね。

山口 台所のあり方自体が、やはりあまりはつきり議論されないで変わってきたというところがありますね。というのは、台所改善というので暗くて、ジメジメした台所はダメ、乾いて明るいのがいいと。だけど食べ物にとつて乾いてということ



は非常に困ることなんですね。それから明るいよりは暗いほうが食べ物自身にとつてはいいわけです。だから、例えば台所は寒かったですよね。北側にあって寒い。寒いということも、やはり食べ物にとつてはいいわけですよね。暖かいところでおいしい漬物が出来るかつていうと、これはやっぱり出来ないわけですね。そうすると、オープンキッチンとかクローゼキッチンということが随分議論されてるけど、メーカーのほうでは、もうオープンキッチンに決まつとるんだと。ハレの場であるのだというふうに規定していくっていうところも問題だと思います。

台所つていうのは、家のメインなところから後の家にちょっと居候してたことがあるんですけど、所にあります。それで、大きな、それこそ営業用の冷蔵庫みたいのがあって、本当に女中さんがやる所であった。それほどお金持ちでない家は主婦がやつてたんだと思うんですけども、そのうちにだんだん主婦が、かなり豊かな家庭の、中産階級の女性が大学教育とかいろんな教育を受けながら家庭に入る。家庭こそ女性の創造性を發揮する場所だといったような時代が五〇年代、六〇年代になるんですけれども、そういう女性はまず、いわゆる我々が今イメージするところのシステム・キッチンでしたね。

設計のウソ

“当たり前”を考える

広中 私は、永いことアメリカに住んでたんですけど、アメリカの台所というものいろいろな変遷を通つてきたというような気がするんです。もちろんコロニアル時代、植民地時代の台所なんかを見ますと、やっぱり日本と同じように暖炉があるて、床は土間ですし、京都の台所と同じで、少々いろんな油や水が落ちても、本当に掃除がしやすい。そして、一つのオーブンが煙突であり、そこでパンを焼き、お肉も焼き、同時に暖房にもなっていたということなんですね。

河村 私、新聞記者という仕事の関係で、去年の九月まで裁判を担当しまして、今京都でシステム・キッチンという登録商標をめぐりまして、京都の北区のメーカーとナショナルが係争中なんですが。そこで、僕はその時に思ったんですが、これは所詮メーカーの押し売りと言いますかね、

その後、古い家に移りまして、それを改造して、それで先程のシステム・キッチンと言うか、ユニットを買ってきて改造したというタイプなんですが、六〇年代までの台所っていうのはどういうのかというと、ホウロウ引きかなんかの、やっぱり日本で言う流し台と同じものを置いていたわけです。先程明るさということをおっしゃいましたけれども、例えばシカゴの、私はかなり大金持の

か。僕はこれは完全に資本主義社会の生んだ偽物じゃないかと思います。

山口 そのキッチンメーカーに家電系と家具系とがありまして、家電系のほうはもう見え見えにね、商品パックとして売つてしまえばいいという感じで、それは施工のほうでも問題になつてくるわけです。それで、日本ではシステム・キッチンをユニットキッチンとして売つたり買つたりしてるといふところでは、メーカーのほうが途中で諦めてしまつてあるところもあるんですね。

システム・キッチンの定義というのは、もし調理のシステムに合わせて組み立てられるんだとか、そうされているんだとか、そうされているんだといえれば立派なことだけど、そうじゃないんですね。むしろ部品と流通のシステムのことをメーカーは言つてゐるわけですね。それを取り違えて、調理システムがうまく出来てゐるような気になつてしまふというあたりがあるんじゃないかな。

寺田 今のお話とも関連あるんですけれども、かつての台所は合理的であつたというふうな話がありましたね。合理がどこかで合理的でないといふふうに、まるごと合理的でないと、変わつてしまつたという節がある。その一つは多分エネルギー革命で、薪を燃やさなくて調理できる。都市の中で薪をくべて、ものを煮炊きしなくちゃいけない昔の台所は、非常に合理的に出来ていたんです。

柴田 今一番欠けているのは、ゴミの処理なんですね、システム・キッチンの中で一番遅れているのが。さつきおつしやったように、台所がジメジメしているほうがいいとはおつしやらないけど、

そういうのも一理必要だと。でもそれはエネルギーでどんどん解決できるもんとして、今の日本ではゴミだけがもう絶対に処理できないようなキッチンなんですね。いくらきれいな台所であつても、生ゴミはそこらへんのバケツに入れて、集合住宅であれば、どこまで運ばなくちゃならない。私はシステム・キッチンの一番の欠点はゴミ処理ができないことだと思つています。

山口 結局、ゴミ処理の仕方というのは、宇宙まで行ける時代ですから、できるはずなんですね。で、システム・キッチンのウソというのは、ゴミのこととをネグレクトできるようなね、そうして売つてあるような、そこがウソだと思うんです。広中 ただね、まず下水ということをね、考えなきやいけないんですけど、アメリカのシステム、どこの台所でも、最近新しいアパートですと、デイスボーザーというのがついてるわけです。そして流すわけですね。だけど、それでそのまま川に入れば川の汚染がひどい。だから恐らく、あれどうなつてるのか、私ちょっと調べる必要があると思うんですけど、特に郊外の家なんていふのは、自家処理するんですね。地面に染み込ませるといふような感じで。だから、下水と一体になつたディスボーザーなんですけど、日本ではディスボーザーをつけるのは恐らく禁止でしょうね。

山口 ゴミで面白いと僕が思つてますのはね、ダストシュートというのね。これは大正時代からの家事教科書を調べたんですが、どれにもそれをつければ全て解決つて書いてあるんですね。

例えはこんな例があるんです。パリのちょっと



郊外のマンション、アパートですね。そこでは、流しのところにとても大きなタンクがついてましてね。そこに太い管がついてて、その団地の中央までつながっている。そのタンクにゴミと一緒に水が溜まりますね。一杯になつたら、ドーンと抜くんですね。そうすると、こんな太い管ですから、なんでもドオーといっちやうわけです。それで、センターでゴミと水を振り分けて、ゴミはまだどうかで処理する。それが一九三七、八年ちょうど五十年前の施設でそれがあつてですね、しかも今も機能している。そうすると、もう生ゴミの心配はないですね。いろんな高級な、エアで抜くとかね、開発をしてる割には、簡単なことをやってないという感じがしましてね。そのへんもう設計のウソという世界だというとだんだん自分が危くなつてくる(笑)。

合理性のウソ

共稼ぎの無駄

柴田　だから、さつき清家先生がおっしゃったのはすごくいいと思うんですよ。千年の歴史があるところのいいところをもう一辺掘り出して、どこがいいのかというのと、新しい、さつきみたいに、子供を見ながら台所ができるかつていうのは、一つの生活のプラスの面と言うか、前向きの面もあると思うんですね。決してシステム・キッチンが全部悪いとは思つてないので、その前向きの部分、それから新しい生活に適合していくキッチンといふのはどんどんしなくちゃいけないんです。

杉本　僕は住宅設計をしてるんですけど、台所、

実際立ちませんし、今の主婦の方はどういう台所の空間が欲しいのか、というのが僕らにはよくわからないんですけどね。実際設計をするときには直接聞くんです、どんなにするんですかと。僕なんかは、どつちか言つたら、昔からの京都の、天井が高くて、明りとりがあつて、そういうなんのほうがいいんじゃないですかと言うんですけどね。京都の町家なんかには、そういうなんが一番合うている、ウナギの寝床ですからね。

マンションの場合、一戸建と違つて不特定多数を対象としている、そしてまた狭い。そういう場合にシステム・キッチンの在り方というのは、実際問題としてどうしたらしいか。ただ単にきれいで、仰山詰まつたらしいんやないか。まあ、それは違うと思うんですけどね。

柴田　それは確かに言えますね。私も団地に入つて、いわゆるダイニングキッチンとかつていうのにも入つたこともありますし、そうすると、結局、せっかくお客様を呼ばうと思って、全部セットして待つてのけれども、お客様が来てから温めて出そうと思うと、結局食べさせる時はもうグジヤグジャになつてしまつていうの。確かにキッチンは、私はもう今の団地でも個別にあるべきだと、絶対ダイニングキッチンは反対と言つてゐるんですけども。そういう不特定多数になる時は、やはり相当経験した方がいろんな意見を出して、作つていかないと。今までには、ただスペースを割つただけっていうふうな発想から出てたとは思い

久谷　私は、グラフィックやってるんですけど、



昔、一九六〇年代にスイスのミューラー・プロックマンというクラフト・デザイナーがグリッド・システムという編集の方法論みたいなものを作りました時に、我々はなんか目からウロコが落ちるごとく素晴らしいもんだと感じました。今でもだいたいの編集、雑誌はそのグリッド・システムによつてやられてるし、雑誌界とか出版界に与えた影響はものすごく大きいんです。その一つの特徴というのは、グリッド・システムというのはあくまで一つのベースであつて、いろんな多様なものをある程度一定の美的な形でもつて誰でもがその個性に合わせて再現できる、クリエイティブな仕事がでけるということで、そのシステムは今までほとんどの雑誌、編集の方は使つてられるんですけども。

そういう点から言えば、システム・キッチンといふのも、実は一つのベースみたいなグリッドという形があつて、そこに住む人の個性って言うんですかね、によってシステムがいろいろ組まれる。ヨーロッパの人っていうのは非常に合理性の高い人たちが多いですから、決してそのシステムそのものは悪くないと思うんですね。我々も使い方によっては非常に日本人的なシステムの組み方ができるはずですから、他のそのシステム・キッチンの本来の考え方から言えば、言葉は悪いか知らんけども、本当はいいはずだと考へてあるんですね。

寺田 昔の生活というのは、あつちの分科会で話されている吉田さんに聞きますとね、非常に無駄のない生活をして、大根にしても、魚にしても全

部使つてしまふ。ほとんど捨てるものがいる。だから、消費品じゃなくて、全部自分のものにしてしまふ。これが例えばこういう社会になつて共稼ぎになつて、そんなことやれなくなつてくる。それで無駄なものがいっぱい出てくる。どんどん消費する。それをまた合理的になんとかしようと、エネルギーをいっぱいに使つてまた消費してしまう。本当の合理性というのは、非常に無駄のない生活をするということのはずで、それをやれば特に共稼ぎをする必要もないかもしない。ものを持つ必要もないかもしない。システム・キッチンにする必要もないかもしないと。そのところをどうも忘れてるんじゃないだろうかという気もするんですね。ただし、今そんなことを言つたら、そんな時代に戻れるわけないやないかという話はあるんですけども。そういうことももう一度チェックしたいですね。それから、京都市の集合住宅なんかのプランニングをする時、本当に悩みますね。六〇平米というスペースの中での、キッチンをどう組み込めるのか。

久谷 それをね、建築家が設計するというのは、実はおかしいというふうには思われたことないですか? 例えば団地にしてもそうですが、杉本 それは思いますけれども。ただ、

久谷 コストの問題でしょう?

寺田 そういう集合住宅で、二段階供給ですね。一人だけで入居される場合、内装は皆さんやりなさい。これ案外人気なかつたりします。主婦の側もそういうことがよくわからぬ。雑誌を見るしかない。誰もそういう合理的な生活のインフォメ

ーションがない。メーカーはしても、それお金にならないですし、行政がしようと思つても、たかの知れたインフォメーションしかできない。

やはり女の方は、さつきおっしゃったみたいに、システム・キッチンというものは憧れで、どういうふうなお料理されますか、器はどうされますか、と言つても、それに関しての細かい答えは返つてこないんです。雑誌で見ているこういうなん入れたいとかね。だから、まだそこまで疑問持たれている主婦の方は少ないと思うんです。

私自身、システム・キッチン 자체が悪いと思いませんし、実際、台所に立つた時に、まあ昔の京都のウナギの寝床の台所は娘時代に立つたんです。やっぱり今のが楽しいですね。冬は寒いですし、あそこ。男の人は立たないから、ウナギの寝床はいいって、ものも腐らないしとおっしゃるかもわかりませんけど、あの冬のすごく寒かったこと、井戸があつて、おくどさんがあつて、やつぱり、その時のことを見たら、台所が部屋の上にあがつたということが、もうすごい憧れでしたしね。システムキッチンへの疑問はこれから始まると思います。

小川 特に日本人は欲どおしいんですね。いろいろ建築の方もおられるようですが、我々もそうですが、昔の台所だいじょでしたら、日本料理しか当然作りませんわね。御飯炊いて、少々煮炊きするだけでよかつたわけですね。ところが今やも、我々もそうですけど、中華料理も食べたり、日本料理も食べたいし、西洋料理も食べたいですしね。そんなことだったら、もっと他のもん



も食べたい。器もやつぱりだんだん贅沢になつてくると、それに合うた器が欲しいということになります。それで、結婚して初めて台所に立つといふ女性が多いです。そうすると、そんな人が、多少金があると、システム・キッチンのところに移りますから、結婚して初めて台所に立つといふ女性も多いですね。そういう人が、そういうシステム・キッチンを作ることもいる人が、そういうシステム・キッチンを作る。自らメーカーの主導型になつてしまふと。だから、やはりこれから、広中さんが言われたように、十年、二十年、また五十年と経つことによって、その使い勝手のいい、ウソがほんまもんになるような時代というものが来るんじゃないかなと思います。

山口 いや、もう、小川さんのほうで今までを聞いていただきまして、非常に助かりました。やっぱり出るべき問題というのは、予想しておりましたのはほとんど即座に出てきたという感じが実感でしたね。皆さん、思つた通りにはまとめられないとおもせんけど、なんとか報告のようなことをしたいと思います。簡単ですけれども、こんなところで、どうもありがとうございました。

儲かりませ!? ハウスハンズ・ギャラリー

トーキリーダー 平田 滋 (プランナー)

担当 道家駿太郎 (建築)

吉村 嘉直 (庭園)

川上 健吉 (建設・家具販売)

塚本 敏雄 (庭園)

加悦 秀樹 (京都府商工部)

田中 良一 (紙製品製造販売)

上田 寛 (KDA)

岡本 百合 (KDA)

河合 玲 (KDK)

桑原 純子 (建築家)

井上 康生 (京都住宅)

出席者 (発言順)
植木 通 (テキスタイルデザイン)

儲かりまつせ!?

「京都掘り出し」市



いでしょうか、実際にやつておられるのが企画、その企画が行われる所が、マーケッティングという「場」と、お考え頂ければいいかと思います。

道家 本日は遠くまでご足労いただきまして、ありがとうございます。先程ご覧いただいた京都住宅のモデルハウスも含めて、ここには住宅メーカー十一社のモデルハウス（十一棟）と催事スペースがございます。この展示場は京都市と京都市住宅供給公社が主催で、それに十一社が協賛した形なんですね。「ハウスハンズ・ギャラリー」という名前ですが、この企画は建設省が昭和五十八年に打ち出した施策に基づいて立案されたHOPE計画、京都市地域住宅計画の理念によつてつくられたものです。

今回の分科会のテーマが「儲かりまつせ!?」となつていますのは、その理念に基づいて京都の新しい町づくりを提案していく中で、必然的に単なる金儲けではない、地域産業の活性化であるとかそこに関係してくる様々な職業の人々、そしてもちろん家を購入しようとする市民の方々、それらすべての人にとって広い意味で「儲かりまつせ」という要素が含まれてくる、ということなのです。

その辺のことについて、まずトーキクリーダーの平田さんほうから話していただきます。ちなみに、平田さんの経歴を簡単に述べますと、ご専門は南山大学の外国語学部を卒業されたのですが、現在はマーケッティングプランナーとして活躍されており、神戸のほうにお住まいです。マーケッティングプランナーといっただけではわかりにく

平田 このハウスハンズ・ギャラリーというのは住宅を展示するのが目的の場所ではございません。もちろん住宅も展示しておりますけれども、基本的に京都市が主催ですので行政の方針であるとか、それと新しい住まい方という観点からの生活者に貢献できる住宅の開発、そこへ参入できる地域産業の方への新しいチャンネルの開発、それらを全部ひとつにした企画ということで組み立てたわけです。

今まで住宅は、商品として扱われてきました。戦後ずっと、そうした形で消費者に売り込まれてき、現在に至つてようやく量的に充足した世の中になり、建て替えの時代がやってきたわけです。そうした中で、もう少し生活者とか地域という視点を取りもどさないと今後新しい産業展開ができない、ということが気づかれてきました。これは大企業、大手メーカーであつても同じで、だからこそ趣旨に賛同してこういうような展示をされているんですね。

それで、なぜテーマを「儲かりまつせ!?」にしたかといいますと、みんなに可能性が広がるいろいろなシステムをここにつくったので、せいぜい有効に活用して下さい、という意味なんですね。

道家 もう少し具体的にお話し願えませんか。というのは、たとえばこのハウスハンズには京都デザイン協会（KDA）のほうにもご協力いただきまして、新しい生活小道具とか、新しい住まいに



ふさわしい場——これは量産可能なようないくつかの部材を開発つくるわけです——とかの開発もお願いしました。この展示場をつくる過程で既にデザイナーの方がかかわっているんですね。

ハウスハンズ自体が、ものづくりにデザイナーや地域産業の人たちがかかるやり方を住宅産業にも一般化できないか、という考え方で生まれた企画です。

平田 具体的にいうのは、多種多様にわたるの難しいんですが、端的に言いますと京都デザイン協会の方に仲人役になつていただき、地域産業と大手プレハブメーカーさんとでお見合いをしてもらつ（笑）。その場所がハウスハンズなんです。京都市は都市居住を促進したい、町並を整備したい。生活者のほうは自分のスタンスに合つた住宅を供給してほしい。そして住宅メーカーさんのほうはもちろん住宅を売りたいわけですが、そのためには新素材とかの工夫も必要ですし、情報を集める必要も出てきます。地域産業のほうはといふと、デザイン面で工夫するとか、生活者に貢献できる素材・部材の開発とか、そういう仕事が開拓できる。

要するに、この場所にいろいろな技術情報とか智恵・工夫をもつた人が集まつてそれを生活者の視点から再構築し、暮しなおしをひとつの住宅の形として提案していくこうという狙いなんです。

大手メーカーや京都市としても地域産業の方についていたくほうが、一から情報を収集してやついくより楽だろうし、また地域産業のほうも産業領域の拡大としてビジネスになるでしょう。

道家 今日はこちらのほうまで来ていただいた関係で、あまり討論する時間がとれなかつと思いますが、今トーキングリーダーが話したことを元に、そして先程見ていただいたモデルハウスについてでも結構ですから、質問なりご意見なりをお聞かせ下さい。一応参加者全員の方に、少しずつでもひとつおりはお話しいただきたいと思つています。一巡するともう帰らなければならぬ時間にならうかとも思つうんですが。

平田 忙しいシニアで申し訳ありません（爆笑）。

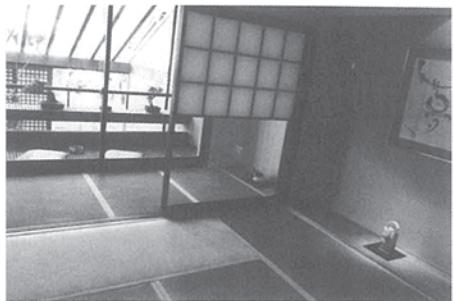
道家 では、そちらから順にお願いします。

植木 今、テキスタイルをやつておりますし、インテリアテキスタイルといったことも新たに勉強したいと思つています。新しい住宅がテーマだったので、参加しました。その中でテキスタイルにどのような役割があるのかを見てみたかったんですけど、今日は短時間だったの残念です。住宅が新しくなれば、またその内部のテキスタイル的なものも新しく変わつてくるだらうと思います。その辺をもうちょっと見たかった、というのが実感です。

たとえば新しいインテリア材だと部材を開発し、それが大なり小なり各モデルハウスに導入され、後日住宅メーカーさんに納入することになりますが、京都の地域産業に貢献することになるという仕組みです。それであ、「儲かりませ!」というタイトルになるわけですね。

緑とテキスタイル

付属品が主役になる



吉村　日本庭園文化協会の吉村と申しますが、今日は住宅ということで我々が仕事で関係しております緑化と、それからまた京都の町中の家のつくりがどうなっているのかを見せてもらいました。京の町家と言いますのは、最近では坪庭がどんどんくなっていると聞いたんですね。それからまた緑化にしましても、住宅同様、都市空間の中に光を導入するということが非常に少なくなってきたのが現状ですので、そういう光とか水とかの要素をもつて取り入れていく方法、それを見に来たわけです。

道家　モデルハウスを見てのご感想はいかがでしたか？

吉村　ええ、非常にまとまっているとは思いました。あの狭い敷地に坪庭を残すやり方なんか、大変参考になります。

川上　職業は、建設関係と家具販売と生活雑貨をやっています。一口で言いましてここでのモデルハウスは全部素晴らしいと思います。ところがですね、一番肝心なこと、この建物がいくらかかってどういう値段なのかがわからない。たとえばですね、土地と建物と内装とかの費用の配分比率、これをもつと明確化して一般消費者にもつと訴えかけることが必要だと思います。もう少し具体的な訴えかけをしていかない場合には、消費者にとっては非常にわかりにくいくらいじゃないか、そういう感じが直感的にしました。

塙本　造園関係の仕事をしています。質問といつても、こういった新しい建物を見せてもらったり庭を見せてもらうのがそれに對する答えるような

気もしますねん。そやから私の勉強というのは「見て歩く」ということ、これやと思います。

加悦　京都府からまいりました加悦です。時間がないので適当にモデルハウスのほうを見させてもらっていたんですが、行政も味なことをやるものだなあと感じました。モデルハウスについては、多分建築ファサードが限られているからだと思うんですが、玄関を奥のほうに入れて、前面に駐車スペースをとるやり方が印象的ですね。「うなぎの寝床」形土地への対応策として、新しい試みだと思います。モデルハウスでそうした試みを見たのは初めてです。工業的に生産された規格化住宅 자체をバカにしていたのですが、いくつも新しいパターンがありそうな気がしています。

田中　私は建築関係には全然縁がなくて、紙製品の製造卸をしております。ま、今回のデザインフォーラムで「どのセクションにしようかな」と考えていた時に、興味をひかれるものが多くてウロウロしていましたらハウスハンズという名前が目にとまりまして、これは一度見せていただこうということで混ぜてもらった次第です。というのは、私ちょうど三階建の住宅に興味をもつておりまして、それがこちらにあるというので、大変面白く拝見させてもらったわけです。今もおっしゃいましたように、建坪とか延べ床面積とか坪当り単価がわからないのはちょっと困ります。

それから、設計面でいろいろ工夫されたみたいですが、階段の狭いのは何とかならなかつたんでしょうか。私、昔は体格のいいほうだったんですけど、今の若い人は皆私と同じくらいでしょう、な



岡本 私はKDAの岡本と申します。はつきり言わせていただきますと、先程住宅サンプルを見せてもらいまして「これは欠陥住宅である」と思いました(笑)。まず一番最初に入れていただきました部屋が老人用のお部屋ということでしたが、ちょうどその下がガレージになるというのは「排気ガスで老人は早く死ぬ」という建物なんですね。

老人は早く死ね!?

住宅も暮らす

岡本 私はKDAの岡本と申します。はつきり言わせていただきますと、先程住宅サンプルを見せてもらいまして「これは欠陥住宅である」と思いました(笑)。まず一番最初に入れていただきました部屋が老人用のお部屋ということでしたが、ちょうどその下がガレージになるというのは「排気

ガスで老人は早く死ぬ」という建物なんですね。なんか階段を昇り降りするたびに両側の壁にぶちあたりながらという感じで、あれではちょっと不自由すると思います。それからもうひとつ、これは私の好みの問題かもしませんが、あれだけ細かく部屋を区切らなくてもいいんじゃないかな、とう気がします。小さな部屋がいくつもありすぎて、逆に狭い感じを強めているように思いました。

上田 上田です。現在、テキスタイルのレース、下着類などに使われるあれです、そちらのほうのデザインをやっています。この分科会を選んだのは、ま、どちらかと言えば個人的なショミ(笑)ということもありますけれど、全然関係のない分野に顔を出すのもひとつの勉強じゃないかと思つたからです。レースというのは、今ものすごい低迷期で売り上げなんかかなり落ちてきていて、しかもあくまでも附属品なんです。けれども、附屬品であるということは、考えてみれば何にでも使えるということですから、こういった一見関係のなさそうなところでヒントを得られるかもしれない、とムシのいいことを考へた次第です。

それから、まだまだあります。先程田中さんおっしゃっていましたが、階段が非常に狭い。廊下も狭い。あれですと人の移動だけでなく、家具の移動も難しいわけで、一階と二階の部屋同士で家具を入れ替えるなんていうことは考えておられないんでしょうか。

要するに、階段にしろ廊下にしろトイレにしろ、狭い土地を有効利用して家を建てるという日本の土地事情を計算されてのことでしょうけれど、毎日使うところが非常にお粗末なのは困ります。そして、リビングを広くとつて「一家団欒」の場として提案されていましたが、果たして必要でしょ

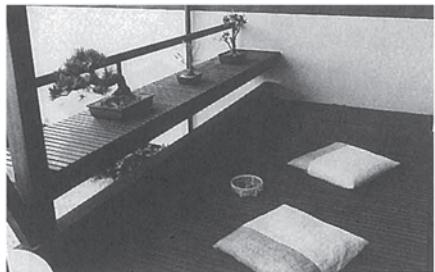
んか階段を昇り降りするたびに両側の壁にぶちあたりながらという感じで、あれではちょっと不自由すると思います。それからもうひとつ、これは私の好みの問題かもしませんが、あれだけ細かく部屋を区切らなくてもいいんじゃないかな、とう気がします。小さな部屋がいくつもありすぎて、逆に狭い感じを強めているように思いました。

上田 上田です。現在、テキスタイルのレース、下着類などに使われるあれです、そちらのほうのデザインをやっています。この分科会を選んだのは、非常にトイレが近いです。あの配置ですと、トイレまで距離的に少し遠い。トイレにいきたくなつても、なかなかトイレにいきつけないので、から、老人向きの部屋とはとても思えません。

その和室の畳一枚が電動で忍者屋敷のように上がって、床下収納庫になるという機能もありますが、すると老人が寝ている時にものを出し入れしようという場合どうするのか。寝ている老人をどかせてやるんだろうか、とか。なんだか欠陥住宅のサンプルを見せていただいたという気が致します。

それから、まだまだあります。先程田中さんおっしゃっていましたが、階段が非常に狭い。廊下も狭い。あれですと人の移動だけでなく、家具の移動も難しいわけで、一階と二階の部屋同士で家具を入れ替えるなんていうことは考えておられないんでしょうか。

要するに、階段にしろ廊下にしろトイレにしろ、狭い土地を有効利用して家を建てるという日本の土地事情を計算されてのことでしょうけれど、毎日使うところが非常にお粗末なのは困ります。そして、リビングを広くとつて「一家団欒」の場として提案されていましたが、果たして必要でしょ



うか。たとえば土曜、日曜、休日になると、どこか外へ出て過ごすことが多いですね。現実問題として、「一家団欒」ができなくなっているご時勢なんです、今は。そうすると団欒のための部屋に広いスペースをあてる必要がどこにあるか。

そういった生活設計になってきていますから、あの家は非常にムダであると思います。ひとつの意見として言わせていただきました。

道家 いや、なかなか刺激的な意見です（爆笑）。河合 レイデザイン研究所をやっています河合です。デザインと申しましても、インテリアからグラフィック、アパレルに到るまでのデザインですから、私の場合ファッショングすべてのコーディネイターと言ふべきかもしません。

言わせていただきたいことはたくさんあるんですが、時間がないということですし、一回見ただけではいいにくい面もございます。けれども、皆さん一所懸命やられているのに水を注すよう申し訳ないんですが、ひとつだけ言わせて下さい。

それは、日本の住宅には古きよき習慣といいますか知恵といいますか、ある種の調和のようなものがあつて、非常にシンプルかつ融通無碍にやつてきた部分があつたと思うんです。それなのに、工夫するのはいいんですが、あまりチマチマとやりすぎてその部分を崩してしまってはいないかとうう点ですね。ただ坪庭があります、うなぎの寝床を有効に使いました、だけではちょっと違うと思うんです。

たとえば収納スペースの扉ですが、日本には引き戸という素晴らしい知恵があるのにどうしてそ

れを使わないのか。小さな窓にブラインドが入つてしまましたが、透明感のある新しい素材を使っているとおっしゃるわけでしょう？ でも日本の住宅というのは、のれんであるとかすだれでもつ季節感を演出するという、季節とともに着がえる住宅だったんですね。ファブリック（織物・編物）の使い方がすごく上手だった。ブラインドだと、なかなかそういうことは難しいですよね。

テーブルコーディネーションなんかでも、テーブルセットを決めてしまうと、子供は汚しますしお客様がみえた時に困るとか、選択・変更の余地がなくなってしまいます。そうしますと、その家庭の主婦の個性も發揮できない。

ですから、今の住宅にも昔の住宅がもつていたよさ、融通無碍の部分というのを残しておくほうが多いと思うんです。

つくりつけの収納スペースを多くして家具を置かない、というのはひとつ工夫だとは思いますが、それならそれなりに可動部分を多くして、着がえることで四季に合わせていくといふ日本の知恵を生かせるような配慮もほしかったですね。でないと、だんだん画一化して、住む人の個性とか変化を容れる余地がなくなり、「あの家、友達と一緒にだからイヤだわ」ということになると思います。

ま、こういったことは今後の問題で、まずはこういった提案をされたということについては、大変いいことだと思います。感心した部分もございましたし、見せていただいてよかったですね。

道家 ええ、いろいろと厳しい意見も出ておりましたが、それにメゲず（笑）、主張すべき点は主張し



ていただきたいと思います。

桑原 今日はたまたまデザイン会議のほうにも参加させていただいて、そのままこちらへ来てモデルハウスの説明をさせていただきました。皆様に見ていただいたあのモデルハウスは、実は私が設計を担当させてもらつたんですが、手厳しいご意見をいろいろありがとうございました。非常に勉強になります。

具体的に言つていただいた問題点については、ひとつひとつ説明すると長くなると思いますのでこの場では控えますけれども、私としては後日ぜひまたお話ししたいというか、勉強させていただきたい気持です。

今回このハウスハンズのお話があつた時に、地域産業との融合ということが当初からあげられておりましたし、それはまた京都市全体の活性化でもあるというテーマで、非常にいいテーマだとは思つたんです。けれども実際に動き出してみますとなかなか難しいところもあり、作品としては既にできあがっているんですが、今後ともこういった提案を互いにくりかえしながらひとつのものを産み出していくかと思つています。

最初、何をつくつたらいいかわからないとか、地域産業の方にしても何を提案していいかわからない、というところから出発したものですから、結局すれちがいに終つた部分がござりますし、私自身不満足なところもたくさんあります。

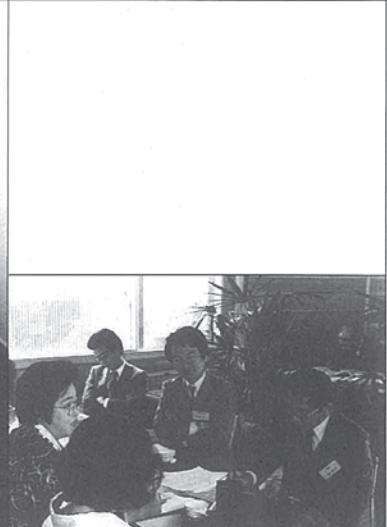
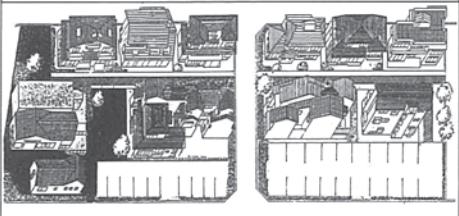
ですから、先程「季節とともに着がえる家」ということを言つていただきまして、すごく素敵なことだな、という気がしています。ファブリック

の使い方で変えてみては、というような提案はどんどん取り入れていきたいですし、こういった意見交換の場をもつともつと持つていけたら、というのが私の率直な意見です。今後ともよろしくお願い致します。

井上 一昨年から二年間ほど、京都の町について考える研究会に参加して、このH.O.P.E.計画のこととがつて、特に町中のほうではいわゆる町家というのが老朽化して新しくビルに建てかえられることが多いですが、次々とビルが並んでいくと非常にちぐはぐな景観になりつつあります。H.O.P.E.計画では、暮らしの面で京都のいいところを取り入れていこうということもそうですが、町並みの保存、京都らしい町並み景観を維持するという主張もあって、非常に期待しています。

今回見せていただいたモデルハウスについては、内部の工夫にまで目がいかなかつたんですが、外観上京都の狭い間口の敷地に建てられるような家が少なかつたので、少し残念です。もちろん、モデルハウスということで仕方ないとは思いますが。屋根の勾配なんかですと、今までの町並みを崩さないように考えたものも二、三目についたんですが、あれも実際に町中に建てるとなれば問題が出でくるかもしれません。たとえば見せてもらったモデルハウスの横に、まっすぐ切り立つた壁の家なんかがくるとしたら、せっかくの工夫が台無しになってしまいます。そういう点も含めて、都市計画とまでは言いませんが、ひとつひとつの家を建てていく時に、それが行政なのか民間なの

ハウスハンズギャラリー所在地
西大路通り平野神社北側（北区）
平野宮北町一丁目 461-3633



かはわかりませんが、皆で新しい町並みをつくつていけるようなシカケのようなものができないかな、という気がします。

谷 谷と言います。今のモデルハウスを建てた会社（京都住宅）に勤めております。今日は「儲かりません」というテーマでしたので、どういう意見が出てきてそれがどれだけ儲けにつながるのか（笑）、という形で参加させていただきました。設計者も言いましたように、ま、非常に手厳しいご意見でしたけれども、町中の住宅ということで非常に難しい条件があります。果たしてどれほどのものが提案できるか、そしてかえつてくる反応はどうであるかが私どもの狙いとするところでありまして、その意味では今日のご意見はとても参考になりました。これをどういうふうに生かすかを考え、今日のテーマじゃないですけれどしっかりと儲けさせていただきたいと、このように思いました。

平田 行政と市民と地域の産業、この三者が語り合える場ができるという意味なんですが、ハウスハンズはとりあえず五年間この場所にあります。日曜日なんかですと一日千人ぐらいの見学者がみえまして、このメディアを今後どう使いこなしていくかは、皆さんとともに考えたいと思ってます。ですから、どんどん意見を出してもらい、私もそれに応じ、そうして産業として洗練していくことで市民にかえしていく、そのためにはぜひ智恵と工夫と技術をもった方々にここへ集まつていただきたい。これが私どもの希望です。

岡本 ちょっとお聞きしたいんですが、あのモデ

ルハウスの敷地とか坪当たり単価はどれくらいなんですか？

谷 それはですね、敷地は京都市からの借地ですので土地単価は出ませんが、敷地面積が約六坪です。

桑原 正確に言うと五十五坪ですね。施工面積が六十五坪。

谷 施工の坪当たり単価は一応五十八万円という線を出していますが、これは規格設計ではありますんで、五、六十坪からこんな建物ができます、そしてこのモデルでそれくらいの値段でできますよ、という提案とお考え下さい。

田中 そうすると上物だけで四千万円弱ですか。ウーン、そこそこのお値段ですね。

谷 そこそこお安いのではないかと思つております（笑）。

河合 パンフレットの図面で見るより、やっぱり実物のほうがよくわかりますね。

平田 生活提案の場としては非常にいいのではないかと思います。

道家 お話は尽きないと思いますが、そろそろ時間ですので。青写真だけはどうこうしていくもし

ょうがないわけですから、こうして実際の形をつければ、今みたいにあゝだこうだということも出てきやすいですね。それを行政がやつたというのも日本初で、非常に面白い試みではないでしょうか。あとはこれをビジネスチャンスをつくる道具としてどう生かすか、儲けるかです。儲かるかどうか知りませんけど（笑）。今日はどうもありがとうございました。

1

三浦啓子 建築におけるガラス芸術

第一分科会は、"建築におけるガラス芸術"、光と影のこなし方という事で、お話をばすみました。御出席の皆様は、建築家初め、造園家、テキスタイルデザイナーの方、また鋳金の方、染色工芸家と多士済々というところでございます。まず導入と致しまして、私、ステンドグラスを中心にはうございましたが、私自身が制作してスアートに関しておりますが、私自身が制作してまいりまして、実際に建築物の中に施工致しました作品をスライドで百点弱見て頂きました。

それを受けた質疑応答の形で、会議自体は進行したわけでございます。また、皆様方さすがに御専門の立場から、深く光と影の問題を考えたつしやるので、大変鋭い質問が飛び交いました。その中で、常に意識されていたこととして、日本の伝統的な光、清家先生のお話にもありましたよ

うに、例えば、障子を透かして入ってくる光の美しさ、光の存在感というものを大切にする日本の心を、どう現代の生活、現代の建築に生かせるのかということについては、熱のある議論がなされたと思います。ところが現代建築は、窓ガラスを通して明るさのみを追求して来た結果、光そのものの質、光自身の存在感というもののへの配慮がないがしろにされていったよう思います。また、会議の中で出した風土性の問題、沖縄の強い光の中でも生きる色、京都の淡い光の中で生きる色、それを生かすための、風土と光の問題も大切な事だと思います。建築というのは長い歴史の中の一瞬ですが、この一瞬を創りあげるためにアーティストが協力しようということを話し合いました。



三分間スピーチ トークリーダーによる 総まとめ

3

川端道喜
食道樂は文化の美食家か

2

梅澤まさや
民家にこだわると
アートがハートになっちゃう

大きなテーマでございますが、私は決して美食家ではございません。ただの飲ん兵衛として、戦後海軍から戻つて、何しろ物のない時分のことと、京都弁でいうところの、「いやしんぼ」だったことの延長にすぎません。しかし、食文化を考えるということは、大変大切なことだと思っておりまして、特に歴史ある京都の文化については、無論多くのお話を解説が出ておりますが、意外なところで大きな誤解をなさっている場合もあります。そのあたりで、歴史的事実を少しお話しさせて頂き、共感して頂いたこともあるかと思います。

例えば京都の食文化の元が、宮廷文化にあったことはまちがいのことです。そして有職故実というようなものを聞かれますと、ほとんどこれは不変なもの様に思われております。しかし、

う、というタイトルで始まりましたのが第二分科会です。出席者の皆様は、私と同じように田舎暮らしの方、全くの都会生活者と、その生活の範囲は広いエリアにわたっています。皆さんのお意見は生活実感から来る説得力のあるものでしたが、その「民家にこだわる」ということは、ライフスタイルにこだわるということなんです。民家、特に過去の歴史、伝統を背負った古い民家に住むといふことは、過去の生活・暮らしににある部分では戻るということです。これは単なる郷愁とかいうものではなく、もっと深いところで、合理的な目で昔の暮らしというものを考え直すということです。そうしますと、実は古くさいと打ち捨てられるままだつた、暮らしのシステムやいろんな約束ごとが、

本当は、その地の暮らしにとつて大変合理的なものなんだということがわかつてくる。それは同時に、現代の暮らしの持つ欺瞞性や問題点が見えてくるということでもあるんです。この田舎暮らし、古い民家に住むというのは、もちろん、古い建物を器にすると、というだけのことではありません。もつと積極的に、例えば、都会では人糞は下水に流すだけですが、これを下肥として畑に環元してやる。自分で大地へ戻す。こういうトータルなサイクルを含めていうわけです。私は同時に焼物をやつしていますが、田舎生活が楽しくなって来ますと、アートがどうでもよくなつてくる。陶器を作ることと野菜を作ることが同じレベルになつてしまふ。そうして、自分達の暮らしをもう一度見つめなおす、そこが大切なんだということだと思います。

衣裳類が変化することは比較的少ないのですが、食物の方はかなり大きく変化して来ている。私は粽を作っておりますが、天皇の中にはこの粽が大好物で、月々の行事のきまりを無視して、年がら年中粽を使われた方もいた。また亥の子餅というものがございますが、これは元々宮中にあつた時は碁石ぐらいの小さなものなんですが、これが江戸庶民の間に安産のお守りとして入つてきたときには、現在の大きさになつていました。それが再び、京都の周辺へ逆輸入され、再び宮中へ採り入れられたわけです。このように、宮中のものが庶民の中で生活の知恵としてうまくアレンジされ、また大きな時間の流れの中で、宮中の食文化も相変化して來たんだという意外な事実をお話させ頂き、楽しく過ごさせて頂きました。

5

森本 哲
新「素食」のおすすめ

私の方、第五分科会は、新「素食」のおすすめということで進行致しました。私自身の暮しぶりは、本日御参加の皆さん方の中で、やや浮き上ったほど貧乏な生活でして、そういう私と皆さん方の話のズレみたいなところが、かえって話としては面白かったんじゃないかと思います。

素食の素は「もと」という意味です、原点と申しますが、食品そのもののあり方、環境問題にまで話は進み、最後は地球の将来という大きな問題にまで、お話を広がりました。

所詮、人間というものは、どういう環境にありましても楽観的に生きて行くしかないわけで、その辺りの皆さんの真剣な議論が大変に面白かったです。特に、学生時代の実体験に基いたお話し、世代の違い、時代の流れによって、素食のあ

4

小倉一夫
家にも銭湯があってよいのだ

私がしゃべるというよりも、参加した方々が話される内容をまとめるといった形で進行致しました。その中で出てきた内容としましては、江戸時代の銭湯というものを、現代にどう評価、位置づけるのかということがございました。風呂屋といふものの社会的効用とはどんなものか。まず子と親の勉強の場、教育の場であるということ。それから老人と子供という、日頃本当の意味でコミュニケーションし難い関係を近づけるということとも出ておられます。あるいは銭湯で放された本音の部分というものが、逆に内風呂になると出難いという問題がありまして、この本音の部分というものを、どう現代の家庭で引き出して行くのか、それをもう一度捉えなおしたらどうかという問題も大変重要な点だつたと思います。結果的には、これから銭

湯というものは滅びるとは言いきれないにしても、現実には、先行きのむずかしいものであるとは言えます。そこで、この銭湯というものが温存し、伝えてきた良きもの、歴史的に残してきた部分をいかに唄しやくするのかという点が大切であるわけです。私は東京で生まれ育ったもので、京都のことはあまり解らないのですが、東京では、今や住むということのアイデンティティが失われつつある。故郷を喪失してしまっている。その原因の一つとして銭湯の問題が浮かんできます。本来、地域共同体の共通認識を持つ場であった銭湯が減少して、共同体イメージを確保する手段が失われました。これは東京に限らず現代社会全体の問題であるとして討議が進行致しました。

り方が質的に違っているという御指摘。昔はみんな素食だったし、素食派・飽食派に分かれる余地などなかった。今、この時代には、意識的にそれを選択しなければならないわけですが、それは同時に、単なる食物への嗜好という範囲を超えて、住まい方、生き方の根底にもふれて来てしまう問題なんだというところで、「素食」のお話が、「生き方」のお話へと広がって来ました。特にその中で、皆さんも感じてらっしゃるが多いと思うんですが、「専門家による栄養学」の幻想性。

特に「生存」という視点から考えた場合、ずいぶん無駄なあるいは危険なことも多い。そして大脳の発する欲望に動かされて、生存ではなく「生活」レベルで現代人は動かされているということを感じております。

7

野間光輔子
ふだん着のおしゃれ、知恵のおしゃれ

6

吉田孝次郎
とことんほんまもんって何やろ

第六分科会は、ほんまもんって何やったかいなということでお話が進みました。特に今年は国際居住年ということで、今年のデザイン会議もこれにちなんで、いろいろお話が出たと思います。特に住まい、住居が連続して町並みを作っていく、その中で根本というのはどんなものなのか、ということが話の中心になったと思います。この分科会にお集りの方は、建築、グラフィックデザイン、服飾など十四名、それぞれの立場でほんまもんとは何かのウンチクを傾けました。

私の生まれました町内は三分の一を三井が占め、実際に立派な屋敷を構えておりました。その向かいが今のデパートの松坂屋の京都店で、江戸の中期以来、両者が六角町の巨頭として町の風格を形づくつて来たわけです。それが、皆様、財産税とい

私達の分科会は、あまりに身近で関心の高い問題が多くて、お話をあちこちに飛びましたけれど、その中で、現在は、衣にしろ住にしろ、正解というものを追い過ぎて、非常に忙しくもの事が変わって行く時代になっています。いろんな面でものが豊富すぎるという社会になつて、捨てることが大事な問題になつてきていると思います。これはつまり選択ということを迫られるわけで、そのためには自分自身の感性を高め、統一あるいは整理していくことが、自分達に要求されることになります。捨てるものと残すものを選択するための知性と感性を養つていかなきゃいけない、これが一つのテーマでした。

それから、マイホームを建てることは、平均的サラリーマンにとっての夢というか目標なんです

が、また、雑誌なんかでもモダンリビングの美しい夢をかきたてます。そして苦労して家を建てると、ローンに追われ、両親は家庭不在、樂しいはずのリビングルームには、子供達だけがさびしくとり残されることになります。土地の異常高値は、つきつめると行政の責任だというところまで話が進みました。それから話が変わりまして、中年の男性というのは、服装に関して、何を着せても似合わない、サマにならない（笑）という問題が出来ました。背広を着せるとピシッとするんですが、あとはパジャマを着せて何を着せてもだめ。そこから、中年が着て似合う衣裳の開発という問題が出ております。まとめとして、町も個人の住まいも、結局は一人一人の感性を高めていくことが

うものの存在を御承知と思っていますが、終戦後、町内で一番大きかつた三井が財産税の支払いのためにこの屋敷を物納してしまったわけです。これはね、京都にとって大変大きな象徴的な出来事だったわけです。それ以来、京都の古い町家がどれくらい壊されていったか、数えきれません。京都は戦災で焼け残りましたが、敗戦後自らの手で、税制という力で、家屋を、町並みを壊していくわけです。昭和三十年代以降、借金コンクリートといわれる建物が、これまで景観を壊しました。不況になってからは、むしろ近代建築も良くなつてきましたと思いません。こういう過去の経緯を含め、きちんと、歴史的な整理をして、町並みというものを考えて行きたいと思います。

9

平田 浩
儲かりまっせ!!
ハウスハンズギャラリー

18

山口昌伴
システムキッチン文化は偽物である

システムキッチン文化は偽物という過激なタイトルで始りました分科会ですが、システムキッチンの背景にあるものを探ることには、現代社会を見る上で大変意味があるのではないかということで議論が展開致しました。まずシステムキッチンとは日本語であること。その意味は各機能の組み合わせシステムということなんです。ところがこれを調理のシステムという風に、感覚的な誤解をして、これを導入すれば、料理がうまくなっているという錯覚を持つてしまっている。それから、システムキッチン文化という場合の文化とは何かという問題ですが、清家さんも言っていますように、新しさりといふニュアンスがあります。この古い感覚がいまもキッチン文化という言葉の中に生き残っているのではないか、という問題です。

四番目に嘘、虚偽とは何だろうかという事も議論されました。そして、嘘は文化の始りであると、文化というものは本来ウソっぽいものであり、これをほんとの嘘にもつてくるのが文化論だということで話になってしまいます。その他、話が広がって行きまして、システムキッチンというのは、調理器具ではなく収納庫なんだということや、まるでシステムキッチンからはゴミが出ないかの如く、その点が欠落していること、商品としての嘘、つまりグレードを高くしたいとプロ用しかないこと、あるいはロクに料理をしたことがない若い主婦の嘘、等々が論議されております。結論として、京都の昔からの台所に込められた知恵の再評価が必要であり、貴重な伝統を捨てて、新しいものに走ることの嘘が指摘されました。

私は、先日三月十九日に西大路通りの北区平野にオープンしました、京都市主催のハウスハンズギャラリー、ここに場を移して、分科会を開きました。この会場からかなり離れておりますので、討議時間が十分にとれず、御案内した私も、ほとんど気分はツアーコンダクター（笑）という状態でした。それでも一渡りお話を頂きました、なかなか刺激的な意見が出ておりました。

生活者レベルでの、京都の町おこし、また地域全体から、産業都市の再生の問題に関して、生活者としての視点からの技術情報が出ておりました。この日常の視点を持って皆さんに集つて来られるところに、生活者の精神が生かされます。このハウスハンズギャラリーは単に住宅を展示する目的で作られたものでなく、京都市が主催ですので、

行政の住宅方針とか、新しく住まい方という観点から考えた時、そこに住む人々へどんな形で貢献できるのかという試行、また、地域産業がこの新しい住宅づくりに参入できるチャンスを開発するという多目的指向を持った場として作られたものなんです。これは具体的には京都デザイン協会の方に仲人役になつて頂き、京都の地場産業と大手プレハブメーカーの間を橋渡しするということをございます。で、内部の設計思想についても、ずいぶん試行しているわけでございまして、この点につきましては、今日特別分科会に出席頂きました方々から、新たに問題点等を指摘頂いておりました。この中には、老人室の問題や、階段の広さの問題等、女性らしい、あるいは生活者ならではの鋭い指摘があつたことを付け加えておきます。

京都デザイン会議

第一回 総合テーマ 「'80年代への私の主張」 (一九八〇)

挨拶・第一回 京都デザイン会議実行委員会 会長

祝詞・京都府知事

祝詞・京都市市長

祝詞・京都商工会議所会頭

●基調講演・「デザインと文化開発」(京都大学人文科学研究所教授)

●講演と座談会(※印は講演者)

A室・京都スタイル誕生

B室・ファッショナルーツ

河合 玲 (ファッショコンサルタント)・横山俊夫 (京大人文研)

C室・美の集約

黒崎 彰 (京都工芸繊維大学)・山内陸平 (京都工芸繊維大学)

D室・比較装飾論

柴辻政彦 (装飾タイル研究家)・杉本秀太郎 (京都女子大学)

※川添 登 (建築評論家)

宮永理吉 (陶芸家)・横山俊夫 (京大人文研)

※浜野安宏 (浜野商品研究所)

※栄久庵憲司 (インダストリアルデザインナード)

宇野久夫 (美容評論家)

※海野 弘 (評論家)

●ビジョン討論会 「これからの京都とデザイン」

●私の主張

A室・京都のセールスプロモーション

B室・京都のニューコンセプト

C室・京都のクリエーション

D室・京都のプロデュース

●市民フォーラム

挨拶・京都デザイン協会理事長・実行委員長

対談・まちなみー創るもの・のこすもの

座談会・KYOTO—1994年のたたずまい

座談会・斜めから見る—京都とデザイン
座談会・町衆の考える—京都とデザイン

●パフォーマンス

「津軽の心」津軽三味線演奏

市川竹女

西脇友一

第一回 総合テーマ「デザインムーブメント 昨日・今日・明日」京都bauhaus考（一九八二）

挨拶・第二回 京都デザイン会議実行委員会 会長

林 大功
林田悠紀夫

祝詞・京都府知事

今川正彦

祝詞・京都市市長

●セミナー・1

bauhausから近代デザインまで

●セミナー・2

多様化への模索の百年(アーツ・アンド・クラフトからアールヌーヴォ・セセツションまで)

●クロスオーバーシンポジウム

都市はイメージでつくれる A室

機能からスタイルへ、プロダクトデザインもファッショニカ B室

本来、建築は偉大なる総合クラフトであった C室 クラフト福永重樹 V.S. 高松伸 アーキテクチュア

●ティーチインディスカッション

京都デザイン衆・激突

国立国際美術館学芸課主任研究官 宮島久雄

京都市立芸術大学教授 平田自一

環境デザイン 道家駿太郎 V.S. 久谷政樹 グラフィックデザイン

ファッショニンデザイン 清水忠 V.S. 山内陸平 インダストリアルデザイン

クラフトプロデューサー セラミックデザイナー

インダストリアルデザイナー ファッショニンデザイナー

アーキテクト ファイバーアート・プロダクトデザイナー

イベントプロデューサー テキスタイルデザイナー

クラフトプロデューサー ファッショニンデザイナー

インダストリアルデザイナー ファッショニンデザイナー

アーキテクト ファイバーアート・プロダクトデザイナー

イベントプロデューサー テキスタイルデザイナー

クラフトプロデューサー インダストリアルデザイナー

アーキテクト ファッショニンデザイナー

イベントプロデューサー ファイバーアート・プロダクトデザイナー

クラフトプロデューサー テキスタイルデザイナー

アーキテクト ファッショニンデザイナー

イベントプロデューサー ファイバーアート・プロダクトデザイナー

クラフトプロデューサー テキスタイルデザイナー

アーキテクト ファッショニンデザイナー

河崎稔夫

第二回 総合テーマ 二・一〇エキサイティング京都

21世紀へ、タネをまく知的興奮集会（一九八三）

●全体会議

ライブ／三・一〇 エキサイティング・京都 十人の興奮（トークリーダーの提言）

林 大功 西脇友一 柴田誠一 本郷公盛 上田年子 高谷信夫 小堀賢一 南澤弘
橋本奈良二 今西 慧（司会）

●第一分科会

それゆけ！ デザイン市長選 やってみなければ、始まらぬ、面白クリエイティブ

提言 デザインいっぱい運動

提言 デザイン運動の教祖・家元連合

第一分科会付録 京都にデザイン市長誕生！

●第二分科会

“デザイン”熟考 今日のところはとりあえず、コミュニケーションで、宴会を！

提言 頑固さと技術革新

提言 生活者からの発想の転換

（提言者及びトークリーダー）本郷公盛
（提言者及びトークリーダー）橋本奈良二
（提言者）高谷信夫
（提言者）小堀賢一
（提言者）柴田誠一

●第三分科会

京都ルネッサンス 皮膚と密接するデザイン、装飾の欲求

提言 ファッション産業とその環境

提言 京都ルネッサンス 装飾文明の復活

（提言者）上田年子
（提言者及びトークリーダー）南澤弘
（トークリーダー）河合玲

それゆけ！ デザイン市長選

第四回 総合テーマ「21世紀への提言」（一九八四）

開会挨拶 第四回 京都デザイン会議実行委員会 会長・林 大功 実行委員長・西脇友一

●第一部「リレー式マイ・プレゼンテーション」

私が選んだベストワン・ワーストワン

●第二部「京都デザイン議会」

第一委員会「文化と経済」

第二委員会「環境と産業」

第三委員会「情報と教育」

トータルプラン

——心優しき者たちへ、ニーズ文化論

トータルクリエイター 小山道子・久谷政樹

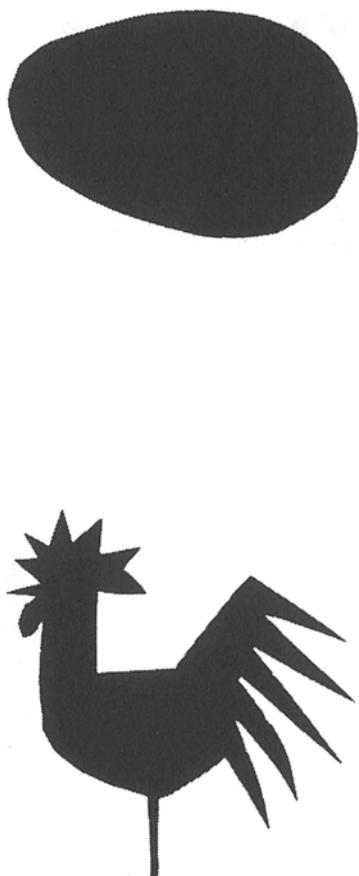
トータルクリエイター 恩地 悅・寺田晴彦

トータルクリエイター 黒竹節人・高谷信夫

トータルクリエイター 小川幸雄・真鍋宗平

各委員会報告（総括）

各委員会トータルクリエイター



第五回 総合テーマ

二〇〇一年京都おもしろ未来 明るい、楽しい、美味しい未来

(一九八五)

●開会挨拶

第五回 京都デザイン会議実行委員会会長・林 大功 実行委員長・柴田 純一

●講演 「予感——私の京都近未来」

京都・二足のワラジ

——デザイナーよ、中世の御師たれ!

京都のイメージ・エンジ——京都開国

関西コリドールプラン——近畿ルネッサンス

●燃えるプレゼンテーション 「気分は21世紀」

みんなで押せばコワくない

ホンネまるだし京都まるごとスイッチ・オン

●舌戦トークショー

「京都冒険談合——都市としての京都」

コードィネーター 今 西 慧
株ジャパンクラブ社長 清水 輝久
経済ジャーナリスト 竹内 令



第六回 総合テーマ「京都よおもてはワンドームか」（一九八六）

●開会挨拶

未来への提言
いま、なぜ“町”なのか

第六回 京都デザイン会議実行委員会会長 林 大功
第六回 京都デザイン会議実行委員長 柴田 献一
同・副委員長 宮川万樹夫

●二つのレポート・創造のまちへ

「つかしん」・マチの創造

京都・美都市計画

西洋環境開発・つかしん担当部長 井上 義信
現代都市政策研究会代表 土井 勉

●リレースピーチ「明るくせつないマチづくり」

伝統産業は親孝行産業

京都にはメディア機能があるか

再開発にも思想が必要だ

“女イメージ”的町がなぜうける

準備は整った、さあ出発だ

●ケンケンゴーゴー分衆会議「この指とまれ」

中・高年のマチについて考える

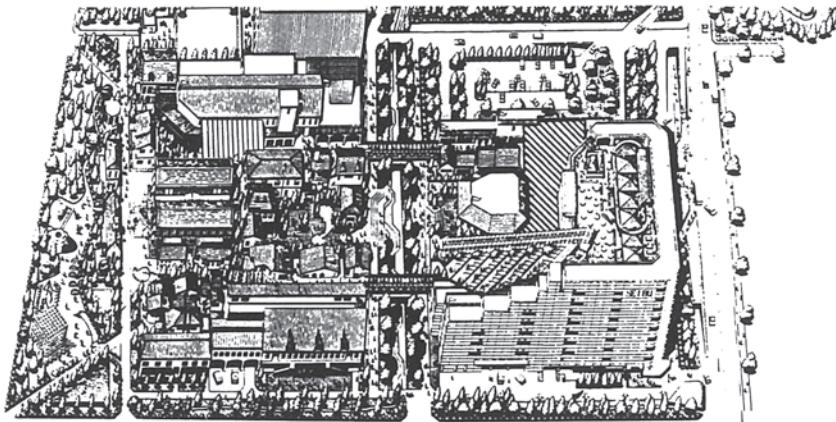
元気のできるマチについて考える

人の輝くマチについて考える

マチのファッショング度を考える

京都の商店街を考える

●スイッチ・オン「全員参加・マチのサバイバルゲーム」



親 指チーム
人差指チーム
中 指チーム
薬 指チーム
小 指チーム
指チーム



KYOTO DESIGN CONFERENCE 1987

みんなで語り合おう

第七回 総会テーマ スーパーデザイーニング'87 建都一、二〇〇年へ

● 建都一二〇〇年記念事業構想

● 反時計回りのすすめ

● 全員参加 九分科会トータルセッション

第一分科会 〈国際情報基地・京都〉

第二分科会 〈京の着だおれ〉

第三分科会 〈ものづくりから、ものひろめへ〉

第四分科会 〈工芸情報は国際メディア〉

第五分科会 〈景観都市の色彩を考える〉

第六分科会 〈京都発・一九九四年〉

第七分科会 〈国際性とは何か〉

第八分科会 〈グラフィック・マルチパワー〉

第九分科会 〈二条城に天守閣をつくろう〉

平安建都一二〇〇年記念協会理事長 木下 稔
柴田 規一

日団・NDK
KDK

伝青

KIS・ICC

KDA

室内・建築

KCC

JAGDA

一般参加

第八回京都デザイン会議
御参加の皆様

付・開催委員



● K D A		● 一般		● トーキリーダー	
石川	日	赤田 幸美	伊勢谷圭作	三浦 啓子	(グラスアーティスト)
若林	鈴鹿	小川 佳己	加藤 廣隆	川端 道喜	(ちまき司・随筆家)
庸行	芳康	桑原 妃子	柴田富佐子	森本 武	(大学助教授)
武夫	温子	内貴 秀和	中村 良三	野間光輪子	(建築家)
津守	井上	花房文一郎	伴 由美子	山口 昌伴	(GK道具学研究所所長)
順	捷之	南 佐代子	宮井 幸子	平田 滋	(プランナー)
西村	大石	鰐天 成雄	板谷 充代		
好雄	浩司	中村 恩地	今川 慶子		
萩尾	片桐	隆一	停 悅子		
茂久	嘉正	奈良 黒竹	今西 康生		
深津	小林	磐雄 節人	廣中和歌子		
昭夫	輝久	久谷 政樹	上田 寛		
藤井	島田	政樹	柴田 獻一		
行雄	純次	みねゆうこ	嶋 高宏		
真壁	鈴木	宮井 欣二	大木ミヤ子		
竜巖	竜充	菅原 良介	高宏		
		百合	橋詰 弘一		
		百合	岡本 雅啓		
			木下 透		
			岡本		
			大沢 英二		
			北村 正彦		
			北島三和子		
			植木 通		
			高貫 正子		
			西田 永子		
			岩崎 建吉		
			谷 康生		
			川上 駿		
			上藤 寧彥		
			城 清明		
			長岡佐紀子		
			日高恵美子		
			森下えり子		
			山田美美子		
			日根野祐子		
			福島八千代		
			能登チヅ子		
			高見沢 徹		
			北村 正彦		
			木下 透		
			岡本		



● 村山 義男 山本 則次

● 上田 年子 梅沢 弘子 河合 瑞 小山 道子 塩山 秀子 辻 美菜子 森下あおい

● 山本 次枝

● NDK

● 阿部コオイチ 熊谷 實 村上欣美枝

● ICC

● 伊部 京子 小川 幸雄 岸本 康志 高野 澄子 谷口 智子 中谷 浩志

● 伝 青 克己 谷口 主嘉 谷口 秀二 村田 新

● KIS

● 柏木桂三郎 野々村道信 橋本奈良二 本郷大田子 吉村 肇

● JAGDA

● 大野 好之 岡川 晃 橋本 繁美

● 庭 園

● 近藤 正雄 塚本 敏雄 福山 貢 吉村 嘉直

● KCC

● 浅田 篤志 池川 稔亮 篠持 宏

● 建 築

● 衛藤 照夫 大龜 久利 柏 義和 国吉 公一 熊谷 正信 倉本 恒一 栗山 裕子

● 构本 泰弘 谷口 康男 道家駿太郎 内藤 郁子 長戸 幸雄 三輪 泰司

● 御招待

● 京都府商工部 染織工芸課 大西 正洋 加悦 秀樹

● 佐貫 真一 岩崎 猛

● 京都市住宅局 住宅企画課

● 寺田 敏紀

● 野中 政秀
助平安建都一二〇〇年記念協会

第八回 「京都デザイン会議」 委員会構成（順不同）

主催／京都デザイン関連団体協議会（京デ協）
～～内は略称

十四、中華書局影印

京都豚食テサイン協会

京都インテリア産業協会 K.I.S

京都室内装備設計士協会 〈室内〉

協同組合京都久元ナホセン外リ

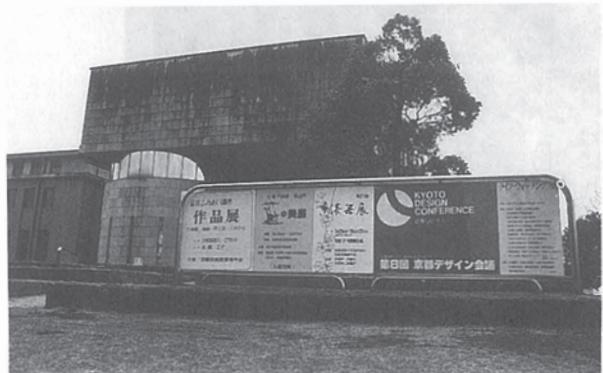
社団法人日本グラフィックデザイナー協会京都地区 〈JAGDA〉

日本庭園文化協会〈庭園〉

テーマ
ライフ・ウォッキング'88

開催日
昭和六十三年三月二十七日(日)

開催場所
日岡デザイン博物館





運営委員会

委員長 柴田 献一 〈京デ協議長・KDA理事長〉
委員 団 武夫 〈日図会長〉

上田 年子 〈KDK理事長〉

阿部 オイチ 〈NDK京都支部長〉

谷口 主嘉 〈伝青会長〉

橋本 奈良二 〈KIS会長〉

野口 茂 〈室内会長〉

南澤 弘 〈KCC理事長〉

長戸 幸雄 〈建築会長〉

田積 司朗 〈JAGDA京都代表幹事〉

川島 春雄 〈ICC理事長〉

吉村 元男 〈庭園会長〉

西村 智慧 〈KDA副理事長〉

実行委員会
委員長 今西 慧 〈KDA副理事長〉

企画・運営委員会
西村 好雄 〈日図〉

熊谷 實 〈NDK・パートイ兼務〉

山本 次枝 〈KDK〉

谷口 主嘉 〈伝青・財務兼務〉

本郷 大田子 〈KIS〉

鯛天 成雄 〈KDA〉

尾崎 要 〈KDA・財務兼務〉

黒竹 節人 〈KCC〉

国吉 公一 〈建築〉

大野 好之 〈JAGDA〉

小川 幸雄 〈ICC〉

広報・動員委員
山口 晴司 〈日図〉

小川 幸雄 〈ICC〉

京都銀行・京都信用金庫・京都中央信用金庫・伏見信用金庫・西陣信用金庫・京都相互銀行・南京都信用金庫

（順不同）

後援

石田 絹江 〈KDK〉
村上 欣美枝 〈NDK〉
海野 克己 〈伝青〉
吉村 毅 〈KIS〉
鈴鹿 芳康 〈KDA〉
簾持 宏 〈KCC〉
道家 駿太郎 〈建築〉
橋本 繁美 〈JAGDA〉
岸本 康志 〈ICC・会議録協力〉
吉村 元男 〈庭園〉

京都府・京都市・京都商工会議所・京都国際居住年推進協議会・助平安建都一二〇〇年記念協会・大阪通商産業局・助日本産業デザイン振興会・助国際デザイン交流協会・京都経済同友会・京都青年会議所・京都織商青年部

京都新聞社・朝日新聞社(支)・毎日新聞社(支)・大阪読売新聞社(支)・サンケイ新聞社(支)・日本経済新聞社(支)・共同通信社(支)・NHK京都放送局・KBS京都・毎日放送(支)・朝日放送(支)・関西テレビ放送(支)・読売テレビ放送(支)・オール関西・関西デザインニュース社

（順不同）

第八回 京都デザイン会議・会議録

発行・昭和六十三年五月三十一日

編集・京都デザイン会議実行委員会

エディション・アルシーヴ

撮影・中田昭・出水伯明

事務局・京都デザイン関連団体協議会(京デ協)
〒六〇五 京都市東山区祇園町北側二七五

A B L・三階(社)京都デザイン協会内

電話(075)541-10239

印刷・創栄図書印刷株式会社

住

リクルート世代のすみか

リクルートコスモスの

マンション

WITH
LOVE

新しいなと言われるより、
京都らしいねと言わせたい。



グランフォルム清水別邸 ホワイエにて撮影

新しさと伝統が融け合つてリクルートコスモスは育ちます。

新しさと伝統、新しい世代と人生の先輩にあたる世代。この2つを融合させることを基本にすることが大切。リクルートコスモス京都支社のあるべき姿だと考えていています。京都の素晴らしい伝統が生活のなかに根ざすとともに、常に新しさを生み出し育んでいる歴史があること。いつも新しい、という歴史に暮らしながらその土壤で、京都らしさを未来に伝える生活スタイルを求めて、私たちは、京のまち、暮らしこそ、人、住まいといっしょに生きる「京都らしさ」を大切にしていきたとっています。この京のまちで、新しいなと言われるより、京都らしいねと言わせたい。わたしたちがリクルートコスモスです。

宅建業免許 建設大臣(4)第2361号

(社)日本高層住宅協会会員、関西不動産情報センター会員

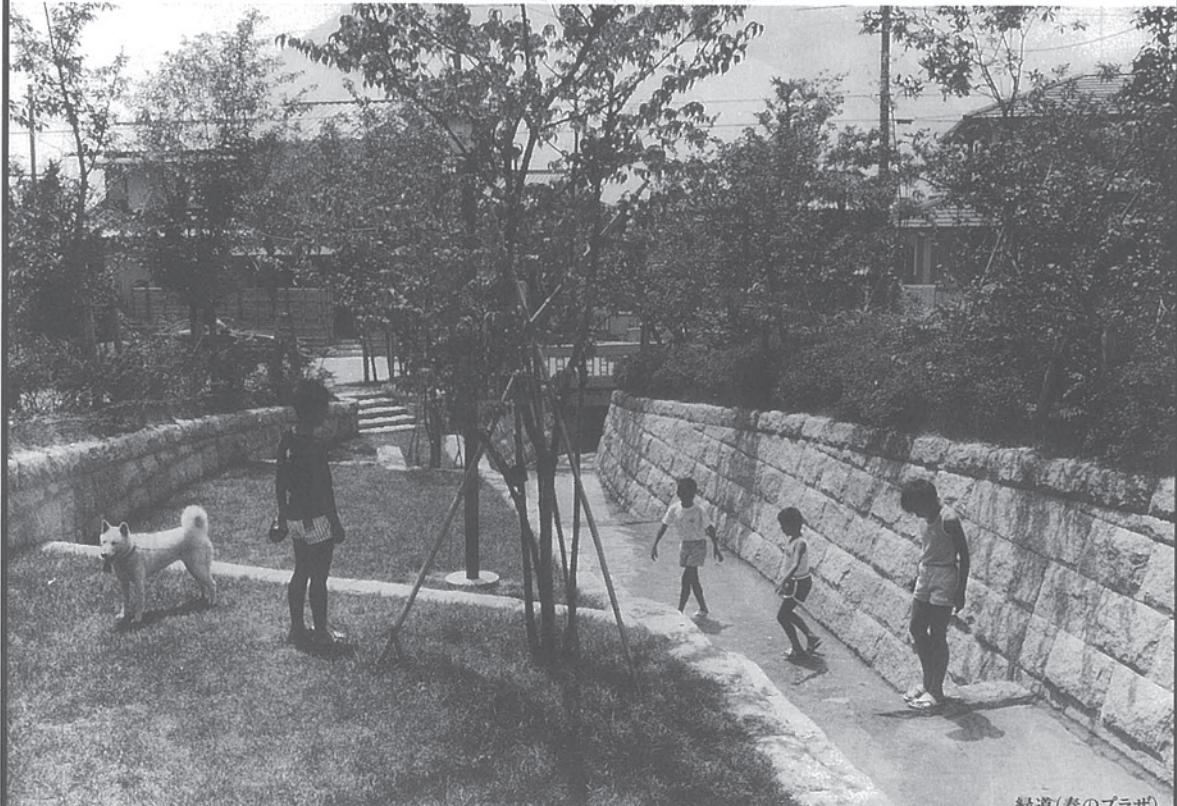
リクルートコスモス
株式会社リクルートコスモス京都支社 075(211)6411㈹
〒604 京都市中京区烏丸御池下ル虎屋町566-1リクルート明治生命ビル8F

3年たつと、
ずいぶんと成長
するものです。

西京
NISHIKYO

桂坂

京都の西に、丘の町。



緑道(春のプラザ)

桂坂は、誕生して今年で3年目を迎えました。その間に家が建ち、人が住み、緑が育ち、そしてまた家が建ち並び…。いまでは人の住む町らしくなってきたとともに、新しいお屋敷まちとしての風格もそなわってきました。さらにバードサンクチュアリーや古墳公園の建設工事も進み、文化の香りもほんのり漂いはじめています。桂坂は、まだまだ発展する町。ゆっくりと、未来に向かって成長していくます。どうぞご期待ください。

西武セゾングループ
SEIYO
西洋環境開発

■京都営業部

〒600 京都市下京区四条通新町東入ル月鉢町54
電話:(075)211-7491



京デ協

京都デザイン関連団体協議会

事務局/社団法人京都デザイン協会 内

〒605 京都市東山区紙園町北側 ABL 3階

PHONE:075-541-0239 FAX:075-525-0294

定価700円